

しまもの少も見え侍らむとて。うち連れてかへりぬ。秀衡心よかもふよ。花なきをありといひし。彼らが志を見んとてのてだてなる。四人のみを實のなき花を我へつらひて。ありといへども。泉むかりの無き故こそなしといひ。勇の錦戸をぐれたれども。諸ふころあり。元良の赤弱なり。伊達の義あるに似て勇なく。泉の勇少しといへども。義ありといへり。その後。九郎義經興州より来りて。秀衡をたのみ居けるころ。鎌倉より討手下向の時。秀衡泉むかり遺言して。義經を蝦夷へかとし。義名を後世よとめたりとかたり傳へたり

○予が友としける平澤何某といふ士。堪忍ぶよき人にして。ある時主用ありて。人多く具して行きける道のほどにて。二階より齒みがきをつかひて吐きたる唾の。あやまちて平澤が着せし上下へあたゝかよかりたれば。供人大よいきどほり。その家に入り唾を吐きかけたる者を引き出ださんとす。平澤とめて。志むしこの家をかるべしとて。その家に入りて。挾箱より着がへの上下を取り出だして着かへける。その家のものども。大勢いで、詫びけるよ。平澤申しける。あやまちなるべし。重ねて心をつくべしとて。出行きぬ。供人いひける。いかでそのまよゆるし置さ給へるぞといへ。けふの大切を

る主用なり。かゝるまよひのことと際取るべきこととあらむ。あが常守れる堪忍の。この事なりといへり。その後。また私用ありて。その供人を引き連れ出でける。折しも夏のころ。溝のけがれ水を打ちけるが。平澤が袴の毛をより下をけがせり。また、供人大よいきどほり。已に打擲よも及ばんとせしを。おしとめて。行きければ。供人申しける。いふがひなきことにて候といふ。左よのあらむ。けふの私用にて出でたり。私よ人を罵ること士たる者の本意違へり。たゞ堪忍だせば。世よ恥辱といふことあるべからせと云れしとぞ

○伊豆駿河の海邊にて。魚の海上にあつまり寄る時。海のおもて一等高くなりて。浪を打ちよまるを。ナブラとも。ナグラを打つともいへり。漁夫の詞なり。熊野でも。シヨナブラといへり。文字よか。潮魚群の義なり。ナブラの魚群なり。ナブラといふ詞と同じ○つむじといふ風。春のころの風地を吹くをもて。土埃を吹き巻きぬ。長閑なる日などよふと風いで。渦を巻きあぐるなり。辻風なるべし。また西國方風鱈といふものありて。人の肌をそがるなり。そぐ時傷むことなし。しばらくして破血して。その傷堪へがたし。このことをふせよ。古き曆をふところよして居るとき。そのうれひなしと。

ころの者の申し侍りぬ

○六憎として憎むべきもの六つあり。その詞は金持ちて高ぶるほど憎まぬなく。書を見せして物識り顔を見るほど憎まぬなく。人の物をやりて恩よきせるほど憎まぬなく。吝まほしき憎まぬなく。欲ふかきほど憎まぬなく。人をそねむほど憎まぬなく。

○紀州は豪富なる農家あり。田植の日、さをと女、凡二百五十人あまりもいづる。その日の朝、田植をじまるころ。近き山中にて、大いなる鷲の犬とあらそひけるが、終に犬をつかみて、虚空へとびあがりたるを、他より一人かけ采りて、田植の長いひけるを、あれを見られよ。鷲の犬をとりて、空に舞ひ侍るといへむ。其長詞をとめて、さることいふべからむ。今苗の植えはじめなり。衆人この事を知らば、みな大ぞら仰ぎ見るべし。さある時、この苗二百五十束ほどのおこたりなりとて、人々の語らざりしとなん。何ことよても物の長たる人々、かゝる心がけありたきことよこそ

○洛の七條は浄味七郎兵衛といふ釜師あり。家富みさかへて、多くの人を仕ひける。伏見は人相をよくするものありて、ある時、浄味を見ていひける。御身今何ひとつ不足なけれども、五十歳を起えて、後より、かならむを乞食ともなるべきほどのあしき相あり。つゝしみ給へといふより。浄味予は問ひける。人相のまかとしたる書も出て侍ることよやといへる。予答へていふ。人相の書くさくありて、その理かならむあることなり。むかし三井寺の永徳僧正の、安倍の泰親は問えるやう。それは綱難の相ありやといこれし。泰親見て、ありと云ふ。僧正いかよしてあることを知られたるかといこれし時、泰親こたへて、かりそめよも綱難など、申を事のあるまじき御身をもて、あるよかと御尋あること。則その相のある徴なりといひしが、果して木曾義仲都へ亂入の時、法住寺にて楯の六郎が流矢に當りてうせ給へり。されば、御もとも人相を見せられしところ。則ち食の相をまうけ出だしたるなれば、果したまへといふ。浄味の頭をふりて、身の持ちやうよよるべし。相を果たをなど、その意を得ざることなりとて歸りぬ。それより浄味の四十五六のとしよりして、おひくよからぬことどもありて、その身つひよ零落よおよび、八年がほど過ぎて清水坂に乞食となりおたるを見し人ありとかたりぬ。浄味七郎兵衛は阿彌陀堂といふ釜をこめて、暮せし釜師の上手なりき。

○木曾の山中など深山幽谷にて、岩背を取るよ、藤といふものを造りて、綱をつけて、夫のそれよ入りて、その妻樹々の枝より下げて、つりおろし引き上げなどして、谷間の岩背

を取りぬるとぞ。下の幾丈とも限り知れざるところなるよし。見し人ものがたれり。もしあやまちて綱のきれて落ちたらんよし。命なかるべし。又伊勢の浦にて。海士の蛇取るよし。乳のみ子など引きつれて。夫のいかいをつかひゐて。舟もやひせるよし。妻の海底に飛び入り。こゝかしこ貝をもとむるうちよし。子の乳を尋ねて。よくと泣く聲の水底に聞ゆるよし。今一つ得まくかもへど。子の泣こゑの聞ゆるよしひかされ。浮びいで。舟むり取りつ。息もつきあへず。子に乳をそふる其の有様。哀れしして。實に惻隱の心も發動をべし。世わたる業さまぐなる中よし。かゝる過ぎとひせる輩もあるものを。家ありて。その日を樂し過しつる身。いとありがたきことよあらむや。

○江戸下谷高岸寺といふよし。いつの頃か。弟子の僧二人ありけるが。一人は身持律義にして。常々寺の爲ともなるべきことのみよ心をつくせど。一人の僧は。戒行をもたもたで。大酒を好み。いさかひなどして。よろづ私多かりしが。ある時。什物を取り出だして賣るを。一人の僧見て。諫を加へけれども。聞き入れざりければ。此よしを住持につげ。かの僧追ひ出だし給はむ。寺の爲もなるべからむといふよし。住持はひと先論し見るべしとて。さびしく戒めたるまゝよて。捨て置さぬ。またある時。佛具を取り出だして賣りたるを

聞きて。一人の僧又住持が許し行きて。惡僧この度の佛具を盗み出だし。賣りたり。われら諫めたりとて。更に用ふる所もなく。住持もきて置き給へば。せひよ及ばむ。われはゆく／＼禍の寺におよびて。身もかゝらんことをおそれおもへり。もし彼れを追ひ出だし給はむ。われはいとまを給はるべしといふよし。住持は涙をうかべ。さあらば願ひのまゝよその方よしとまをつかひまべし。惡僧は今まばしわがかたはらよ置きて。おひ／＼論まべきといふよし。この僧大に住持をうらみ。我等いとまを乞ふ。惡僧を追ひ出だしたまはんとおもたるものを。それをかへりて罪なき我等よしとま給はること。近ごろ依怙の心よあらむやといへば。住持こたへて。さよあらむ。御身の今まが寺を出でたりとも。いつこへ行きても。たや僧一人の勤なるものなり。惡僧は今わが傍をとなれなむ。忍捕られ。罪人とならんも計り難し。さすればまが徳もすたれて。一人の弟子を失ふなり。ゆゑま今暫しのかたはらよおきて。彼が命をも延ばし。かつ／＼教誡をもせば。善心よ立ちかへることもあるべし。それをたのしみよし。まが傍をとなつことをせざるなりといへば。此よしを聞きて。惡僧も師の高恩を感じ。やがて善心よひるがへりしとぞ。

○ひとりの髪を車に載せて。十三四歳の子とおぼしきが。綱を肩にかけて曳き。髪が妻と

思もふ女の。幼子を背負ひ。六七歳なる子の手を引きて。道路に食を乞ひぬるを見て。ある人予といひける。かく乞食の分際として。多くの子をまうけ。引きつれて。よわたりすることせん方をさきものなるべしと笑ふ。予おもへらく。世にさまぐの草の露。うつせはうつるいろくなれど。よある人の。親子。兄弟。夫婦の中。へだてありて。國所を別して。住居をる輩。くくらべて。たとひ乞食してなりとも。互にむつまじく。此乞食が如くありたきものなり。おもふ。車をひける子の孝子なり。子を負ひし妻。貞婦ともいふべしといへば。その人笑をとめぬ。

○京都團乗の辻。烏の婆と異名をよべるものあり。はじめやごとなき方の局。みやづかへしてありけるが。吝嗇かざりもなく。勤めのうちこそむくの黄金をたくらへ。局身まかりて後。兄の魚商にてありける方より下り居て。兄ををめていひける。斯むかりの小利をもとめて。魚など荷ひありかんよりの。我たくらへたる黄金を貸して。日々大利を得なんことをとかるべしとて。みづからもあまたの金をふところよして。ひねも霜雪の寒さもいとせず。夜の三昧のあたりまでもこしりありき。夕に貸したるをむ朝まだきよ行きていせがみ。貪欲非道の行ひをれむ。人々是よあだ名して。烏婆と呼びよけり。あ

るに捨てられたる子を貰ひとり。飢よ及ばせて。養育よそへたるこかねを食ることのみをまじよしつれば。いつといなしよ。人ありて。子貰ひ婆ともあだ名せしが。ある時。女子の捨子をもらひ。懐よして家よかへるよ。その子の美貌いそんかたなく。明けくれ老婆を笑ひ慕へるあどけなき情愛よひかされ。さばかり邪見の惡老婆も。嬰兒が微妙の艶態よ。人外の魔心を奪われ。飢ゑさせ殺すべきの惡念を忘却して。おもてをねもごろよ食汁をまゆめ。むづかる時の夜もまがらすして。己が肌よあたゆめ。たのみて乳汁の養ひよ寐る目もねむえてそぐくみつれむ。いとうるにしく長なりて。烏が鷹を育てしと。人もうらやむ女兒といなれり。まべて兒女子のおとなびつること。痴情ひとたび去りて。愛態次いでまじぞき。艶情頗る容姿をつくらふ。いかなるえよしか深かりけん。老婆を兒の愛慕よ浮かれ。そひまつるよおもしろく。まがりて立つよ慰みぬれば。花とながむる折りしもありて。邪のおもひをまじし忘れて。蝶とし見つる時しもあれば。横著のこころを利那よ亡し。十年あまりを經るほどよ。容色嬋娟として。顔むせ玉のごとく。その艶麗たる世よ絶倫の美女となりしかば。誰かの戀情を憎しみ。かの石女が妬を醸し。怨愛想をやぶりて。養育したる丹誠よ慢じ。得たらぬものよ妻とせんより。妓女ともなして己が身の樂ま

み種よなきむやと。舞曲の伎藝を専よならいせ。名を玉野とよびて。遊里よいで。諸客の坐興をそへるよ。みな人こぞりて寵をるよひまなく。老婆のおもひひがみて。子といふものをもたぬむかしよまして。玉野が行住坐卧よのしり。衣服の飾りも表むかりを華美よつくろひ。裏よの木曾の麻衣をつゞれい。これの舞曲も揚うてして。心のまよ重ねおくも脱がま。かゝれば他ひとの料めを防ぐよ。絶えて養母がやぶさかなるもいいで。養育せられし精恩をうやまひ。身は捨てられし親をも怨まで。獨おのれが不徳を悔み。疑惑よ伐るよしもとよも。老の力の手弱をなげき。不義よ隨ふ貪着よい。衣の蟬もしりつゝ拂ひ。出でて母の徒然を思惟し。入りて薪水の勞よかひり。洒掃のつとめ。寢食の度。造次顛沛背くことなく。孝情の至れるげよ感むるよあまりあり。ある豪富の商人玉野が美麗なるをもて。こが常よ立ち入る貴人へ諂のため。玉野よ數金を擲ちて雇ひ。樓上へ誘ひ行きて。媒せんとするよ。玉野よその夜のかたくいなみて逢ひあふことをゆるさねば。いかなる故ぞと一間をへだて。心のほどをあながちよ尋ねとふよ。玉野の襟をくつろげ。あゝるひの裳をもたげ。肌着をさぐらせつゝ。斯る胸あつにつゞれをまよへば。帯紐とよきて副卧せん。客よ愛戀の情をうとからしむる恥らひい。只よわらわがうへのみよあらむ。親

をして人よあなどらしむるの憂よ堪へねば。明けて衣服をあらたよして。又のあふせをねぎつべし。それだよ母の命を待つのみと。袂よ涙をつゞみてければ。商家のあるじも感よたへかね。その過ぎのひよ似げなきを賞して。その夜の客をまげなくかへし。明けての契を約すれども。客よかげより伺ひつれば。さきよふたりがかたらひ居れるを。心を合せて材を貪るたばかりとのみおもひとりければ。あくる日の夕樓へて約をたがへて。従者よ下知して。辻よ忍むせ。玉野を殺せしついでよ。商家のあるじも害せんとよかるよ。玉野よそこよをらざりければ。商家のあるじと烏婆の物語して居けるを。二人の者を殺害して。何處ともなく失せたり。玉野の悲歎よ首へがたく。敵の浪華よのがれしと聞き。京都を去りてかよこ潜み。さしも美麗の面を焦し。醜き尼よ容をかへ。志のびくよからうじて。二年経ざる秋の半よ至り。をむせの葬を送れるかへりを待ち。母のうらみを浪華よ報い。敵の首を廳よ乞ひうけ。都よかへりて母の塚墓よ手向け。供養しけるとかや。今の烏が墓と土人よ呼べど。實に妓女玉野を葬りし跡といへり

○ある國の一宮の社司よ化名して。羊の大夫といへるあり。妾腹の子を務といひ。後妻の子を轉といへり。羊の大夫老いさらばへ。年七十を超えたれども。いかなる思慮かありけ

ん。務の三十の歳を經へぬれど。妻をも迎へず。家督も譲らざりけるが。大夫が性質懦弱
 として。仕ふる神のものいそねば。進退己がまゝとして。心むかざるをりからん。社頭も請
 づる勤もせざれば。親を見ならふ子の常にて。務も家も書見る窓のあれども。圍碁をなど
 りのなぐさみも耽り。終りの遊女が色もかほれて。財寶數多費しつれば。父の不興を蒙り
 て。妻がゆかりも身を隠して。父の病の床よりち臥し。死を待つむかりと人づてよきも
 も。あびてかへらんと思ふ志しなれば。家督を弟の轉に譲りて。幾ほどなく身まかり
 ぬ。務の妻の伯父とかたらひ。家督をゆづる證書を偽作し。廢し訴へ出でければ。官令二人
 の兄弟を召して。社職の道勤を問ふ。轉がこたへ深切にして。務が答。明かならねば。國
 家を守護せる職も疎しと。務の家を退けられ。轉も家督に定まりけり。後妻つらくおも
 ふより。佞人こぞりて。惡事を企て。事成らむ退くといふとも。怨の生涯もあまるゝことか
 たし。子をして仇を得さしむるの親たるものゝ心もあらざるべし。人の世もある暫しよ
 して。身をば安きも置くより志かじと。轉を招きてかたらふ。轉云ふ。このごろ時の羔羊
 の章をよみさしつゝ。この事母もかたらひて。身を退けれんとをおもへど。母の心をくみ
 かねて。折りこそあれと待ちつる。そやくも心づけ給へば。仰よしたがひまゐらすべ

し。これ羔羊の章意をおもふ。羊も數の子をうめるも。先は産まれし羊をこえて。後産
 まれし羊の子の。その乳汁を飲めることなく。先後順を違へざること。獸類だもおのづ
 から道あり。父の遺言を背くも似たれど。兄なる人を退けて。家督の社職を嗣ぎたりとも。
 憐たる道もかなねば。獸類だもおよぶことなし。我禽獸もしかざる身として。神も
 事ふといへども。神慮いかでか納受し給ふことを得べけんや。いざ遁世してしりぞくべ
 しとして。兄の務も家督をゆづり。母のふる郷へ閑居して。孝養まましく至れりとなん

○予洛陽もあそべるころ。比叡の山ごえも平崎の松見んと。高野村なる茶店も憩ふ。こ
 の里の名産として。饅頭を造りて。家ごとく驚けり。口取もとして出だせるをりから。十歳をか
 りなるやつれたる兒の面ざしのみ。いと氣高く見ゆるが。かたはらも来て。見居たれば。
 是を分ちてあたへける。取りてそのまゝ食ひしを。家あるじの聲あらゝげ。など載きて
 食ひざるぞ。ただけくといへども。終もそのまゝ持ち去りぬ。あやくのさかり鄙の言。
 左もありぬべきことよやとおもへど。その面ざしのおまはりも氣高く見えたれば。兒の御
 身たちの産の子もや。よき子を持たれしことなりといふ。いなとよ子もして侍れども。
 故にさるおん方より預りかけるものなりといふ。げもや氏より言もして。かゝる貴

人の子たりとも。その傳のいやしければ。おのづからそのいやしきよりつるべし。人のその地の質を受け。性より有てる土地がらの氣質を。天地の左あらしむるとも。非情の草木だより移しみれば。類を變ふる自然として。いそんや善なる性を備へし人の際より於てをや。童心百年取捨おなじく。善となく惡となく。幼き時はおぼえしこと。身を終るまで忘れざること。七情の身より支ふることなく。無我の心一なればなり。左あれば先入をつしみて。はじめより善を教ふべし。これより似たる一語あり。江戸より諸崎某といふ人あり。予が母かたの縁よりして。豪富の米問屋なりしが。ある年、伊勢參宮のかへるさより。遠州佐夜の中山より休らひ。ところの名物館の餅を食ひける時、多くの兒らあつまりて。羨ましがし見わたるより。残りの餅を兒らより分ちあたへたれむ。十歳むかひの童ひとり交りる兒らをきりぬけて。床几よりつぶやくやう。人のあましく食物など。やそこもらひて食ふべきといへるが。物ごしの耳よとままり。童のやうきをうかふより。負ひたる子を脊よりかろし。介抱しつる仕こなしのねもごろなること。尋常ならねむ。諸崎のあるじよむかひ。幼き兒を負ひたる童の。いづこの家のものぞと問へむ。この山かげなる農夫の子よて。このほどこゝら不作として。過ぎこひしがたきもの多く。それらが家より養へり。童と親の質を繼ぎて

や。性直としてゆがめるをきらひ。調度たりとも曲りてあれば。人しらぬ間より正しく置きて。おのれが食より當らざれば食ひぬ。人のあましく物を食せむ。訥辯として用をととのひ。善をかたりて惡をいひねむ。あられみ養ひ侍りぬといふより。諸崎志きりよほしくといへば。それこそ彼が幸ひならめと。母と兄とよ告げやれば。よろこび来りて。主ともよ奉公の事ねざつれば。こゝより主従契約して。中山より得し者なればとて。名を中吉と改め。召し仕ふより。十年の勤め私なく。まて主人の非をおげ。諫むること志むくなれむ。つひよりうるさく思われ。忠言耳よさかふのならひ。こては不興をうけ。二十の年より身を退き。ねもごろよせし方を頼みて。志むしがほど忍びけり。斯れば諸崎のみよかざらむ。財集まれば奢れるならひ。己れは儉を守るとまれども。おのづからゆるむ心のいできて。家さへ人よりち任せ。妾宅を營み。庭園の作り商人より超過し。樹木泉石より萬謚の黄金を費し。茶道蹴鞠の遊興よふけりて。遂に家人より禮を薄うし。漫りよ姪奔のみをことよまれむ。妻の關雎の戒を失ひ。密夫とよも何こへか奔り。従者のことよく是よりみだれ。下みを貪り。掠むることを争ひ。内より家を保つ助けをうしなひ。外より産を傾くるの借財多かりければ。大厦のたふるより一木のよくさふる所よりあらざれば。名よおふ豪富の家なれど

も。つひは財寶を分散して。あるじの逆井といへる片田舎に潜み隠れ。持ちつたへたる調度のたぐひをけふりの代となしつゝも。三とせむかりを送れるうち。身の生を養ひざるに勞れ。住家の明暮の交しきま壞れて。瘦まをかされ。病重りて。死を待つむかりといへども。訪ふ人だもあらざりしが。故中吉の心正しく導引の業を過ぎのひととして。主家のやうを伺ふ。主人の病あつしと聞くより。とみは逆井の里に赴き。まひて看病のつとめをねがふ。不興をゆるされ。介抱すれども。その日をおくる過ぎのひだまなければ。晝の野菜を商ひて。飲食の資となし。夜の導引をこゝして。主人が藥の料に替へ。夏の枕床を涼しめて。炎熱を去りぞけ。冬の肌もあるじをあたゝめ。身の藜藜の鹿糞を嘗めて。よりく鯉魚の羹なども。誠忠に至らすといふことをなれば。諸崎おひく快方におよび。起居もつねに違はねば。ある時。中吉主人はむかひ。黄金五兩を取りいで。吾もひとつの思われ侍れ。まばしのいとま給はるべし。これより浪華に赴きて。主人の家を再興まべし。大利の時を得てうべく。是を元としこのあたりは。小商して待ち給へ。黄金のわのれ理を説きて。主家の支配を勤めたる二人をまかし。借りつれば。とかくよいとま給ふべしとて。涙ながら願ふ。主人も感涙をとめかね。路資を分つて受けをして。旅行は財の妨を

り。身を退きし頃。習ひおぼえし。導引の業こそ。まこと旅路の資なれとて。いと安々と浪華におもむき。おなじきまざりたよりを得て。堂島邊に徘徊するうち。算筆の道くらからざれば。富家のあるじをしまれて。ことよし詳し物がたりければ。主家を起すの忠節なればとて。力を合せて得させんといへるより。諸崎を浪華へむかへ。主従もとよりかの中吉が忠功をあらわさんとて。□の内の中とあるして。これを家の印とし。今も浪華よとみさかゆとぞ

○江戸靈巖島諸崎庄右衛門がめしつかひ中吉の。遠州佐夜の中山なる農夫勤助が子として。その忠節前文に記す諸説の如し。中吉主家再興のため。浪華に赴く時。夜に入りて故郷を訪ひ。ひそか一首の和歌を述べて。子育観音の堂にちかひ。導引の業を路の資として。主家のたふるを再び起せり。その折からの歌なりとて。故地の堂もあるしあれども。誰がせし業なることをあるものもなかりし。予が江戸におもむくころほひ。此事を聞きつたへて。巻主を訪ひ尋ぬる。越熊といへる留守居の僧。この歌を譜記して。聞せたるに感涙をさめがたくて。書きとめつ

世よですば又とい越さじ我ための命なりけり佐夜の中山

かの唐土の司馬相如が昇仙橋の柱に題して。駟馬のくるまも乗らむん。ふたへび此橋を過ぎらじと書きし。かのれが出世の志にて。いと自領の私なり。中吉がこの歌に於ける。忠節のためは故郷に誓へる辭藻の意。西行の古歌もまがり調幽玄ならむといへども。誠を盡まのおこなひよかいて。相如が及ぶところよあらむ。諸崎ひとりの女子ありけるを。中吉よめあひせて。家號を護り。庄兵衛と稱せり

○予が交りし人の子。兄弟常は争ふものあり。兄は砂糖を渡せとし。衣食よおどりて懈りつれば。家貧しくまてまうけなく。弟は鹽をあきなひて。鹿食鹿服し怠らざれば。家富みさかえて不足なし。その兄弟は弟が富めるをたのみて。財を借りて。その世業を送るといへども。儉を守るの勤めなれば。いよく貧しくなりゆきて。多くの財を弟に乞へども。肯んせざりければ。あるをりからよ。その兄の予が草菴に入り米り。歎息して云ひけるやうに。親類多く富めりといへども。兄の貧しきを資けざる。あかの他人は劣れるなるべし。かゝれば今より商人をやめて。武士ともならんことをおもふといふ。予は聞くよりもあつれよおもひ。武道のたしなみあるかゝらねど。さやうのいやしき心を持ちて武士ともならむ。危きこと深淵のどむがごとく。又薄氷をふむよ似たれば。心よ一ヶ

の工夫をめぐらし。弟の資を得んとおもひ。予は傳はる秘し藝あり。いづゆる能の狂言とひとし。教は随ふ心あらば。身を立て家を起すべし。若又稽古は違へる時。身を正せと速きよあらむ。よき慰の戯なれむ。師弟の約をかたく契りて。この戯を習ふべきやと。詞を正して云ひければ。親屬どもの資もありて。身をも立て。家をもおこさむ。否めることかゝりて。やがて師弟の約をなしけり。さて衣裳手もとよあらざれば。明けて来るを待ちたれば。約を違へむ。米りけるよ。さあらば指南をべきなりとて。彼の温袍を取りいで。着たる小袖と脱ぎかへさせ。布衣の姿に取うつくろひ。着束のその身は馴れぬる迄。その姿にて居るべきなり。衣體整ふをりからよ。授くべきものあるなりとて。今まで着せし小袖をとりあげおき。月をわたり日をつみても。衣類のいまだ身は馴れむとて。授くる物もあたへざりしが。漸ひとよせも過ぐるうち。弟兄の鹿服をよろこび。かくて家を保つべきと。儉を守れるやうすを賞美し。予が草庵に米て。告ぐれば。予も又兄の心をかたりて。兄も弟がよろこびをつけ。身を鹿略の間におきて。あむらく驕飾を廢する時。求めむしても財に至れり。つとめよやといへるよ。いくやどなく弟兄をあつれむからよ。感じて多くの財を贈れば。ままかたく儉を守りて。身も立て。家をも起し。その富めること

第も考らざりけり

○ある人堪忍の二字を座右に志すしかまて。常これを見る時。おのづから心止りて。日用の心がけよろしといへるものあれど。堪忍の執行せざれば。身感ぜざるゆゑ。堪へざることもよく忍ぶことなり難し。予も堪忍を守れることをおもふ。乗合の舟ほど事なる。便よきことなしと思へば。僕一人をつれて。京より夜舟にて浪華へあそび。また浪華よりも又舟にて京へのぼりつ。ひたぶる舟泊れるを樂しみとして。堪忍の稽古せり。人の世あること舟乗り合ひて泊りしをりをおもひいづれば。いかほどの不自由たりとも。忍ぶ堪へざることなかるべし。たとひ疊一枚の家に住むとも。乗合舟の優るべし。夜泊のせつなき膝を折りて足を縮め。人の足を枕として押し合ひ睡らんとすればゆめり起され。少しまどろむとかもへば。軒目さめて。起ふことも心任せざる。たとひ一夜といへども。生涯もなほひとしかるべし

○茶道を好むもの。他の手前をも辨へなく。習ひたる義のみ心得。これこそ。なが流もなく。叶ぬ品なりなど。無益の器を高料もとめ。飾きたる。ふる道具店もひとしく見るだ。なかく。よりるさかるべし。又利休居士が詞も。貴き價の器物を愛する。心利欲走るがゆゑなり。缺けたる摺鉢も。時の間合ふを。茶道の本意とまといへり。数奇屋附といふものも。主人家居と道具自負し。客のみて云ひける。しが好けるをさやのうち。何よりたること。なし。よろしからざるものあらば。詞したがひとぶくべし。少しも速慮し給はぬ。いひ給はれとありければ。客の諸なき人にて。家といひ。器といひ。行届かざる所もなければ。只このうち。そのもと。堂人なからましかば。風流雅境これ過ぎたること。あらじといへり。こゝいとおもしろき諷諫なり

○高貴の人など。卑き者と利を争ふべからず。人君たる人も。民と利を争ふ時。下賤のもの。ごとく志しなかりたりて。上をおぎむくことのみを考へいだまなり。殿の亡ぶる。とじめぬ。羣臣民と利を争ひしより。おこれり。ある人隠遁して。茶道名高かりしかば。茶器を業とせる商人多く来る中。古唐津の水指を持ち来りて。金一枚購ひ給はるべしと云ふ。予もその席にあそびてありけるが。主人予もむかひていふやう。ほしき器なれども。金一枚にて。高直なり。價ひきくせを買ひ取るべしといへるを。商人聞きて予も云ひける。知らせ給ふほどの重器を。他の商人の手もわたらば。なかく。かゝるあたひ

うるまじきを。われらなればこそかく廉價よそまゐらるるなれ。只申すまゝに買ひ取り給へかし。利潤うすければ。是よりひまぐり納めがたしといふ。主人また予よいふやう。いかよ思ひ給ふぞ。價高きよ過ぎたりと思ひぬと云ふ。予こたへて。その品其許の心よ叶ひ侍るよや。いかよといへば。心よかなひてほしけれども。價の高ければ。もとめがたしといふ。予又答へて。その價よ買ひとり給へ。いかよとなれば。商人のよき道具なれむこそ。その許をさして持ち来れり。さあらばこの器金一枚よ買ひ取りたまはれ。器のあたひにもそやそのもとが定規なり。この器いかなるゆゑありて。他へ行くとも價のこゝ許よてまゝなれり。その價また他よて高率ある時。その許の茶道のよやすたれりとかもひ給ふべし。試よまづ買ひ取りて心よかなはれ。つかひたのしみ給ふべしといへむ。主人その詞よ感じてや。いかよもおもしろし。風流の道さるべきことなりとて。いふまゝの價よ買ひとりぬ

○器物よかざらむ。何よても高き價のもの高く。低き價のものひまぐり購ふこそよけれ。高きものをやすく買はんとかもふ志。高き人の悦とする所よあらむ。むかし洛の粟田の清水寺の境内なるや。また地主権現の社内なるや。主馬判官の建てたる燈籠を掘り出

でたり。石商人の手よ入りたるを。人のもとめんとて。價を問ふ。金十五兩なりといふ。そのものすてよ求むるよおよびて。清水寺の役僧聞きて。二十兩つかひすべし。うるべき方をとめて持ち来るべしとて。買ひ取りぬ。今清水寺の地よ在りとぞ

○予のいとけなき頃より。詩歌の道を好み。たまゝ作文などせしをりから。稿成りて父よ見する。一としてほめられたることなく。只無益のことなりとて。座右よ投げ捨ておかれ。他の者の。見てほめたまへば。去りとしていかゞとのみおもひすごし。か。後よ妻よむかへたる女の物縫ふことの。人よすぐれて。小袖など一日よ一重ねづゝ縫ひて。餘事までもことかゝねば。物縫ふ職人の見て驚くむかりよ上手なりけり。予ある時もの縫ふをひたぶるよ愛で賞しけるを。妻の云。三歳よして母よ後れ。繼母よ育てられ。いと厭しき生質よて。五六歳より水仕のまごをつとめ。七歳より手習ひ。物よみ。裁ちぬひを教へられ。實の子ならねば。教訓足らじと末よ至りて。そしられん。くちをしとて。羽根つくあそびだよえせで。只物ぬふことなどのみよいとまなかりつれば。折りからば。おげしき母よと。おもひしかども。今となりて。物縫ふまごを人よほめられ侍る。偏よ繼母のなきけ薄からざる慈愛なりといへるを聞きて。予がいとけなきころの作文をほめられざる

の。いとありがたきをおもひあひせぬ

○丹波の國と丹後の國なる堺に毘沙門山と號するところあり。その麓の村にいと貧しき農夫あり。二人の娘ありけるが。一人は先妻の子にして十七歳。妹は十歳なりける。父の姉が十歳の時身まかりて。二人の娘母をつかふることに孝行いよく深切にして。母のやしなひ怠らむといへども。幼き輩のそたらき。三人の過ぎのひととまよふべきかたもなく。一人は果物を商ひ。日々市町に出で。姉は山野に行きて薪をこり。ある人雇はれて。わづかの代にかへて。母をそぐくみ。時として食ふ乏しきをり。くだ物をも賣らで。母もあたへ。姉は人より。糧ともなるべきものを乞ひ。二人ともよとかくして日をおくりけるが。ある時。二人つれ立ち人なき所まで。ひそかに物がたりけるやう。わらの母をやしなひんとせれども。御身ととも働きたればとて。なか／＼衣食のふたつ。母も届くところなし。おもふに都の人あき人のありと聞けり。そを尋ねて。この身を賣り。その身の志ろをもて。母を養ひたくおもへり。御身の歳まだいとけなきといへども。母を大切やしなひまゐらむべしと。涙せきあへむいひ聞かせければ。妹はあねよとかれんてとのかなしく。とも泣きつゝいらへだせざれば。このこと母に申せまじとて。な

だめをかして家にかへりぬ。その日より暮れぬれば。夜ごとよかの妹の見えざれば。姉は妹が行き方をひそかに。母も尋ねける。山の毘沙門堂へ心願ありとて。詰づるなりといへり。殊勝さいとしくおもひぬたる。折りふし雨のいたく降りけるが。姉の妹はいふやう。今宵はあめふりて。道も暗く。小坂のけしきを行きて。けがありて。かへりて母の歎きもあらん。あけて晴れなまうづべし。たゞやめ給へととむれども。けふ七日の満願なれば。母の事。姉のこと。天王よねがひまゐらせて。いかでかの偽り申すべき。ひたすらよゆるし給へ。ゆめこの事母につげ給ふなとて。大雨もいとこで。夜半のほど。一里あまりもへだよりたる峠の堂へ出で行きけるが。からうじてそこよたどり行きて見る。堂の内赫々として火かげのかがやきければ。いとふかしくおもひて。内をうかきひ見る。二人の賊ども雨ぬれたる衣類を焚火はほしてゐたり。いかで賊といふべき。旅人の雨やどりせりとおもひて。そと内へ入れば。賊の物音は打ちおどろきつ。目をとめて外の方を見れば。十歳むかひの女子。ひとり蓑笠かつぎて来り。雨夜のくらさ。たゞひとりこゝに來る。連はかくれしやといへば。連はなしと答ふ。またいづれへ行くとて此ところへはきしどといふ。この御堂の本尊へ願ふことの侍りて。まかも今宵

の満願なれば。まうでつるなりとて。まゝみ入りて。まむし拜禮してあるを。かの賊の打ち見つゝ。ふもとの村よりもこるけき道を。いかなる祈願のありてまうづるどと問ふ。女子のまむしものもえいこで。つい居たりしが。まひて尋ねとふ。なくなくこたふ。まらゝ一人の母を姉と二人してやしなひまゐらまれども。歳たけ侍らねば。心とをかむ。父の過ぎし年身まかり給ひて。そのころ田をたを賣りて。今もなく。その日を過さんよすがのなき。姉の京へ身をうりて。母を養はんといへど。わらひひとり母をやしなふことの難ければ。母をも養ひ。姉をも身をうらすまじと思ひあまれど頼まん人しあらざれば。神佛より外またよりもなく。この御堂の本尊。七日参りの願をかけ。この事かなひ侍らむ。命をめされ候へと祈り申まなりとて。さめぐと泣きければ。賊のたがひ顔見合せ。二人なみだをこらひつゝ。貰ひなきして。扱の孝心の嫌かな。よくこそ母を大切におもひ。姉をも大事にしつるどとて。かの二人の何事をかさゝやきて。憐れをもよほし。盗み取りたる金銀。衣服をそへ。風呂敷一つ。み。小女。あたへていひける。今より母はほは孝養を盡すべし。われら旅のあき人なり。不便と思ふまゝ。寝美。これを取らするなりとて。蓑笠させてかへしける。至孝の心。感じてや。毘沙門天の利益。得さしめ給ふ

よもことならずと。その頃人のかたり傳へし

○ある人茶を詣ひありといふことを。利休に問ひし時。こたへける。わが友はノ貫といふものあり。われを茶に招きしとき。時刻を違へたる文おこせたり。刻限をたがへむして行きける。内なる潜り戸の前。穴を穿り。上は簀のこを敷きて。あらた土を置きたり。され心なくそのうへよりて。入らんとする折から。地の土くえて穴は落ちたり。穴の底は土のねりたるが中へふみ込まれたれば。とりあへむ湯あみして。再び入りけるを。人々の興としたり。此事かねて期明といふ者。山科へおのせ。かくとそやく我もものがたれど。主のころづかひを。されかねて知りたりとて。穴は落ちざらん。志をむなしくせることのほいなさ。穴とありつゝ。落ち入りぬ。扱こそその日の興ととなりたれ。茶のひたをら。へつらふともあらねど。賓主とも應ぜされば。茶の道はあらむといふれき

○杉野意仙といふ醫師。豊後の國より京へ出でて。一休禪師の心よかなひ。まばらく大徳寺に居しころ。料理の方。菓子の方など。ころ得ありければ。時として禪師にまゐらせける。この者。性質放逸にして。萬の事。かゝらざるが。禪師常は他より物をもらひたる時。膳部のもを一つ器に打ちまじへて。食し給ふことを見て。何とて料理の調ひたるも

のを。さやうは無下よりし給ふぞといへむ。禪師わらひて。弊正の一如なり。飲食も善と
惡となしとのたまへる。意仙のうけがををして。いふやう。禪師よこさもあるべし。それ
らの真偽別如心なり。やそり調味のまゝがよろしきぞと申しければ。その後の左もした
まのざりしとぞ

○東野州佐川田喜六がもとへ。今日の御書翰は雪のことなき。近ごろ遺恨は候とある
返事

恥常ならず候へども。昌俊事の月花をのみ格別よめて侍れど。雪のさほどよくかれ不
申候。人も冬しきものゝ寒がり。雪ふかき國よての吹雪よしまかれなどして。こゝえ死
ぬるものおほしとあれば。悦びかどるほどよのなられを候。東路の旅よ由井といへる
まぐよ宿りし夜。そむめて雪の降りければよめる

ながめよのあかぬ箱根のふたご山。誰がこす嶺のみ雪なるらん

○東海道濱松といふ宿りし時。家のあるじの申す。このところより天龍川よ添へて。
十五里ほど山よ入れば。速江と信濃の國のさかひなる。川そひの地。京兆と呼ぶところ
あり。その地の。他より人の行きかふべきところよあらむ。國の境。藤の蔓もて長さ五

六十間もあらんとおもふほどの棧をかけた。所の者。京兆の棧といへり。巾せまくし
て。行くよだよ目くらみ。魂さゆるむかりなれば。かの地へ行くものとして。いと稀なり。
誰が親のせよ。京兆へ行きたることのありなど。只寧よのみそのところのことかたり
つぎて。見たる人もなき。この宿の下男。好事のものよ。京兆見て来たらんと。まばし
の暇を乞ひて。かこよ行きたりけり。その地の家あづかよ四五軒ありて。農の業のすれ
ども。常の食。米も聊も食ひて。稗よあづきをまじへて糲とす。この男が行きたる家。
その中よも長と思ひる。者よ。麻の織りたる。尾花を入れたる。新しき夜の物を出だ
して。着せたるのみよ。敷けるものゝ家のあるじもなし。枕の木の角なるをもて臥しめ
たり。所の人のかたりける。この山を登りて。凹かなるところより見れば。珍らしき花あ
りとして。葉内しければ。男行きて見るよ。そのかなる岨のもとをがれあり。水勢の屈曲して
激るる聲のいさぎよきけり。いふべくもあらむ。溪間を速くへだて。その大きふたか
へもあらんとおもふむかりの樹。色紅よして。黄をおびたる花。今をさかりと咲きた
り。夏の事をれば。あまりの暑き。葉内の人。木の葉をいたさたり。さていふやう。此
花の大きこよより見れば。さほどよもあらむ。この川の末尻といふところ。この花のち

りて。流れ行けるを拾ひしものあり。花びらのこたり。一尺餘もあるべしと語り。いかなる本の花よか。たえて知る人なし。速江の國人。これを京丸の牡丹として。今猶ありといふ。この頃の人もゆきかふことありて。この地へもいたれど。この花のある溪へ尋ねゆきて。見たる人なしとぞ。舟後も通らざる地にして。人の用なきところなりといへり。四五軒の家ある中。長とも見ゆるものゝ家。寺院めきて。佛畫を懸けたり。その畫幅の一向宗の真向光明の彌陀よひとしき。大いなるものなり。食物のみを供へ。松をともして燈明とせ。花を手向くる事なし。夜の燈火なく。炬をもて業となせり。土人のみを總髮にして。男女ともよおなじ。鬘の鱗よてきるといへり。子供も皆總髮して。衣類は麻のあらきを織りて。尾花。蒲の穂など入りたるを着たり。夏も寒しといふ。かの男濱松へかへるよのぞみて。泊りたる家あるじよ。錢もて謝しけれども。他國にかゝるものよて用を足せども。この地は用なきものよとて取らず。家よかへり給ひて。後便りあらば。米を少しよても贈り給へるべしとて。度々いへるよし。大事は行くべしといふ意よやと。宿のあるじものがたりき。おもふよ深山幽谷よこたりて。かゝる地もあるよやとおもへば。行きても見たきことちなんせらるゝ

○拂子の贊よ云。遊ばんことをほつす。遊びて足らぬ。樂まんことをほつす。樂しみて足らぬ。偽らんことをほつす。偽りてたらぬ。貪らんことをほつす。むさぼりて足らぬ。終よ盜まんことをほつす

○所帯の箴よ云。天下の一人の天下よあらぬ。萬民持合の天下なり。身帯の一人の身帯よあらぬ。家内持合の身帯なり。了俊の獨味を制し。正成の二菜を戒む

○男女打ちまじりて。酒たうべ。花を見るよ。傘さしたる繪よ。おもしろの世の中や。思をこまねぬほどあそべ「おもしろの春雨や。花のちらぬほどふれ」おもしろの酒もりや。ころみだれぬほど酔め

○紅葉の詞よ。人と契らば。うすくちざりて。末とげよ。もみぢ葉を見よ。薄きにおそく。濃きにおちるものよて候

○修行の詞よ。花の雨の過ぐるよまかせて。紅ますく色をそへ。柳の風よもまるよ。隨ひて。緑いよくふかじ

○無用の重器。貴きあたひをも費してもとむれども。秘めおきて。日々の用よ立たぬ。無益の妾。多く財をもいとすして。愛をれども。家をととのふ足しよならず。美味

の高直よして少きものあり。樂しみて費よして。不用のものありと志るべし

○夏日の七快

湯あみして髪を梳る。掃除きて打水したる。枕の紙を新よしたる。雨これて月のいでたる。水をへだてて燈のうつる。淺きながれ魚のうかみたる。月のさし入りたる

○飲酒の十徳

禮を正し。勞をいとひ。憂をよまれ。鬱をひらき。氣をめぐらし。病をさけ。毒を解し。人と親しみ。縁をむすび。人壽を延ぶ

○古人罰酒の法あり。三合を飲酌の限りとす。もしこの法を失ふ時を。家を亂し。身を亡せ。箕子一たび嘗めて延齡の良藥と賞し。二度をめて心を擾すの媒とおどろき。三度をめて國家を失ふの基と悟れり。勞なく憂なき時飲むべからむ

○世よ文事もなく。藝術をもさまで習ひ得ざる者の書きたることと感よたへて。なみだを催すほどのことなきものぞかし。薄命の人の書きたるものよ。すべて感涙よたへ難きこと多かり。鴨の長明が方丈記。吉田の無好がつれぐ草。みをひとたびの零落して。世のありさまを悟りて。身を顧りみたる人々なれむ。綴りたるものどもあり難くめでたし。書よみたるむかりよて。よろづふかきよ通せむ

○幼き子のもて遊びよ。風箏といふものあり。その和歌何人のよみたるよかありけん。「登れく」のぼる時にくだる。くだれく下たる時このぼると。端書して

「もがりある竿よ手足も括られて。おのれ動くとおもふ猿かな

とあり。この歌の意を思ふよ。人間一生の勤行身を。よく詠じたり。竿の業よして。旗の天地の間よありて。風の身を扶くるの氣なり

○世よありし人。零落したる人のもとよ行き。ともよつれ立ちて。市よゆきて。鹽魚を買ふ時。世よある人の。鹽鱈を買んといふ。零落の人の。鹽鱈を買んといふ。たがひよいひ争ひしが。終よ零落の人よ云ひ勝れて。鹽鱈を買ひて歸りぬ。さて道すがらのほど。こなしよ。世よある人の云ひける。そのもと何とて鱈のうまきをすて。鱈のうまからぬを買へるかといへば。零落の人よらひて。今日よそのもとより我等への饗應よせらるゝなれば。鱈よあかき。鱈の御もとのごとく。常よ美味を食し給へる人の。たま〜食ひたまふものなり。我の常ようまきを食ひざれば。鱈の味よしかむといへり

○人の信り。おのれが信を以て引き出だし。人の偽もおのれがいつより引き出だす

ものなり。偽も遂ぐるとまの信となり。信も遂げざる時。いつそりとなれり。されば嘘も誠もまじわるもの。心ありて。已まことありて。人。嘘あることなく。おのれ嘘ありて。人。誠のあるべからず。唯人としてむづかしき。心の疑ひとつなり。無好法師の。迷のひとつかそろしと書きたれども。まよひの表。いづることあれば。おそろしといへどもおそろし。足らをして。捨てやすし。疑の心ありて。あらす所なきが故。捨てがたし。かゝればおもふこと内。あれば。色外。あらざる。といへり。まか。あれど。差別そのまじりのうち。ありて。よろづあらなるこそよけれ。これらうそといふ中。も。虚賢の根ざし。とも。その中。あるべし。刀を打つもの。なまりがねの焼刃。刃がねをかけて。打ちあげたる。と。ごだみて。その切れあぢ。おがねのみよりもよろし。よくきたへ打ちあげたるな。か。も。鍛冶の心。か。な。へる。十本のうち。一本あるか。な。ま。か。なり。といへり。

○本曾義仲の臣。畑六郎左衛門わかまころ。人のむをめ。ちをみて。娶らんことを乞ふ。その女。飛驒の山住。して。梳具の木地を挽けるもの。子なり。女の母。こたへて云。い。や。しき者の子。て侍れむ。な。か。く。一。武士の妻となるべきもの。よ。て。なく。育がら。ま。じ。り。も。お。ぼ。つ。か。なく。思。て。れ。侍。れ。む。ひ。た。ぶ。る。一。辭。退。ま。ら。ま。なり。といふ。媒の人。畑。こ。の。よしをいへば。畑不興。て。我小身ゆゑ。不足。か。も。ひ。女をくれざる。ま。と。云。ひ。や。り。けれむ。その母。また。こ。た。へ。て。我等年老いぬれども。我。一。耽。り。ぬ。る。心。な。し。武士のならひ。もしも畑殿の討死。な。ど。した。ま。ひ。たる。時。か。め。く。と。親里へ。か。へ。り。侍。る。や。り。なる。志。て。武家へ嫁したり。とて。恥。か。し。ま。ま。こと。り。侍。る。なり。と。あれば。六郎左衛門。その詞を感じ。とても。か。く。ても。妻。と。せん。と。て。終。め。と。り。偕老の契り。あ。さ。か。ら。ざ。り。しが。元暦の亂。六郎左衛門。亡。せ。たり。と。聞。きて。この妻。深谷。飛。び。入。り。て。果。て。たり。と。ぞ。

○ある商家の奉公人。武家の下部といさかひして。下部を打擲して。いさかひ。勝ちたり。とて。見。せ。よ。て。自負するを聞きて。主人。大。い。い。ま。ど。ほ。り。無々云。ひ。つけ。置。さ。し。人。といさかひ。するのみ。なら。む。下部。たり。とも。武家奉公の人の。世を治め。給。ふ。か。た。ぐ。の。召。仕。て。る。天下の役び。と。なり。おのれ。商人の手代。私渡世の奉公。する。身分。を。も。て。武家の召仕。なる。人。とい。さ。か。ふ。こと。不。届。なり。が。家。風。か。な。い。ざる。者。な。れ。ば。只。今。い。と。ま。を。つか。ぬ。す。なり。と。て。と。び。た。れ。ども。聞。き。入。れ。む。して。その宿。へ。引。き。ま。た。し。ぬ。

○天の道の満つるをかきて。足らざるところを補ひ。地の道の盛なるところを減じて。衰ふる所をたすく。萬類みな鹿物を生じぬれども。人取りて飾るがゆゑ。美麗となる。され

は貧の常なり。富めるは集むるが故なり。あつむるは物を滞らすなり。天地のとはこほること嫌ふがゆゑ。萬類をみな促して。まばらくも止めを。そのとどまるもの凶年となる。洪水。地震。大風。大雨。火災。人は在りては。塵落。停滞よりして。百病を生む。易に云。財寶を倉に納めて。守らざるものは。是は盗人に奪ふことを教ふるなり。化粧して美服を着しぬる女の我を犯せといふは。ひとしとあり。慎しまむべからざるべからず。

○信貴の毘沙門堂。四季連歌の句合あり。その中。五月雨は年中の雨ふり盡しといふ句あり。何某の大納言聞しめされて。何もの、申したるよか。この句のぬしを尋ねべしとありける時。高橋某そのゆかりあるもの、問ひければ。彼あたりなる村長の申したる句なりとて。まぎく御使の消息を給ひて。もし京へも出づることのあらんよか。かならむ参るべしとのことゆゑ。いとありがたくて。かの村長もまぎく京へ出で、尋ねまゐらるよ。左あらば逢ひて。物がたりせんとして。一間へ通し給ければ。村長云。風流の面目雲のうへまでも聞えけんことごと。いとありがたけれと存じまゐらるなりと云ふ。大納言も四方のこなしありて。さて尋ね給ふ。年中の雨といへる趣向のおもしろくおぼゆるからよ。その句意を聞きたく侍れば。逢ひ申したり。いかなる故事ありて。かく申しとぞ

とありければ。村長をたへて云ふやう。別は故事と申すも候はむ。只五月雨のきのふもふり。けふもふりつゞけて。あすも又かく降りくらしなむ。一年の雨もこの頃のきみだれよふり盡しぬべきと思われ候心より。申したる外の所存なく候なりと申しければ。おもしろくおぼゆるなりとて。入り給ひぬ。村長がかへりし後。高橋いで。いかなる御事ぞと尋ねまゐらせければ。大納言の仰よ。さりとて。唐がおもひしとの違へり。五月雨は四時のことく。雨のさまいろく。ふりけるゆゑ。春雨のさびしきよくらべ。夏の夕だちよたぐへ。秋の雨のものまごさよかこち。冬の雨の寒さよもたとへたり。このことふるま物がたりよあれば。それをしりたる句よやとゆかしく尋ね侍れども。左になくて。雨の只ふり盡すとのみ作りしこと故。比興といかもひ侍りぬと。仰せられき。

○をしほの山のこなたよ。由留木といふ里あり。紅葉するころ。こゝかして道遙しつるよ。柴垣をまつよゆひめぐらして。草の花さかりよ。虫の音などたゞならむおもしらく覺えければ。夕ぐれをもいそがで。暮なば月またどりなんと。猶おくふかく行きて見るよ。草よて結ぶ巻あり。こゝよしある人のかくれ住よやと。入りて床几を乞ふよ。そのさまいやしからぬ尼の。たゞこの火など持ち出で。内へ入りて休らひ給へ。京よておのすやなど。ね

もごろよいへる。ものごしの聲音いよくたゞならむおもへば。かく世をのどやかよ過し給ふこそ。尋常のかたともおぼえね。和歌など詠じ給へるよやと。庭のもみぢのかつ散るを惜めむ。いなとよ。さやうよ世をおもしろく過ぐる身よのあらむ。ごらうよ。つれそふ夫のこゝろざしあしくて。こと妻よ溺れて捨てられたる身なり。女のみさは二人の夫を持たざるを貞とすとあれむ。たゞよをあぢさなく思ひまて。今の身といなりぬ。をしほよとび住ひする。このちの閑寂を愛して。あるよのあらむ。甥の坊主の里の寺よ縁あるをもて。こゝよのをるなり。折ふし采たまえ。よりに慰ひ給へかじといふよ。何となくゆかしきところあれむ。墨筆をかりぬるよ。もし歌よみ給はむ。鹿相の短冊あり。これよ書き給へかじとて出だしければ。うちくもりたるよ。鳥の飛びたる繪あり。たゞ人のあつかふべきものとも見えざりけれども。あしき墨もて書きてつかひし歸りぬ

そめて濃き色をしほの山風よ。もとのみどりへかへすもみぢ葉

○借用とだよいへむ。千金の重さも奪ふべしといひ。藤房卿の詞よして。借錢の多きを苦よやむものあれども。借錢より先この躬を大借なり。世人錢の利をおそれて。天の理をおそれむ。借錢何ぞ身を亡すの禍あらんや。理よ滞る時その身忍よほるぶ

○池田何某とて酒造家ありけるが。隱居して瀧澤といふところよ住みけるころ。尋ね行きけるよ。こしかた行く末のものがたりする序よ。和歌の詠れけるよやといへば。それらに和歌などさらひなりといへり。何とて有りがたきことを嫌ひ給ふぞといへむ。世よすべて和歌などよみ。物よく書く人などい。みな身帯を持つものなくて。身不埒よして家産を傾くるもの多かり。故よさやうなることい。まこしもいたさむ。只家業大切よつとめて。金錢多くたくいふるより外のこといいたし申さぬ心得なりといふ。予また云。左あらば書状。手紙。證文。送状。あるひに關所手形。船手形等までもなく。又奉公人も請狀なくて通用し給ふやといへば。主人わらひて。それの昔よりあり来りし法なれば。何ひとつとして。用ひざることなしといふ。ありし法い。もと何人の始めおきたるぞといへば。左やうのむづかしきわけの存じ申さむ。それの誰人よても知り傳へたる事故。それよて事の濟むべきなりといふ。予又云。かゝる文の傳はることい。もと歌の道より出来て。今書をつたへて。その法をたてり。左すれば。御身家をととのへ。身を修むるも。この事ありて成就す。和歌の道。書の道。何ぞ備身齊家の害なりといへんや。行ふ者の心よあるべきなりといへば。主人口を閉ぢて謝したり

○學問して博聞多識となる。人情を察して。世路は行きとゞかんが爲なり。聖人賢者の世話やき給ふも。高ぶりて物まり顔せよとの教はあらず。されば理はあきらかなりとて。人を俗物と見下すべからむ。その俗物の目より見れば。また高慢なる者の。角立ちて至りて無益は見ゆるなり。君子の時としておしうつりて。よく俗とまじはる。かゝるがゆゑは。俗物は入れられざれば。やそり俗物なり。學びの道の粹とならざれば質なり。かゝれば書籍の粹となるの助けなれば。知りて表へあらはさむ。隠して入る時つかひ。不斷ほこりがほなる。人さらし用ひざるなり。

○人は饗應せられたる物をうましとおもひ。家にてこしらへ食むる時。外にて食したる時より。味うまからむ。いかよとなれば。おもひまうけて食ふがゆゑなり。食はる所あり。食するものよりまみのあり。されば飽食たりとも。うまさの思ひよらざる所あり。すべて食はりまし。まづしといふことなし。その時と處と。腹中へ應じて。口をかきひたるよりうまさ物のあるべからむ。空腹は生鹽を添へたる湯漬も。山海の珍味よりもまし。繪の道もまかなり。初は畫きたるごとくと望む人あれども。寫し出でなば。格別筆勢墨色。すべて前よることなく。かのづから發せし勢。ふたゝびならひすることありがたし。

○予江戸はありしころ。武甲山はまうで。日本武尊の舊地を拜せんと。雨降山かけて人のまうづるよともなこれ。青梅村より御嶽山に登れり。このあたり承平のころ。平の將門が舊壘多く。すべて古戰場とぞ。道志るべするもの。江戸の人として。もとこのあたりの産なりといへり。

○武野古戰場記云。武を崇め。嶽の高きを藏して。神威を承平の和にまめし。文を黎民の際にやそらげ。徳を國家の仁政にまきぬる。むさしの國御嶽の山に。叔倉子義を達へぬ標有梅の。青梅の里まで。江戸を去ること十有三里にして。行程は山河橋陵なし。青梅村中金剛精舎。古樹の梅あり。四時實を結び熟すれども。緑のいろをかへざるが故。青梅の名あり。連山西北をめぐりて。さながら絶壁に似たり。閭巷を過ぐるること十町をかり。絡澤を下れば。溪路斜にして棧あり。村落は流を入れたり。ひなたの和田といふ朝日よむかふ名なるべし。一顧すれば多摩川の流をへだて。山々水よそびたち。石よむせぶ流の音。谷よひびきて人のあらそひわたるが如し。山河をべて紫斜して。數里の間は屈曲し。峯よかくれ谷よあらわれ。「さらき調布さらく」と詠じたる昔の歌の姿なり。山聳えて頂よ

露臺のあとをとめて。岸崩れて石は楢澤の名を残し。往古は戦場の樞要たるも。陰鬱たる
 叢澤となりて。僅に山がつの樵路をこち。露深くして。草蓐疊の礎を埋め。月さびしう
 えて尾花白刃のひかりをまじへ。旌旗風はひるがへりて。松は白鷺を宿し。翠桃枝をたれ
 て。丘は弓絃の糸をたち。利鏃いたづらに田園よくしけ。寶刀むなしく壤の中よりづめり。
 花鳥は時を感われば。歌舞の榮華もまのあたりよして。月よむかしを去るべき。錦
 繡はほこれる盛衰も紅葉の色のうつろふよ見えたり。殺氣長く昇平の日影は消えて。戦
 塵は似し雲もなく。人家軒をならべて。路は電のよぎるひを列ね。ゆくかたぐいは踏み分
 けし數多の道も街となり。ありといふなる避水も。俊成卿の比興といなりぬ

○藜の羹を食ひて。太宰の滋味をしらむ。破れたる温袍を著て。嚴冬のそげまきをわた
 り。財寶を多くたくひへて。他の人は譲る者を。金の番人。または有財餓鬼など、そしるも
 のあれども。人欲の私なく。行ひ公道の人と謂んも。亦可ならずや

○洛の燈籠菴。そのむかし。小松内府の燈籠を造られし所なれば。その名残りりとぞ。六
 波羅より東南にあたりて。小高きところなり。ある時。家をつくるとして。そのあたりを掘り
 けるよ。筭の如きもの多くいでたり。赤がねよして。その形丸く。左右に圓く合せたる玉の

如きもの附きたり。長さ一尺あまりあり。予が友文鎮よしたるを見たり。古雅いそんかた
 なく。至りておもしろ。往昔の質素たるおもしろもひやるべし。今や赤銅真鍮の筭。あるひは竹
 などよて造れるもの。丹波。但馬の在所よてもさゝむ。予が祖父の物がたりよ。むかし大
 原よて男も筭をさしたり。近きころのさを者なしといへり。竹よて短くつくり。結びたる
 髪へ横よさしけるとぞ。また塔をも掘りいでたり。表は家根の如く筋ありて。重ねたるも
 のと見え。内のことごとく穿りくぼめたり。好事の者求めて手水鉢とせしが。その買ひも
 とめたる人。多くの瘡を病みたる故よ。後よは所々よ捨てありしなり。後また心あるもの
 拾ひあつめて。再びもとの塔よ重ねて。寺院よ建てしが。いと古代のものなり。貴人の塚志
 るしよやと思はる

○京師五條坂の左りよ。ひくき平地あり。叢澤となりて路なし。鳥邊山より下りよ入れ
 ば。數歩よして。親鸞を火葬したりといふ所あり。鳥邊野といふよし。古老の物がたりな
 り。一基の古碑を存せり。弘長二年十一月廿八日とありてあるのみ。あたりよ荆棘生ひま
 げれり。人跡たえたり。むかしは一向宗の門徒遺骨をこのところよ持ち来りて埋みたり
 とかや

○誰人の塚といふこと知らぬ古墓。歌の中山の入口あり。鼻血の出づるとき。この塚をいのるよ。かならむ驗あり。何の花よてもさへげて。鼻より血の。右よりいづれば。左の陰囊を握り。左より出づれば。右をよざりて拜すれば。忽ち愈ゆといへり

○紹智かつて士明といふ香爐を得て。火いけとなして。朗千法師の訪ひ来られしをりよ。出だせり。朗千師撫でつさきりつ香爐をほめられたり。ある時。又来りて。その香爐をつくぐと見て。申されける。かむかりの名器を。何とて火いけよ。またまへるかといへば。紹智笑ひて申されける。此器火いけとして遣ひ侍ればこそ。貴僧が目よもつきてをしまれ侍るなり。香爐よして床よかきたらば。左ほどよの思ひ給ひじものをといひしとぞ。この詞。人のうへよも通ひていとおもしろし

○葛原の難波や與左衛門といふ遊女屋よ。濱菰といふ太夫あり。もとハ播州高砂の商家惣七といふものゝ娘よて。人の家よ嫁しけるが。その家衰微よ及びて。夫よ捨てられ。親のもとよかへりけれども。親の家もまたおとろへて。父母を養へんが爲よ。與左衛門が方よ身をうりて。遊女といなりしなり。その頃。與左衛門ハ。江戸の廓へ移りける時よあたりて。よき遊女をつれ行かんと。十一人の遊女をえらみける中よ。ことよ濱菰ハ。その志し

尋常ならむ。風雅の道よもうとからざれば。わけておそれみをかけ。江戸よ下るよのぞみて。濱菰ハ與左衛門よ。わが父母もろともよ江戸へくだりたきよしの願を申しけるよ。許されざりければ。客よかたらひ。事のよしを歎きけるよ。其客豪富のあき人よて。彼が孝心を感じ。いとやまき望みかなとて。路資をあたへて。あるじ與左衛門よ頼みけるよ。費をいとへばこそ。かれが願ひも聞ざりしなりとて。こともなげよ承け引きたれば。濱菰ハふたかやをも伴ひつゝ下りけり。濱菰勤めの中をこたりなければ。他の遊女もこれよならひて。その家繁榮し。主人も亦數多の益を得たれば。高砂といへる茶店をまつらひ。濱菰が親達よつかとしたり。かの濱菰ハたしなみよくて。身をつゝし。み。明けくれよ。父母をかへり見て。勤めながらも日々よ親のもとへ行きかよひけり。かゝれば廓の中よても。誰れかの賞譽せざるものなからん。その頃。濱菰が發句よ

うき人よ手のこづかしき火鉢かな

後よ。ある貴人よ根曳させられて。出雲の國よいたり。親子三人よてめでたき暮しとなれるも。孝の恵なるべし。その行儀難波とて。その名を傳へたり

○閑語。語路。清濁。連聲とて。國々。山川。海谷の深淺高卑よよりて。その詞のなまり。里言。

方言ことごとく變化する事ありとも。連音の移聲を。すべて正す時。同じ火を關東よての
 ひとのみいひされども。五畿内よてのひいと連ぬるなり。枸杞を關東よてのくこといへ
 ども。五畿よてのくこといへり。すべて紅粉をよとむかりいふべきを。べといふことを
 蒙むらしめて稱ふると同じ例なり。これの詞の訛といふものよのあらむ。音便の序よし
 て。國地の自然よ生じたる詞なり。五音たてよこよ通ふ。通音の詞。いづれも國の根本と
 いふを去らず。通音も訛よのあらむ。訛の四聲の内よて。清音。濁音といへども。自然より
 出づるなり。上をみて下濁る。自然の通稱なれども。洗濯の五畿よ下をよごりて唱ふれ
 ども。關東よての下をみていへり。これ國土の自然なれば。下濁用の字よごるとも定めが
 だし。戯れよ。

大根ととねつる文字のとねやらで。とねむともよき牛房ごんぱう

○花咲翁の滑稽。みな人の知るところなり。一日予がもとよ采り訪ふ。折ふし世人多く草
 庵よ采りて。月花の物がたり絶えざる中よも。崇徳院の天狗よならせ給ひて。讃岐よ崩御
 まし。管公の雷となりて。筑紫よ焚ぜられしといふ事までをものがたりする人の多
 かれども。實説を詳よかたれるもの一人もなしとて。歎息せり

○ある侯十萬石を領しながら。困窮せられしころ。大坂よて豪富の町人。その侯のまかな
 ひするよ。すべて儉約を以て専とするとして。家采の祿をへらし。諸事の入用を減じて。上向
 よりはじめ。鹿食して。下みなこれよならひ。なほ諸家のつき合ひをも省きたり。かゝれば
 家中いよ。ひがみ。下まき。いよ。しくなりゆき。收斂盜臣いよ。增長して。窮迫を
 じめいよ。何某その仕法を憂ひて。予よこのことを歎きけるよ。予こたへて云。物本
 末あり。事終始あり。終よをべきことを始よして。後よいたをべきを先よをる時。まを
 く。あしきいさかんよして。善事かくれ。家國の經濟よおける私欲のうまくして。誠忠な
 る者をよけてえらみ。衆人心をあらせて。徹の法を行。いかほど困窮し給ふとも。年を
 追うて富まさんこと改めいふべきよあらむ。賄せせて利を得んとする。民と利をあら
 そふなり。國家を治むるといよしへよりして云ひ傳ふるがごとく。奇字の謎の意むへあ
 らまほし。この文字をよくるとき。上よ立んとすれば。下可ならむ。下可ならんとすれば。
 上立たむ。家を治むる法まづ損じたるところを修覆して後。おひ。かたむけるを起す
 べし。十萬石の領中。一萬石をなきものとしてたく。九萬石を以て家法をたつること
 あらば。一年よ一萬石。十年よ十萬石を餘さん。左あらば。日々をつめむとも。大名の家計

何ぞ町人の財を借ることを用ひんやといへば。其唯々として歸りぬ

○予がもと高金よつのもり購へる香合あり。ある方へ賣る時。人のいへる。左むかりの名器人も知るところなれば。持ちつたへ給へとして。いたく止めけれども賣りたり。やむことを得ざればなり。思ふに武家にて武具をうらば。耻辱なれども。衣服をこじめ。茶器など。賣り拂ひたりとも。いさゝか家産といふべからむ。井戸。熊川の名物。金岡。元信が名畫たりとも。國民の飢渴を救ふの徳なし。ある諸侯。領國飢饉のとき。重寶の名器をうりて。窮民をまぐひしことあり。いとありがたま仁政といへり

○牡丹花背柏西山に居られし時。百金を賊に奪われ。ノ貫の山科の草庵にて。茶器をうりたる錢。七十貫を盗人に取り去られたり。盜賊の金銀と。衣服を。ことさら奪ふものをなれば。在俗の人の格別にして。世を捨てたるまび人の。華美の衣類と金錢を儲ふべからむ。家の調度もなるべきほどの。土器と紙むかひのたぐひにて。濟ますべき事なり。これ賊を防がん第一の用意なるべし

○彌陀如來。觀世音菩薩。勢至菩薩の三尊の。おなじ格に信むべきを。彌陀にいふまでもなく。觀音とても何國にもあつく信心され侍れど。勢至むかひのさほどは。尊敬するともがらもなく。又勢至を安置する大伽藍もなし。勢至の功德もうまき菩薩もや。經を見たりといふ人も希なりとかもいれたり。これを人よたとへたらんよ。美婦人の愛想なきといふとまかるべし。又衆生縁のうまきが同座し給ふ佛よさへ。かゝる仕合せ不仕合せあり。いそんや今日の凡夫よ於てをや

○一休禪師紫野よかいせしころ。人の書をもとむるものあれば。御用心と書きてあたへぬ。まひて他のことをもとむる者あれば。御用心くといくつも書き給ひ。又上よ只といふ二字をへて。只御用心とか。せ給ふ事もありとかや。いとおもしろく。その語すべての事よかよひて教訓といなりよけり。予も又それよならひて。用心の二字を合せて。一字よ作り書けり。その文よいふ

鳥渡見れば忍ぶよ類し。鹿忍よ見れば思よひとし。そるかよ見れば思ふよ似たり

天龍寺の歡道といふ僧。これを見て。兼思入無爲眞實報恩謝といふ文意よ。何となくかよひて。をかしといへり

○伏見より年七十歳むかりなる老翁。土偶人瓦器のたぐひを荷ひて。洛中を售りありあり。常よあきをふ家よ来りて。食事をまゐる折から。その家の奉公人大勢あつまり。かの翁

よ云ひけるは。御身の荷ひたるもの。その價いかほどむかりの品よかと問へば。翁こたへて。銀十五六匁ほどの荷なるべしといふ。又問。京の町の人の行きかひ繁きところにて。もしあやまちて。みな碎くまじきものよもあらむ。さやうの時よ。いかゞするかとはいへば。それこそ過ちなれば。さることなしといふべからず。さある時。その事をありのままよ述べて。我等も年久しく商ふなれば。壹荷ぐらゐの情にて借り受けて。商ひ申すなりといふ。又問ふ。そのうへよも又碎くまじきものよもあらむ。その時。またいかゞするかとなじりいへば。いか問屋なりとて。數度の無心もいひがたければ。その折こそ其許達のごとく。奉公なりとも致すより外よせんかたなしといへり

○龍神の水をつかふは妙なる術を得て。一滴の雫をもて。暴雨を降し。波濤をも起まといへり。又人の火をつかふは。妙なる術を得て。一炬の薪を加へて。以て萬物を蒸焼す。天地の際よあるもの。水火土金水の五つより外なし。これより萬物を造化して。萬類形容をことよまるは。龍神の水術五行の中。水のみつかふは妙ありて。他の物よ術なし。つかとざればまた過つ事なし。人の五行を取りてことごとくみにつかへり。是を以て。過不及多し。世人火のみをつかふは妙術ありて。金をつかふは妙ある輩を見む。多くこそこの金のため

よ已を勞し。身を亡す者少からむ。されば。火水土水この四つの物よのみ妙を得て。金をつかふは拙しとかほゆ。人もし金をつかふこと火をつかふがごとく。自在を得るものあらば。生涯過つことあるべからむ

○遊樂の費なる事よあり。費をよぶけばたのしみなし。慰みの無益なるものよあり。無益をいとふ時のなぐさみなし。おもしろきの危きところよあり。あやうきを避くればおもしろき事なし。長生の勞と食とよあり。勞せむして食よ過不及なければ。命天然を終る事を得べし。調度と人身とおなじ。多くつかへば損じ。つかひざるもまた損せり。されば養生の過不及なきを守るべし。病の不養生よありて。世よ氣を屈託するもの常よ病なきよあらむ

○酒のいかほどの大酒よて痛飲またりとも。一睡して精神をだよ靜むる時。和して身を損するよいたらむ。酔ひて是が爲よ犯され。心を騒かす歟。また女色よおぼるゝが故よ。精神虚耗して。心勝を破り。痰濁胃中よ痼疾となりて。血道を腐敗す。或いて腎をやぶるよ及ぶ

○餅の食滞するものなり。多く食まべからむ。餅よ食傷したる。救ふべき術なし。口の病

を入れて。禍を出だまの扉なり。かゝれば一言以て智とし。一言以て不智とす。人心の表なり。心よおもひざる事いふとすといへども。みどりと思ひざる事をいふ心と表裏す

○何よよらむ。物の少き長久のもとなり。多く物をたくひへ持つ。禍を招き。身を勞まるの媒なり。されば財寶多くもちて。生涯之しくくらす。只財寶の多からん事を好む者なり。衣食薄くして。財を持つ者只多くつめるを生涯のたのしみとして。終に財寶のため身命を亡きなり。欲少き人の目より見る時。夏の虫の火を取りよかもむくよことならず

○浪華の長柄遊びしころ。農家にて稻麥等の穂を打ち落すもの。床几の如くして割りたる竹を横ならべ立て。さなといふ具あり。むかしよりありける物や。ある古歌

有りてほそさ田の稻の八束穂よ。さなもりもる。秋の来よけり

とある。さなといふ詞の解し得ざりけるが。長柄は行きて知りぬ

○宇治。木幡。芝。竹田あたり。音遊女多くありたるところなり。古き洛陽の地圖。小椋姫町といふところありて。遊女町なり。そのかみ。多く水邊に居たること。古書に見えたり。あき妻舟の圖などもおもひあつをべし

○池田五半。酒造家の豪客たり。予所勞ありて。有馬の湯あみして歸路。極月の廿日あり。かの五半を訪んとせし。折から廿九日の事にて。家計混雜の時なれども。五半予を見るよりいかなる幸よか。思ひがけなき枉駕なりとて。座しき請じ侍り。さまざまの物がたりし。予も過ぎし事どもいひ出で。その夜やく丑過ぎたり。よひのほどより酒食のもてなしありて。今宵の二が方よとまり給ひて。めでたく二が家にて年をむかへ給へかしとて。夜の明けぬるまでものがたり侍りぬ。さぞ草臥給ふべし。ひとやすみし給へとて。臥しぬるところまで。家内より家事の用をあるじがもとへ云ひ来ること。ひとつもなかりき。予これを感じて。五半が風流のころざしをまたひぬ

○伊勢より伊賀へ越ゆる道にて。予がゆくあとより一人の男いそぎ来りていふやう。これら大坂の者なり。過ぎこし道にて。餓鬼に附かれしや。飢ゑて一足も進み申さむ。大い難澁よおよべり。何なりとも。食類の御持合せあらば。少しよても給はり候へかしといへり。予心得ぬ事を申すもの哉といおもへど。旅中別は食類のたくひもなければ。刻み毘布のありしを。これよてもよろしきやととらせける。大いよよろこびて。直に食し

たりき。予問ふ。餓鬼のつくといいかなるものよてあるぞといへば。こたへて云。目よ見えねど此あたりは限らむ。ところぐよて乞食など餓死したる怨念。そのところよ残り侍るよや。その念餓鬼となりて。通行の者よとり付き侍るなり。これよつかるゝ時。腹中志きりよ飢ゑて。身よ氣力なく。歩行も出来がたき事。それら度々なりといへり。此もの藥種を商ひ。諸國よ注文を取りよ。つねぐ旅行のみせしとぞ。世よいさやうの事もあるものよや。他日播州國分寺の僧よ尋ねけるよ。この僧申しける。これ若輩のころ。伊豫よて餓鬼よつかれたる事あり。よりて諸國行脚せしをり。食事の時よ。飯を少しづゝ取りおき。それを紙などへつゝみて。袂よ入れ置き。餓鬼よつかれたる時。遣をためなりといへり。心得がたき事よぞありける。

○守邪とい醫書の樞要よして。人の行ひよてい。油斷せざるなり。よろづの事もみづからゆるま所よりして。よからぬ事よ出て来るなり。甚しく寒き時。風邪よもをかされぬものなり。寒きのゆるみたる時よ。邪氣よ感冒するよて知るべし。これよさゝいなることよゆるま時よ。こや大惡のまぎをもとよ思ふべし。邪も氣のゆるむとき入るなり。されば小事を守らざるが。大事の始よこそ思ふべきなれ。古歌よ

かむかりのこといりき世のならひぞと。ゆるま心のとてぞかなしき

○ある人古田織部より傳へたるおねつるべといへる香合とも知らず。さもなき器物の中よまじへつゝ。道具商人を呼びて。この類長持よ五棹ほどあり。見よけて買ひ取るべしとて見せけるよ。多くの商人打ち見つゝ。これかれ目利するうち。大坂屋勘吉とて。目のまゝたるもの。此香合を見て。申しける。この品よろしきものと知り給ひて。かくい鹿末よ志給ふや。また知り給らざるよや。これこそ織部のおねつるべといふ香合なり。我等よこれのみ買ひ取り申したく。その他の品々。よの人々ともかくも志給へとて。他の品よさらよ心をかけむ。さてこれをこそ。いよゝ費り給ふ。買おめ。今一應のおんこたへを承りたしといふよ。いよゝけり拂ふなりといへば。さあらば百金よ申しうくべしとて。買ひとりて。左海へ持ち行き千兩よ賣りけるとぞ。比興なきあき人。いと殊勝よおもゆる○人世の浮沈の常よして。盛なるかとおもへばおとろへ。衰へたるよ又さかゆること。常のことよりなれども。おとろへたる身の落しおふせざるものなり。身をまてゝこそ済む瀬もあれと。空也上人よみ給へるいりべなるべし。大江何某といふ人。九萬兩よあまれる身上零落して後。身を惜まむ。即みづから魚をあきなひ。荷ひありきつゝ。知る人の方をめ

ぐりて。今よりわれ魚あき人となり候ま。日ごとよまぬり候へば。ひとへよ引き立てのほどを給われかして。これまで美服よて交りたる輩の家へ。つゞれの容よてたのみ行きければ。人々その志しをあこれみ感じて。魚渡世日ましよきかんよて。天満なる何某とて。今現よその家相續したり。常よかの大江某のいひける事よ。金錢のきたなくまうけて。されいよつかふべしと。世よいへども。我のきよあらむ。されいよまうけて。又されいよつかふなり。飯のかの櫃よあるべし。他の器よ入れたる。食するよ心よからむ。尿の廁よありてのきもなくおぼゆれど。他のところよあれば。いとくむきよきたなし。人の身の上もこれと同じといへり。この詞の。君子のそのころを失ひざるよありといふ語よ符合せり

○ある國の守の長臣。儉約を尊として。國政を司る折しも。不用の役の多きを省ける時。足輕の組百二十人ありけるを。六十家として事足るべしと評議一決しける時。主君の仰せ給ふやうに。六十人の者よの暇をつかこまやと尋ねらるゝ。仰のごとくなりてこたふ。そのものどもは獨身なるか。また兩親妻子等あるものもあるよやと仰せられま。おたへて申まやう。何れも親も妻子もあるものよて候と申しければ。さあらば暇をつかこ

しなば。大勢のものどもみな。路頭よ迷ふべし。少きかほきよ替ふべし。衆のすくなきよかへがたし。今大身の内よ。萬石ちかく取るものもあるべし。それを二三人暇を遣としなば。まのあたり三萬石むかりの有餘あるべしと。命せ出でられしよよりて。その識のやみたりとぞ。良君の仁心もまたうすからざる事と。人々申しあへぬ

○河内の粟先といふところよ。一年ほど居ける時。常よ麦飯のみ食ひてければ。食よりみてかへらんとする時。おもひける。日蓮の稗飯を食として。法を邊僻地よすゝめ。親鸞の越の國分よありて。師教の恩を思ふ。弘通の僧の身を樹下石上よおきて。鹿食をもいとこむ。予のまむしの教どもせむ。鹿食よ堪へむして。歸らん事をおもふのころざしいと拙なく。心術の至らざる事とみづから悔いたり

○肥後の國よ名産三品あり。八代焼。八代蜜柑。合歌なり。この中合歌の損じとなるゝ時。何糊よて附けてもつかず。飯へ薯蕷を加へて。よくねりて附くる時。こなるゝことなしといへり

○蘇鐵の葉の枯れたるを黒焼よして。胡麻の油よ和したくわへ置くべし。金澹切り疵よはいかほどのことよても。酒よて洗ひまよ。愈ゆること妙なり。楠正成が家の法なりと

て。左海大松屋のあるに予は傳へたり。予が友中根彌次郎といふもの。道恨よりて切れし時。ふかさ四寸むかりの疵口へ。この藥をつけて。忽ち全快せり

○遊女町をくつじといふ。文字は亡八と書けり。所謂。孝。悌。忠。信。禮。義。廉。恥の道を亡ふよりの名なりと云ふ説あり。されども遊女町たりとて。中より孝悌のためよりうられて。年たけては主人よりよくつかへ。忠を盡して。その家を起させ。信を以てなきけある客とみたらひてふたつの心を抱かぬ。慈悲を推して行儀をみださざる時もなきよあらざれば。何ぞ亡八といはんや。實に虚の興あり。うかれ女といへども。人情のかるべきものなり。こや小夜衣の重ねをいましめつるための設なれば。あながち孝悌忠信なしといふべからず

○髪かたちの風俗はさらにもいひぬ。衣服調度は至れるまで。時々流行も。まむしのうちよして。いさゝかのたがひのあれと。又もとのさまよかへれり。されば先へも出でやま。あとへも戻りやまき中ほど居るべし。煙草といふもの。むかし南蠻より種を傳へて。我朝に流行すること。後一たび絶えてなかりしを。ふたたび流行して都鄙とも騒ぶことなり。火の過ちあるをもて。停止となりたれども。人情の好みやめがたくてや。今も貴人も召さるゝととなりぬ。その頃のこゝやありけん。洛に落書あり

止めたまひ公家のあし輕長刀。法師のたむこ元伯の醫者

○予がいとけなき時まで。忍び提灯といふものありて。貴人の私用よ志のびて。夜行などせらるゝ折など。提灯を替りたる紋をあるしてともせしが。そのおと流布して。誰もくかり紋をつけざる者なし。これのも人よその人と志らるまじき爲の用意なりとぞ。されば公卿武家に限るべし。旗の紋を深め。幕の紋をつくる。誰某と知らずるためなり。農人。町家までも今の紋ありて。定紋のあらそひあれども。もとより農夫。商賈などよの紋のなきそづなり。羽織といふもの。道服にて。禮服よあらむ。これよ紋をつくること。いよゝいこれなしと思ひぬ。世の中の移り行くありさま多くなみなかくの如し

○都會に住める者も。美服を着し。美味を食して。瓦葺の家よ起臥し。片田舎に産るゝともがらぬ。鹿服。鹿食を常とし。むさくろしき所よ住むも。生涯人の果報の身よそなせる。雲泥の相違のあれども。米を作る農夫。米を食せむ。絹を織る蠶婦。絹を着む。耕牛宿食なく。倉鼠餘粮あり。萬事分り已に定るといへども。各衣食のためよおのづからいそがし

○風情のこなたよりむかへる物か。將むかふより見するか。さらばむかふありて。我方

よまじとかもへむ。われはありてまたむかふよまじ

ながめやる雪の山路の朝ぼらけ。何とあをぬる一家のぬし

○月見よいづれば。それは隨うて来るかげ法師あり。汝の影なるか。人のかげなるかと問へば。返したる歌として

我がげを置れどと思ふ世の人よ。ものいふ口もたぬ影法師

○ある人予がもとよ来りて。繪は魂をいゝと申きこと。いかやうなることをして畫き侍れば。魂は入り候ことぞと問ふ。予こたへて云。すべて繪はかきさらむ。何ごとよても實心をこめてだよ致さば。たましひのいらむといふ物あるべからむ。他のことはいざしらす。繪は魂の入りたるとおもふ。諸國よて種々名畫も多かる中よ。我見し泉州左海一國寺と云ふ精舎あり。この寺は千の利休もしばらく居られし時。物好きを盡して。庭園座しき五間ほどもあり。一間は檜の樹一本をゑがけり。一間は臥したる鶴二十五羽むかりをゑがきてあり。いづれも彩色ありて。古法眼元信の筆といひ傳へたり。そのかみこの繪をかける畫師。この寺は寓居すること三年をかりの中よ。何ひとつ畫きたることなく。碁をこのみて。只それのみ日毎の樂みとして。あることかして遊びあるくよ。こ

やく三とせを經たり。一たびだよ筆をとりしこともなき。いかよも心得ざる者かなとかもひて。あるとき住持の申されける。その許畫をもて。一家をなせりといひながら。筆を取りたることもなく。圓碁のみ年月を過ぐさるゝいかよ。我衣食の費をいとふ。いあらねど。何處へなりともあそび給へ。愚老も所用ありて。京へのほり。ことよよりて。一年も在京せんも。かたしといふ。彼畫師さして。それこそいと名殘をしきこと候へ。さあらば。年来の恩謝。何か少しの畫をのこしまらむをべしとして。心がまへのみよて。又四五日ほどふる。住持は何をゑがくと見たくて待てども。絶えて筆をとらむ。ある夜小坊主の住持が居間よ。夜ふけて来り。ひそかよ申をやう。かしてよ行き給ひて。そと覗きて畫師のありさまを見給へとさよやきける。やがて小坊主よいざなわれ。畫師が居間をうかふ。明り障子の腰板よ身をよせて。さまざまの姿をかへつ。腹起もるありさまを見るより。小坊主を引きよせ。こよかしのぞくべからむ。そやく臥せよとして。その身も寝間よ入りたり。あくれを畫師まだよ起きいで。一間なる障子よゑがくを見れば。みを臥たる鶴なり。畫勢不凡よして。丹青の妙いふべからむ。さあるよ又の夜いかよとうかふ。前のごとく夜もすがら寝をして。あけなばかくや畫かん。とやせんかくや

あらしなど。獨りつぶさつゝして卧しぬれば。住持もあらぬ顔にて過しゝが。十日あまりよしして。その鶴およそ廿四五羽をゑがけり。またも夜ふけて覗き見るよし。こたびは肘をとり足をのべ。手を口よあてつゝ。鶴のふしたるさまを見て。卧しけるよし。夜あけてかの畫師がもとよ住持来りて。けふゑがき給へる鶴の姿いかやうよやそめぬらんと。よべ覗き見たる姿のさまして見せければ。打ちおどろき。禪師よそわがゑがくんとおもひかまへし心を。そやくも悟り給ふいかよ知り給へるよかと問ふよし。いやとよ昨夜そのものやうをそとうかゞひて知りたりといへむ。畫師それよりして。二枚のゑがきをして。杉戸の畫よ檜木一樹をゑがきて。いで立ちぬるとぞ。この檜木をゑがきし後。東國へ下向の折から。東海道箱根の山中にて。檜の木の花の心よかなひたるがありければ。東國へと下らむして。ふたゝび泉州一國寺へ立ち越えしかむ。住持見て大よおどろき。東國へ行き給ふと聞きしよし。又もや来られしのかなることよかといふよし。さきよ畫がきし檜の木の花。ひと枝足らぬところあり。箱根にてその意を得たれば。さざく立ちもどりたりとて。一枝をかきそへ。いとまごひしていで去りぬとぞ。畫よ魂を入るゝといへるも。かゝるたぐひとおもひぬといへば。ある人も感じてかへりぬ。

○朝がほを裁きたる日より芽がまを待つ。子を育つるおやのころも。かくやとばかりおもひしらる。二葉よりいや葉生いいで。いと細やかなる蔓の垣ほよ取りつくさま。いとけなき兒のものをたのみて。たちとむるよ似たり。蔓やよこえ。葉いよよしげりて。この蔓かのつるよそひ。彼つるこの蔓を巻きて。あらそふがごとく。漣ふが如き。路よまどへるものを案内するさまあり。あるは登らんとするものゝ手をとりに引きあぐるさまなど。繪よも巧めるものをや。そなのその日くよ色かへて。おのがじよよ漆めをして。風よ起くるの勤をまゝむるよことならむ。しのゝめのそら。明け行くほど。露を含みたるがそよ吹く風よもまれて。おもげよおきあへむ。ふりこぼせば。こなたの花のその露をうけて。雫も漏らさざる。まべて君臣相いつくし。父子相あそれみ。夫婦相むつび。兄弟相たをけ。朋友相あたしむよしとし。人の世よあるも。この花の如く。その日くをいとなみなば。さかりもいとながくひさしからんと。まだきよ起きいで。しのゝめの曙をながさみ侍りぬ。

○酒數獻よいたるとき。味なく。肴數種よおよぶとき。美みなく。煙草數ふくよ及ぶとき。よがみを生じ。茶數碗よおよぶとき。香ばしからむ。

之しかりし時を忘れて食好み。このみの多き秋のやま様

○予が江戸よくだるころ。親しく交る友ありて。雑黍の約を結ばんことをもとむれば。諾して後、その志しを見ればやと。ある時食客五人を養ふ。賄の事薄ければ。一人は黄金五兩をあて。二十五兩貸し給われと。その人、乞ひければ。いと安きことなりとて。みづから持ちきて。貸しける。此歳の末の債逼れば。又二十五兩貸せよといふ。先は貸したることをもいひて。こたびももて来り貸しよけり。そのまゝ三とせを過ぎつれども。こがねのこと、少しもいひて。前よかされる心もなく。いよく親しみ交りける。その人、そこから禍ありて。多くのこがね入ることあれども。少しも色は出ださざりけるが。その妻夫は云ひける。五十兩のこがねをかりて。七とせ過ぐるよ返さざる。欺き奪ふ心ぞといふ。否とよ。彼人予をあざむく心なし。之しきがゆゑ返さざるなり。刎頸の交情。婦女子の知れることよあらむ。ふたゝび此事をいひ。夫婦の縁を絶つべしと。いさどほれば。この後妻もいひすなりぬといへるをなしを。ある人来りて。予は告げければ。予は其の無を無として。返さるゝことの能はざるを悔れば。告げたる人また彼處にいたりて。予がいふことをその人よかたる。その人こたへて云ひける。人の不實をなしたりと

て。その交りを絶する。知己親友といふよあらむ。欺くも不實も。その折からの是非なきよして。世は始めより詐偽をかまへて。人よ交る輩はなし。そのいつころとあざむくことを許さざれば。知己親友といふべからむとて。予が詞よこたへけるよし。そのことをきよてよりも。借りたる黄金の緘も解かねば。封じたるまゝを。その人よ返して。予はその許を試しどとて。ますく厚く交りぬ

○憐愍ある主人は忠を盡し。慈悲ある親は孝をいたま。誰も為すべき事といへども。めであるすべき事こそ。愍みなき主人。慈悲なき父母といへるもの。世はありとしも覺えぬ。さああれ主人もし下々の心をおもひやるほどのなきけもなく。養父。繼母となる人は産の子をぞだつる慈悲なきひとぐも。たえてなきよしもあらざるべし。かゝるひとの心よ奉公人の威をもて。自在に召し仕ふべきものと。心得る。己が身をつめりしことなければ。人の痛さを辨へざる。世事は目のなき都合點。手前ぎのめの不人情よして。研まかけざる鈍刀の如く。磨かでおける鏡よひとしく。慳貪のよぶきよりいで。邪見のくもるよりおこる。これらの人五常の名のみ聞き知れども。主従と約するのいかなる義。親子と契るのいかなる理。夫婦と縁むのいかなる誼。朋友と交るのいかなる道といふこと

を身とり。つとめておこなわれれば。心よも感じ得べきよあらむ。假令。不仁の主といふとも。その因縁からずして。君と憑み。慈悲なき養父。邪見の繼母たりとも。契り深うして。子となれば。不仁の君の臣が忠を盡すのよき的よして。無慈悲の親の子が孝行の目當なり。かくて主の爲としあらば。こらへがたきもあくまでこらへ。親の爲としある事。まのびがたきもいよく忍ばむ。その他の堪忍平抱。ものゝ數よもあらざるべきを。この行ひなき輩。人の形に受けながら。犬羊鳥虫よのかとるべし。犬の夜を守るの性ありて。飼ゆる家よあやしきを吠へ。羊よ遯護の心ありて。兄弟乳房の順よ違ひを。鴉の母鳥よ反哺し。鳩よ三枝の禮あり。鶯の時鳥をやしなひ。螟蛉の裸羸を子とするの類。人常よ知るころなり。およそ一家の繁榮。かこき主人ありといふとも。忠ある人を得ざれば難く。忠を有てる奉公人も賢き主を得ざればかたし。主從互よ心をうかむ。白眼競して。たるもの繁昌したる例なし。そもく天の命をうけて。世を治め給へる方。晝夜月日の如く。萬民の爲よ心勞まばし。もいとまなし。その他の諸民のあけくれ名利よ耽り走りて。國を治むるつとめもなく。己が眷屬をやしなふよ。身の勝手のみをあがきて。専とをる。飲食と淫欲のみなり。その心犬猫などと同じかるべし。人を萬物の靈とをる。主從よ仁

忠備たり。親子よ慈孝をたもち。兄弟愛敬をいだし。夫婦柔和とよのひ。朋友信義のねんごろを深うして。おかしして後。人の人たる尊稱あり。かくてぞ一切有情の物の司となりて。畜類と異なる天下の靈なるべし。つらくおもふよ。その萬物の靈たる人。古より世よ念を残まよ。惡事の種々の怨靈多く。善事よ至徳の念をのこせる例。いと稀なり。口をしくこづかしく。又淺ましきことよあらすや

○難波の野外。的人といふ野業仕あり。裸よて腹をさし出だし。この處をねらひ打てし。自わが腹よ指さし誓り。丸を込みたる鐵砲をうたせて。黄金をもてかけろくとしつる。衆人をぐさみよこれを打てども。飛鳥の如く身をかわし。丸を避くるよあたるもの絶えてなかりしかば。そのころ世上よ噂いと高かり。さて絶術の師範をる翁。何某といふあり。その術のまぐれたるをもて。門弟百有餘人あり。ある日門人來り集りて。何くれと物がたりのちなみよ。的人か術を感じ。かゝるあやしきものを打ち得ざる。我らが藝のかきんなりとて。師よ請ひて。かれをうちて給これといふ。師の此事を聞くよりも。頭をふりて云ひける。正統の火術を傳へ。教ふるもの。さやうの野業仕を打ちころすなど。云ふこと。予が教導の法よむけり。無益の殺生なれば捨ておくべしと。門人を諭せども。お

のく聊もうけ引かき。いかし師の仰せらるゝことゝても。世もしさる業を爲せ難多
くあらば。火術の學びてせんなし。今より師弟の約を辭し去りどき申まべしと。詞をそろ
へて述べければ。師も業まさりければ。是非よかよばむ。さらば的人を打つべしとて。
そのことを願ひ辭へ出で。見使を請ひて。門人あまた引きつれ。野外に至りて。的人を打
たんといふ。的人をどり出で。こゝをこそ打ち給へと敵く。師の鐵砲は玉をこめ。火
ぶたを切りて衣類を打てば。的人煙りの中は驚れたり。門弟驚き屈伏して。師が砲術の妙
を得たるを貴び。いかなる法にて打ちとめられしよか。與義を許し給はれかしと。みな
くしひて乞ひぬる時。この術なんぞ與義あるべき。かの的人は狐を役するなり。野干食
の爲よかれは隨ひ。身をその衣服の中は遁れて。形容を迷惑の人よ現とす。的人を打つも
の。虚空を打つなり。予のその遁れし衣服を打てば。野干の死骸もあるべきなりといこ
れたりしが。その翌日たして人の噂。老狐の丸は當りて死したるが。難波の里にあり
けるとぞ。師の能道をおこなわれて。邪魔のありかを知れる達人といふべし

○速江國相良。平田寺といふ精舎あり。いつのころの住持よか。いと慈悲ふかき人よし
て。多くの徒弟を教育する中。黒法師と異名を取りし惡僧あり。その性。人よ諂ふことな

く。よろづことがまゝふるまひけれども。住持の嚴しく戒むる事もせむ。歳だに經なば。己
より耻ぢて。その行狀の直るべしとて。まなほなる者を却りて。きびしくして。惡僧をばさ
ほどよもせざりければ。人々の云ひける。愛する弟子なるが故よ。かむかりの人よも依
怙の心あるべしなどいひしろふうち。ある時。惡僧の寺を出奔したり。住持のかどろきつ
ゝ。人をしてこゝかしこ求めしむれども。行くへの知れざりければ。人々あつまり。失せよ
しものもやあると。穿鑿するよ。をりから四五日前かた頼母子講會に取られたる黄金八十
兩を。住持が手むこよ入れおけるが。見えざりければ。みなく打ちおどろき。叔こそ黒法
師がまじぎなりとて。大勢手わけして行方を尋ねんとするよ。住持とめて云ひける。い
彼もし金を持ちて行きたらんよ。最中尋ぬるよ及ばむ。それさきよ人をして求めし
むる。欠け落ちして旅へ出でなば。さこそ不自由なるらめと。路資をもあたへつかとし
たくとおもひしゆゑなり。已よ八拾兩といふ黄金を持ち行きなば。さし當りて困りぬる
こともあるまじければ。とかくする中いづこへか身を寄すべし。此事只ひそかよして尋
ぬることあるべからむとて。後の詞よもいだしすなりぬ

○むかしある國の守り。短慮いんかたなく。機よ出でたる折からよ。暴風砂を吹きて。口

は入れどもうがひだよせずして。食物は砂ありとて給仕の輩をしりぞけなどし只諸ひ
頼ぬる族を容れて。忠ある臣下を損むること數多なりしが。ある時いかよして心やつか
ざりけん。鯉のあつ物の中よ。釣むりのありけるを取り出だして。膳の上よ載せおき申さ
れける。かゝる鹿略の調理いたま者。みないとまを遣まべし。庖丁の者よ。切腹申し
つくべきなりとありければ。料理せしもの。切られよけりとぞ。飲食のためよ。人を失ふ
こと。心あるべきことなるべし。梁の昭明太子。飯の中よ蠅の死したるがありしを。箸も
て取り出で給仕の輩よ見せじと。膳部のかげよ隠されしとぞ。いとありがたまきことなり
なり

○予が闇窓のもとよ。こつくと聞ゆる音。終日やまを。いかなるものよひまきよかと。窓
を推して。これを伺ふよ。老いさらばひし翁の。眼がねをかけて。庭の上よ石臼の目を切り
て居たり。予翁よ問ふ。石臼の目を切ること。その數日やよ幾むくぞ。翁こたへて云ふ。切
る日もあり。切らざる日もありといふ。又問ふ。老翁齡いくばくぞや。こたへて。今年七十
一なり。また問ふ。子孫ありや。答へて云ふ。娘ありとやく婿をむかへて。孫三人あり。予云
く。已よ娘あり。婿あらば。老翁かゝる業のせむともありなん。翁の云。家よ六人の過ぎの

ひまるよ。婿一人の働よして。他よ資くるの輩なし。われ白の目を切りたりとも。活計を補
ふべきの資力よ足らむといへども。欠伸のみよ徒よ光陰を送らんより。せめての鼻紙
の料をもたまげばやと。かゝるあぶなき業をもしつると笑ひぬ。人の親の子をおもふめ
ぐみ。高きも賤しきも。異なることなき。いとありがたまきものと思ひぬ

○名和又太郎長年。その父嚴よして。教訓の届きたる人なり。をさな遊びのまじりも。
兒らよ契約せしこと。正しく守りて忘るゝことなく。ある時。牛を引きたる童の唄など
うたひ通りければ。長年のあと追ひ行きて。とらを呼びかけ。云ひける。我をその牛よ
のせて。川端まで行けかしといふよ。童うけがひ答ふるやう。御身を乗せて。行くべき
が。賃よ何をかたまはるぞといへば。長年のよが家をかへり見て。門よ生いたる松を指
さして。何れの樹なりとも。その方が望みよ任まべし。とくくやれといふよ。童よるこび
て。長年を川むたまで乗せ行きたり。その後三とせがほどをへて。ひとりの男童を伴ひ。長
年が家よ来りて。長年が父よむかひ。三とせ以前のやくそくを物がたりければ。長年幼心
の藏なれども。かの童のこれを誠と心得。牛よのせたる賃をとたるよ。いかよいひ解きて
も。肯せむ。いかせんといへば。長年が父これを聞くより。さもありぬべし。約束をせし

またがひなくば。切らせて遣はすべしとて。童は望ませ。門前なる大樹の松を杣と命じて切らせ。牛飼よとらせけり。里人のこれをいひつたへ。名和が約束の松と呼びて。今よこをし傳へたり

○菅野藤四郎といへる人。料理の道はもとしく。もと淡路の産なり。ある國司よつかへて。後流浪せしころ。予が許よ米りて。二とせむかりを送れるよ。ある時。町家よ住居するとて。さまざまの物もとむる折から。先持佛を得んとて。日蓮の木像ありけるを見て。價をさす。又法然の畫像のあるを見て。價を聞けるを。伴ひたる人いぶかりて。その許は何宗よてかひするぞと問へば。菅野笑ひて。我等何宗と定まりたる事もなし。依りてこの二祖の中よて。價の下直なるを買ひて。その方の宗旨とならんとおもへりといへり。物よかゝらざるおもしろき志なり

○比叡の山なる飯室谷の松禪院よ。ひとりの老爺あり。坂本の産よて。農夫の子なりけるが。父母よかくれて。十四歳の時より。この寺よ住居し。今年九十六歳なりとて。予其者よあへり。せい高く。耳目健よして。齒牙かけたる所なく。白髪よして頬骨あれ。いとたくましくして力あり。他へいで。他の物を食はず。京へいづるよ飯を握りて。腰よつけ。尋常

の人の爲る二日の用をひと日よ足して。もどりければ。寺よなくてかなはざる人といたりて仕ひけるよ。院主三百貫目の借財ありて。移轉する事あたはざるを。深く歎きければ。老爺よらひながら。こゝよ今二とせ辛抱したまへかし。それら働きてその借財をつくのひすまして。移轉させ申さべしと云ふ。院主心のうちよ。何をかいいふときみおもへど。老人の詞なれば。たのむといひしむかりよて。きのふと過ぎ。けふとくらして。年月を送りけるが。此老爺それよりして。不毛の地よ物を裁ふ。また山林の下草を刈りて。市よ賣り。夜の繩なひ。庭を織り。ある人の爲よ雇はれて。晝夜寢食を忘るゝをかり働きければ。三とせがうちよ。三百貫目の借財をまませ。院主を太素よ移轉させけり。院主移轉の時。かの老爺が働きの莫大なるを謝せんが爲よ。伴ひて安居さまをべしとすゝむれども。それら此山よ八十年も住なれたれば。他へ行くの志なしとて。終よゆかをなりぬ。その後。院主多くの謝物を贈りたれども。少しも受けむして云ひけるは。院主の人を濟度するの役なり。物なければ教化しがたし。我等財を持ちたりとも。人の教化も出米ざる身よ。不用の財ありて益なし。財の用い人よありて。不用の者よ入らざる物なり。身を終るまで。食料だよあらば。何をかその餘を求むべきとて。かくて又後住よもいとねもごろ

よつかへしとぞ

○泉州環の休翁。茶道よりからぬ人にて。古人の糟粕をなめざるものなり。予とも
浴ありけるころ。茶具等の皆自が好むところをあつらへて。諸家の法則はかゝら
ず。もと豪富の家を起し。はじめを聞く。休翁手して料理することを好み。みづから俎
板より直り。料理して。酒肴をととのひ。見せよて高ひをそたらく奉公人を客として。くさ
くさの物をもてなし。扱ひひまたしけるやう。吾今そのもと達の働をもて。家業日よま
し繁昌せり。我等一人の所爲はあらむ。衆人はねをりて。我は忠を盡し給はるがゆゑなり。
けふの酒食は。謝禮の寸志よして。格別の珍味はあらねど。こゝろよく過さるべし。かゝ
れば今日一日。予が客よして。奉公人よあらねば。大かたの座興はゆるすべし。たゞ我ま
は。酔を盡して唄ふべく。また舞ふべしとて。家内はその日他所行さして。奉公人の遠慮
をさけぬ。この休翁が取りたてたる分家。諸國は多し。今猶朔日。十五日。廿八日の三日を
饗應の日とす。その日家よもてなし。遊び日他所へ行まるなり。遊びは遊山戯場はも
とより。遊里といへども。差別なく。主人が慰むほどのこと。奉公人よも慰ませ。私する
者の怨いとまをつかりすが例なり。家法はこやく人を取り立て。分家せしめて。つとめて

怠らざれば。家よ身を損むるのともがらなく。本家ますく繁榮して。今なほ家業さかん
なり。休翁いまだ隠居せざりし頃ほひ。用ありて京よ出で。何某の大納言よこじめてま
見えまゐらせし時。用のことすみたる後。くさく物がつり。大納言の仰せられけ
る。その許和歌をよまる。よやとありければ。左様のこといまだ心がけ侍らむといへ
ば。又仰せらる。凡大家を守るもの。文の道よ志し厚く。風流のおもひふかゝらざれ
ば。よろづかたくなよして。和らぎなし。脩身。齊家の道の和らぐうち。堅固を備へざれ
ば。人なづきがたし。その人となりて。風雅の心絶えてなく。この國よ生れて。歌の一首も
よむ事知らぬ。聲なき鳥を詩繪などしたる籠は飼ひたるよひとしうして。美々しく
構へたる家のあるじのかひもなしとある。休翁駐づる心を生じて。やがて大納言を師
範とし。詠じたる和歌多かる中。東武のかたへ下りしころ

秋といへば月も淋しきならしを。たれかあかすの沼よ見るらん

此歌人の辛苦をたへ忍ぶの意を述べたり。ある時。古今和歌集の序。貫之が康秀の歌を
評して。歌のさまの身よ負ひざるを誹謗して。商人のよき衣着たるよたとへしを見て。愕
然とおどろき。己が身のうへをさとり。これよりして生涯身よ肌着といへども。綿服を

さて。絹を纏はず。おそれつゝしみしとぞ。家内の妻子のさらなり。奉公びとのすまぐりまでも。衣服の制を厳よして。おごりなからしめたり。蒲團といへる古を思ひて。綾羅錦繡の類のいふまでもなく。よるの物など。すべて木綿のみよして。一家絹布を見ることなし。この家よ制禁の箇條あり

捉

一商人たる身分重ね着よても。絹の類を着まべからむ。たとひ分家の者たりとも。捉よ背くもの。身帯暖簾取りあげの上。同家業相成申間敷事

本家相續人誰

○予が晝を教へたる曉山といふ者。遊歴せる折から。信濃よ妻をもとめ。善光寺の邊よ世帯し。煙草を商ふことを家業とせしが。得意の家よて。蕎麥の粉を掻きて。馳走せらるゝ。好物なりとて。したゝかよ食ひければ。給仕をるもの。その大食よ興じて。しひての出だまを。腹のふくるゝもいとんで食し。さて飽さぬることを詫びけれども。聊耳よも入れむして。間をうかゞひての。盛り出だしたるよ。胸まで満ちて。腹よ入らむ。このうへの湯よても給はるべし。それよて送り食ふべきとて。給仕のものを退けたるあとよて。左

りの袂へ食ひたるさまよて入れたりければ。給仕の者の。湯を汲み来るを取りぬるひまよ。枕を持ち行き。こたひの山の如く盛りあげ。是限どとまゝむるよ。止む事を得ず。また湯をもとむ。身のわらじよて腰かけ居たれば。給仕の来らざるまよ。椀の下へ興ふかく投げ入れ。食ひたる體よもてなさんとせしを。蕎麥搔の枕のそこよひたとつきゐたれば。おのむ枕をも椀の下へ投げ入れたれば。なかゝ容易くだまべき様もなく。ありあふ杖などよて。かき捜し尋ぬれども。さらよ得ることなければ。事のよしあからさまよわびて歸りぬとぞ。物食ふよもほどのあるべく。しふるよも限りあるべし

○熊谷次郎入道して。關東へ下向せる折から。たゞ一人近江路より美濃へ越ゆる。山中よて。盜賊二人前後を支へて。路銀衣服をわたまべしとて。兩人刀をぬきつれ迫りよければ。入道笑ひながら。いと安き事なり。その方等も命をかけて。賊をまざとするの。身過の爲とおもひれたり。路銀衣服ともよ遣すべし。さあれど。こゝよ尋ぬることあり。聞きたるうへよてともかくもすべしといふよ。賊もその詞のよげしきよ猶豫して。いかなる事をか尋ぬるぞ。とくいへ聞かんといふまゝよ。入道の申さるゝの。汝いたゞ欲のみよ賊をなまか。又身を立つるところなくして過ぎのひの成りがたくて。賊といなりしか。このふたつの

返答を聞かまほし。そのうへよて。とらするともとらせぬとも。こが心よ任せんとあれば。賊等の互に顔見あひせつ。飲食だよ自由ならん。いかでか人を害し。人の物を奪ふべき。まかせぬよりして。命よ易へて。かゝる業をもてるなりと云ふ。左あらば今より我徒弟となりて。世をのどかよくらし。生涯無事よ過ぐる志のなきか。もし二人ともその志あらば。今より直に伴ひて。法をつたへて。一庵の留守居ともなして得さまべし。よく思案して。あたがふべしとして。持ちたる路資を取り出だし。二人よ分ち與ふれば。賊また顔と顔とを見合せ。土よ掌をつきて。左もなし給ひらば。けふよりして頼よ志を改め。御弟子となりて。これまでの罪障を亡し侍りたしとして。こがねをば手よだよ觸れせして。頭をさげて。あたりしが。入道の大よよろこび。懐よりかみそり取り出で。二人の盜賊が髻をなぞ捨て。法師となして。武藏野なる草庵よともなひつれ。一人を善心坊とよび。一人を法心坊と名づけ。武野念佛の弘通をなして。めでたき往生を遂げたりとぞ。入道徒弟十餘人のうち。この二人その始めなりしとかや。黒谷夜話よ見えたり

○犬猫をふかく愛するもの。大かた人よ情愛のうすきものなり。貴人のあきまへあれば。さやうのことゝあらざれども。下司よ多かり。飼ふものよ不便を加ふるほどならむ。人よも情のふかゝるべき理なるを。かへりて左もなき。心底世よもいとうたてし。東海道を通りける頃。予が宿りつる驛亭の妻の。種を愛すること類ひなく。飲食とも種よ口うつしゝてあたへ。他より食物などもらひたる時も。主人よ聞えもせをして。まづ種よあたへて。後よ人よも食ひせけり。主人も愚昧よて。かゝることを妻よも許せば。種よ對しものいふこと。あだかも人よ對するよおなじ。これよよりて。あたりの者。この妻よ他名して。種のかゝとどよびける。その妻おのれが子をければ。甥を養子としつれども。種よなからひよろしからむとて。讒言をかまへて。甥を退けしとぞ。此甥おふよ。あれを種よ見かへしとて。詫もせて。再び家よかへらむ。人みなつたへ聞きて。さらよ子となるべきものか。つてなく。その家つひよ絶えよけり。この妻養子を愛すること。種のごとくせば。その家ながくさかえたらんを。愚夫愚婦の所爲。邪路よおもむく。かゝる類世よいと多かり

○鴨の長明よ守りを給ひれと。ある人の乞ひける時

守りといふおのれもしらむ小山田よ。弓もて立てる紫山子なりけり

とよみてつかひしけるとぞ。神佛の靈驗を得んとおもふよ。已が心を正しうして。その正しき心より念せざれば。感應ある事なし。おのれが信を神佛よ通むるよ。命をもまつ

るほどの心なけれど。感じ應ぜざるなり。人とまじりて。人を頼むも。これと同じかるべし。小町能因が雨乞も。歌を詠せしのみよて。天地も感じ應むべからむ。天地もうごかし。鬼神をもあそれとおもひする歌よても。その讚歎してよむ者の誠心なけれど。あるしあるべからむ

○一言寺の庫裏を働ける老婆あり。年七十よなん／＼として。多辨いそんかたなく。あけくれ人の噂をいひ。無益のせひをの／＼しること。いとかしましくうるさければ。ある人。諷諫のころよて云ひける。多辨長舌なるもの。その意氣をむなしく勞して。塔馬呼吸を養ひざれば。必ともよ短命なりと。物がたりければ。それより後。かの老婆をほ長生やまたかりけん。物いそんとして。止みぬるさま。いとをかしかりしとぞ。さむかり生きのびたる老婆の。猶いつまでかせよあらんとての心づかひ。欲よかざりのあらざるよと。物がたりせし人のありし

○暴風家を倒し。洪水人を溺らし。地震て崩れ。雷おちてうたれ死するなど。世よこれらのたぐひを。なべて天災といへども。昊天なんぞ人よ災するの事よりあらんや。此よざんひの人みなわれより招くとまゐるべし。暴風の氣。洪水のまゝ出づる。地震て山くづれ。雷よ撃

たる。大かたの天地不正の氣。滯るところある時。そのふさぎたるを催促の順環よし。不思議なることよあらむ。人たま／＼これが爲よ横死を得るもの。多くの凶惡無頼の徒よあり。その天地不正の氣。人の惡心怒氣よ應するなり。所謂同氣あひもとめ。同聲相應むることわりとまゐるべし

○狐の奸智ありて。疑ひ多き故。かれがよこしまよひがめる性を忌みて。人愛せむ。狸の癡鈍よしして。暗愚なれば。人も憎まむ。予筑紫よまかりし頃。ある寺よやどりける夜。あるじの僧のあれ聞きたまへ。今宵は月のさやけきよ。狸どものあつまりて眠つゝみをつたりといふ。耳をまませば。その音くるかよ響けり。枯のおとよやあらんとうたがへば。左よもあらむ。向ひたる岡のこなたよ一むらの藪ありて。他よの人家なし。狸どもそこよあつまりて打つなり。住持云。これこの寺よ居ること。およそ九年よなりぬ。三とせ過ぎぬる秋よりして。人々この音を聞きつけぬ。予もいぶかりて。そのところを尋ね見しよ。只狸が掘める穴のみありといへり。あくる日行きて見侍るよ。そたして人家の絶えてなき地なりき。太平の民の鼓腹をなど。古語よもいへば。腹つゞみゆめでたきためしよや

花月草紙

雲萍雜誌終

花月草紙

雲萍雜誌終

花月草紙

ひと曰。一葉の船よのりて。とある浦わをこぎめぐりしよ。渚近き
まほやの烟の。ほとう立ちのなりたれむ。舟よりあがりてさしの
どきたるよ。松のむしろ。竹のあみ戸のおろをかなる窓よ。さしは
さめるものあり。とりてみれば。いたうたきしめたるみちのおく
がみよ。やごとかき人の手して。筆のまよくもしりがい給ふさ
ま。よの常をらむ。花よよをへ。月よおむらへて。世のため人のた
め。ねもごろよ教へしめされしおちく。ことわりをつくし。心よ
味ふるほど。いたりふかきこと共のおほかれむ。我も白波の名よ
や立つらんと。うしろめたけれど。そとふところよしてかへらん
とせしよ。うちよりあでなる翁立ち出で給ひ。手を引きて座よい
ざなひ。霞をまひ。露をまたむて。くみかひしつゝ。外面のかたを
眺めやるよ。園よの名もしらぬ草木ども咲きみだれ。池よの色々

の水鳥のあそべるふせい。うき世の外のことちぎれた。この仙境
よや入りけん。お不めくあまり。いかなる所よかとふよ。翁わ
らひて。この名よおふ蓬瀛の洲よして。ちりよまどる人の。長
くとまる所よあらず。もやうへりねくといひきて。袖をま
らひて入り給ひぬ。さての夢よやあるらん。現よやあらんと。まば
しためらひたるよ。ぬるともなく。さむるともなく。ひとりふま
をかつぎて。わが家よあり。いぶかしさのまよ。かして見わた
したれば。枕がみよふみの巻々あり。やごとなき手して花月草紙
と題せり。よくみれたさきよもてかへらんとせしよ。露たがふこ
とあし。うれしさがざりなく。何かしが老いぞ。まなずの薬えたり
けんもかくやと。とみよくりかへしぬるほど。かたのらより。もや
明けもて侍りぬとの大聲あるよ。おどろきていなき起き出でつ

つねのごとさうぞきたて。日かげのちりよまどらひぬるあ
りさま。仙びとの目よいいかよみるらん

この月の桂男のかき給ひきとや

このふみを。あまのさへづりとい。作者のひげのことむあるべし。
本の序。ふとのけぶりおどよびたる人もありとあん。げよふとの
烟も。盡くることおき心をふくめるよや。またこの巻々の末の章
の。ことよ心こめたるものとみれば。もとの序ともよびけらし。い
づれいといさうふかき心こめたるものおれば。おあしたかねの
けふりを。あるいともみ。かきみともみるは。その人がらよ
もかひり行無盡の草紙とやいふべきと。友垣のへたておきまよ
よあるしぬるお里

またあるひとのかき給ひしあり

花月草紙目録

花のこと	一頁	人まろか歌	八頁	水潦	十七頁
月のこと	二頁	樂のこと	八頁	邦道のこと	十七頁
船をしろこと	三頁	後のういさ	九頁	志と智とのこと	十八頁
天子仕をること	四頁	老たる人	九頁	軍の道	十八頁
女のふり	四頁	佛の教	十一頁	雨のこと	二十頁
好惡の事	四頁	筆のこと	十一頁	中熱のこと	廿三頁
忠孝	五頁	みやび	十二頁	文のこと	廿四頁
ことばとかめ	五頁	記憶のこと	十四頁	理外のこと	廿五頁
學問のこと	六頁	えぞの咄	十四頁	神佛の事	廿五頁
晴雨のこと	六頁	色紙登	十五頁	與市の事	廿八頁
くましの先見	七頁	大和歌	十五頁	つくり庭	廿八頁
古のくすしの道	八頁	淺くさの市	十六頁	劍難の相	廿九頁

兵の道	廿九頁	齒牙のこと	三十九頁	遠慮速謀	四十五頁
賢は任	三十頁	傍見の説	三十九頁	めつらしき好	四十六頁
理くつのこと	三十頁	歌歌のこと	四十頁	觀相	四十七頁
悟道の事	三十一頁	忠孝の論	四十頁	こかねをこのむ	四十七頁
諫のこと	三十一頁	花の雨かせ	四十一頁	大名の物語	四十七頁
憂國の語	三十二頁	揚火のこと	四十一頁	まかの教	四十八頁
まことのこと	三十二頁	戸富家足	四十二頁	秋仁潔の心	四十九頁
聖人の樂ひ	三十三頁	まねふもの	四十二頁	禍をうなかず	四十九頁
甲冑のこと	三十三頁	子を愛	四十二頁	補樂	四十九頁
學問の事	三十五頁	神入のこと	四十三頁	禪學	五十頁
不虞の備	三十七頁	酒つくる水	四十三頁	日かねの眺望	五十頁
小松内府	三十八頁	漂流の人	四十四頁	餘地のこと	五十一頁
酒色のこと	三十八頁	耳のちかみ	四十四頁	めしひしもの	五十一頁
樂のこと	三十八頁	人を評する	四十五頁	貴人の旅	五十二頁

觀相の論	五十二頁	農のふり	六十六頁	交友の道	七十五頁
降伏の勅額	五十三頁	人をせむる	六十七頁	落花のこと	七十六頁
虫の名	五十四頁	むかしのこと	六十八頁	たこ樂師	七十六頁
かつみ	五十五頁	性の善	六十八頁	久病	七十七頁
けみさやう	五十六頁	もろこしのこと	六十九頁	庭づくり	七十七頁
くすしの術	五十七頁	水がきをふ里	六十九頁	花を蓄こと	七十八頁
引のりをくせ	五十八頁	老農のこと	七十頁	秋の嵐	七十九頁
無遠慮のこと	五十八頁	産農のこと	七十一頁	晴雨のこと	八十頁
猫の忠	五十九頁	西風	七十二頁	畫の事	八十一頁
狐の愚	六十頁	日新	七十二頁	源語の深意	八十一頁
茶の事	六十頁	客番のこと	七十二頁	蠻書のこと	八十二頁
歌の評	六十二頁	ふみまねふこと	七十三頁	人の勢ひ	八十四頁
禪意	六十二頁	鶯の子	七十四頁	雨風の事	八十五頁
米のね	六十五頁	老衰の事	七十四頁	かたちの教	八十五頁

利害のこと	八十五頁	源語の評	九十六頁	贈をねること	百三頁
心を用ふるこゝ	八十六頁	藤花	九十八頁	瞳子のこゝ	百四頁
くすしの心得	八十六頁	山吹	九十八頁	費といふこゝ	百四頁
治療のこと	八十八頁	八幡祭	九十九頁	病のおこること	百五頁
落葉のかせ	八十九頁	人をしること	百頁	夫婦の道	百六頁
禍福	九十一頁	國體	百頁	鷹の虫	百六頁
ある山里	九十一頁	世々のふり	百頁	くましの道	百七頁
老鯉	九十二頁	上下のつかさ	百一頁	天人一理	百七頁
ねさめの床	九十四頁	民力	百一頁	和書の評	百八頁
前驅	九十四頁	兩頭のくちなゐ	百二頁	人の心	百九頁
やまひと	九十五頁	政をなす事	百三頁	人の評	百十頁
今参り	九十五頁	古歌のこと	百三頁	花月の遊	百十頁

花月草紙目録終

花月草紙

松平樂翁著

ひさしう浦の里よめる翁ありけり。めかりしほやくいとまよ。えうなきもくづか
いあつめて。まほやの窓のとよかいとさみ置きたるを。世のえせものゝとりてかへりよ
けり。またのとし。行きてみれば。こりをまよかいとさみ置きたり。かく白なみのよるく
ごとよかぢもつみしかば。つひよ。この巻々となりぬとど。このもくづのとしつかたよ。月
と花とのことながくしくかいたれば。それをもて名たてし。かのえせものゝせしこ
となりとど。あまのさへづりとこそいそまほしけれと。里の子のいひさ
なしときげば。ありといそまほしく。あじさといふをばよと事かへていそんこと。いと
ねぢけたるとなれ。さくららてふ花の。わが國のものなるを。からくよもありとて。さま
ぐためしなどひきつくれど。櫻かいたるもろこしの晝もなく。かなへりとおもふから
うたもなければ。なしとこそいふべけれ。いでさくらといそでしも。そなとだよいへば。
こと木よぬまぎれぬものを。ほのくくとあけ行く山ざり。雲かゆまかとおかりささみち

たるも。かきみこめたるゆふまぐれ。花のけこひもおぼろよみえて。こよのみくれのこ
まけしきなどいふに後かりけり。さいてうてなのびやかなれば。近寄り来るなどいふ
に。かのこにかへてごえおふ心よいふことなりかし。風よちりかふも。雨よぬるも。遠山
よみるも。軒をよむかふも。明ぼのも夕ぐれも。露のひるまめかるとさしなきを。こと
よわが國ぶりの姿よて。枝もまなほは花のかたちもゆたけく。匂ひさへもこちたからぬ
も。あやしきまでよこそおぼゆるものなれ。さるをいづこよもありといふにさらなり。曙
夕ぐれなどおもしろからんやうよことをおふるに。いまだ深くそめし心よあらざ
りけり。すべてことおもていひ盡くさんと思ふに。いとあさき心かな

月のさしのぼるころ。明ぼの空おぼえて横雲のたなびきたるよ。やゝ匂ひそめたれど。
遠山の楢よいざよふて。姿もみえず。からうじてさしのぼりけり。楢のうさも晴れよけり
と思へば。いつしか雲の一つ出で来たるが。ちかよるほどあやよくよ。月のかたより雲の
うちへかき入るやうよみゆ。こいにかよせんとあはし打ちまもるよ。雲のそしつかた。あ
かうみゆるよぞ。出でたなれたらば。とやかゝらんくまのあらじと思ふよ。いつのまよか。
また白雲の月まちがほよたなびきてみゆれば。むね打ちつぶれてうちみるよ。初のかも

より出でたる光いとあたらしうみえて。ことよさやけし。かのまちぬたる雲よむかへば。
又よせ入るもいとつらじ。月のいりてみれば。雲もさまがよこちたからむ。こゝかしこよ。
それとおもかげみゆるよぞ。ひたすらようらみこてみおたるうちよ。衣手もしめり行
きて。露もむしのねもさかりなりけり。つくくとむかひ居たれば。心のこてなきやうよ
こそおぼえしか

たゞうどわいさり船といへば。おなじやうよつくるものと思ふべけれど。こゝきつくり
ても。おのづからよくとのひて出で来るもあり。こゝのよくかしてあしきもあり。打
ちみていいかよもよきが。のりてみれば。たがふもありて。一つもおなじからぬものぞか
し。波かぜしのぐと思へば。行くことよぶさもあり。行くことよきものよわきもあり。い
づれいさゝかもふしなきのなきものなり。のりこゝろみてそれを明らかよしり得てこ
そ。遠くへもよせつべけれ。むかしある人がひとをみて。いかよもよきひとなり。いさゝか
もあしきところなしと思ふに。まづおもひかへして。聖のしらす。かしこき人とても。いづ
こもくまなくよき人のなきものなるを。さみゆるに。わが心のくらめるなり。まづその人
のあしきところへ。よくしりてのちよあげ用ひ給へと。何がしがいひしと聞きしが。

翁が船よのるも。いまいふごととして。あしき處々をしれよ。あしきかたへの波かぜうけ
 を。よわきよの波風ある日。沖をのらでありしかば。つひに危きをもまぬかれき。
 久かたのそらよまかせて。わがさゝやかなる才を用ひざれといへど。そらよまかせる
 一深き心あるべし。星の光みても。そや沖のあらき風吹きいでつ。このあたりへの。あまの
 ひるつかたふさくべしといふ事もしれよ。心してのるを。空よまかまところといふため。
 沖の風ふくもふかぬも。といひして。今この波平らかなれば。そやこそ出でて行くを。そ
 らよまかまといひよじ。ものくふものよてもあれ。すべてみをやしなふ道をつくし。その
 ほどを慎みて後。いさよをそらよまかまべきを。やしなひのことのころとせむ。たゞ
 かのがほりすることよのみ隨ひて。いさよをそらよまかすといふもありぬべし
 雪のふりたるよ。こすたるよもくちをしければ。かのたかねの雪のといひたれば。何とな
 う打ちあみて。また立ちもやらす。さまがよ捨てもあかで。さらんなどよ。あれかゞ給
 へよなど。ほのかよいひしこそよけれ。いとも女のかゝるべしとぞ
 竹をこのみめづるも。菊もとちまも。こととりあることよのあらぬを。さまぐのすること
 りいひてぞえおふぞうるさむ。つくもむしむらふも。げぢくくらふも。何のことわりあ

るものよのあらむなん

親孝よけりまると。このみを人となし給へる御惠。山よりも高く。海よりもふかき。またその
 かやもわれも子等も。かくながらふ。君の御惠なりといふ。あさかりけり。そのむくい
 よて。孝し忠まるものよのあらす。人志らぬ深山の梅の花とても。かほらざるなく。みた
 よの驚として。なかざるなく。子となりて。かならむかく。臣となりて。かくあるべき道
 ね。もとより人よそをとりたることよて。鳥獸も親をまたひ。子をこぐ。み。冤牛のことさ
 へ語りつぐものを

霜夜をまびて。水鳥のなくを。物志りがほなる人が。水鳥のさへづるよといひしを。おなじ
 やうなる人うちまゝて。鶯の轉るなど。いさけど。水鳥のといふ。いと物ごとよあらた
 まり。めづらしきことをまゝしかなといふ。初の人うそぶきながら。とし姫の巻よ。水鳥の
 とねうちかとして。おのがじよさへづる聲とあるものをと。心得がほよいひたるも。そ
 し。もとのめづらしきこといふべきものか。そむきを去のみ給ふやといふべきを。
 かろういいかよといへば。からきものおそ好み侍れといひしを。とひし人よらひき。ある
 べき人よいひもしなん。人をもあらで。かやうの事いふ。くらき心より出づるなりと。

人のいひし

かの人の雪ほたるあつめし窓は年をつみて。ふみゆる道は心をつくし侍るなり。されば世中の事より。いとくとく侍りといへば。さるおそまおとの道まねぶ人なりけれと。ほめもの走るものもありとや。もとより道まねぶもの。五のつね。五のみちよりして。人をさめ。己をさむる道まねぶより外のことなき。されば世のことよきとく。今のあたりのみか。千とせの前つ世のこと。みぬもろこしのむかしいまのさまより。さかりおとろふるさざし。人の心のうへより。仕ふる道のくさくさ。至るまでも。明らかなるをこそみちまねぶ人といふべけれ。この世の事。おろそかよて。いかで道まねぶ人といふべからんと

ひでりつゞくころ。こちかぜふきて。雲の出でたるよぞ。さらばけふこそふりいづらめとみるよ。そのかぜもいつしかやみて。雲もむら／＼とたえまがちよなれば。そや日のかげのさらめき出でぬ。また雨のふりつゞく比。松ふくかぜのおと。いといさざよくて。とやこれなんと見れば。雲まもとやむら／＼青く。入り日のかた。こちたままで紅ふかくみゆるよぞ。このよの月よ明らけくこそと思ふよ。月出づるころ。雲出で。また玉水の

音するものぞかし。代々の亂れをさまるさにも。あが心のうへも。この如きものとかやあるくましが。君のなならむをこん秋の頃。何ぞのいたづまよか／＼り給らんといふを。むづかりて。いかでさることあらんと。秋までいひぬ。つひよいたづまよか／＼りてければ。いひあてしくましよ。あなんもおもておせなりとて。よそのくましまねぎてけり。さま／＼の藥あたへたるがゑるしもみえむ。初のほどにうちのそこねしなるべしとて。うちとゝのふる藥なりければ。むねのあたりいよ／＼くるしく。ものもみいれねば。くすしも心得て。そのくすりのやめつ。こたびの汗よとらんとしても。ゑるしなく。くださんとすれば。そのらのみいたみて。いよ／＼くるし。せんかたなくて。ころみよふとてうぜし藥。そのやまひよあたりやしけん。のみくだまより。むねのうちこゝちよく。終は其やまひ愈えよけり。いのちたまけしひとなりとて。家傾けてもむくいまほしく思ひしとなり。さるよおん秋。いかならむこのやまひ出づべし。このくまり今よりのみ給へといふを。いまひとりのまのこ。いかでさあらん。されどさいひ給らん。のみてまらるべしとて。ひとごとのやうよのみ居たるが。つひよそのやまひもおこらむ。つねよか／＼りし事をかりしかば。さればおそかくあるべしと思ひしを。あの藥のまでもあるべき物をと。いひしとや

くまじもいと心高くなりよけり。むかしは巫醫などいひて。むかしのくまじのふみよ
り。さまざまのまじなひごとをもかいかけるを。樂ももとおほくまじなひより出で
しのもあるをあらで。おのくまじいかでまじなひまきまきと。心高く思ふ輩ぞおほかめる
あるひと。人まろがあかしのうらのといへる歌をめぐらしげよ。打ちかへしうちをして。
いかよも名歌なりけりといふもをかし。ひとりがいふおのうたおそ。そのおろの體よも
あらをなん。撰集よもまさしく。それともかゝる。何のおほんかみの歌。何のほさちのよみ
給ひし歌などいふをものせられたるたぐひもあれど。打ちまかせてといふを。あな
かま。かくなのたまひそ。あらはるべもおの歌を。人まろがなりといふものをと。争ふもを
し。おとよおの歌の。筆がなりとどいふなるよし。それともかゝるおと。かゝる人など
よにいそであるべきを

いよしへのととだよいへ。いとおほとがよ。事少なきものと思ふが。いかでさの有りな
ん。それのかの太古の世をいふよ。むかしへの今の世よりもひらけぬれば。今の樂もて
いふとも。横笛の手のまげさも。筆のおとよ左手用ひしも。かの蘇香のつくりさまのたぐ
みなるなど。いかでおほくまじなるふりといひこと。さるを。樂のまひなんども。手を少くし

ておもしろからぬさまよまなし。樂もおろの。いと長く引きのむして。人の睡生むる
様よするを。高き事と心うるぞ淺ましき。雅樂とても。人の心をたのしましむるものなる
を。睡生むるを。本意とせんや。おとよいまの樂の。房中又の妓樂なるを。おもしろからぬ
さまよなすど。本意うしをへりともいふべき。樂のおとよ殊よあやまりのいとおほきを
も。あるひとなきぞうたてきと。人の口まねびよ。人のいひし

人の心のひらけぬるよまたがひて。ならしむかのづからかたりぬべし。百とせもへな
ば。いかよかとり侍らん。かの今の茶たつる道なんど。いかをあらんといへば。おのも
よりすたれぬべし。茶いるよつば。あるは茶のむ器などよ。ちのちのおがねつひやまもの。た
れかあるべき。むかし人いかでおれらよ財費しきといへんかし。たゞえみじのならし
などのやうなるおと。おほくたぢまじり。みるとおろわかやかならむして。利ある事など。
せとやなりなんといひしとぞ

老いぼれたるものおそいといたうあさましけれ。かほの色もくろみもて行くよ。雨くも
のむら／＼みゆるやうなる物さへみえて。さよ波のしわよりくるよ。おしもうちかめ
て。ひざをむるさまし。おのぶぶがちよ涙おしのごひつ。老きいたひておほもわなよ

つゝ耳のかの時まらぬ蟬の聲よ。ものゝねもうとくしく。おのが耳よいらねば。人もさかじとやいと聲高よのゝしり。ものくふよも目うちまづめて。かほの大地地震なるやうに打ちうごかし。こてのこなをさへうちかみつゝ。あるぞ淺ましき。かくての人よもさけておそ有るべきよ。若うどううちまじりて。ひとより先よいざり出でつゝ。老いたるものよとみづからゆるして。人の厭ふをもいとを。益人よさして。わが齡ゆづりてんなどばうぞくよいふも。かたそらいたし。おとよ審みたるものなんどい。たをやめなどふたりみたりをむさらをおきて。たのしむもありとや。それらにいやしき身なれば。かぞいろ父母などやしなけん為よや。鬼が岩やよ立ち入りて。くるしきを忍びて。害づかへるをば。あわれよもいとほしくも思ふべかめるを。猶老いぼれもてゆきてい。わがかく翁びたるをもしらむ。昔の心ならひよかゝる人あろさ心もありやせん。されどひとのかならむ衰ふることよりよして。老いむ。しなむのくすりもなければ。せんまべなし。されどかゝの狼藉のことなんどい。いふも更なり。よよも人も速ぎかり。くりごとなんどのおろかさを。いましめたらば。そしりをもまぬかるべし。老いぬるとてまのふよりけふよかゝるものならねば。かゝみのかげもおもなれて。みづからのおとろかざんめれど。わかき時よ老いたる人み

い心むへ。わすれをしてこそあるべけれ。ことよわがかしこげよいふことい。いつか人のいひしことなりしをも。あるいわれ。またい耳よいらで。まめだちていふを。わらふをまだしらむ。このこととやいく度きしをなど。およびをりてわらふをも猶よそごとと思ひてや。ひろらかよあきてわらふをまたしらふ

わが欲を欲もてふせがんとするい。いとかたし。けふ盃よひとつ酒のまんよりい。あすのころよまかせてのますべしといふがごとし。この世のかりのよなり。かの國よよきねの鳥。よき色かの花よりしてなど教ふるい。その國のおろかなる民ぐさの。そかなまきほどもしらねぬ。かりのよと此よをいひ。君と親のめぐみのなよとひとよこたへんとか。よみしもありとかや

この筆のいとろし。みたびよたびものまれば。みなかぶろのやうよなりぬとて。とみよ物かくをりの墨もすらで。硯の海をかいまひし。かきこつれば。なげおくよぞ。まじりや秘閣のそぎまなどよ横たひりて。いつか先もつりばりのやうよなりて。かゝるよかゝるよを。またおしげなくたてぎまよ。ひかたのあたりよて音出づる計よかひまひし。あるい齒もてかみくたき。又の墨もて筆の先をおしひしぎてかきつ。かくていかにいのかの

長かるべき。よき筆をばまづかきとるもしづめてし。物かいたるあとよてもあらひものし。紙は押しあて。又のすかしみて。一筋も亂さじとしておくめり。いとゞいのちの長かるべきことわりなり。そやくそじなると思ふをば。いとあらくしくしなして。これみ給へ。みたびよたびよそやかくなりしといふもをかこ

風流このむもの。今のせいとおほかれど。いづれをまことのみやびといひも定めん。只月をみ花をみるとも。いかでいけん。歌よみからうたつくとて。いかでいけん。いまのみやびといふ。まづまが名をてらひてんとかもふより。をかしとかもやでも。いよしへ人のこのみしもの物まねびして。それもて名得んとするもあるべし。うたよむとてもよそのおろよりよみいで。よその口まねびして。人よてらひてほまれ得んことをのみ思へば。心よもあらぬおとをよみなし。あるならのみやこのふることをあつめてつくりなせど。よみなす心のうちの。今のよの末が末なるふりを改めを。かくて古よかへせりとかもふおとあるべし。またいせよつかふるみちをもよよして。ひとよ高ぶるみやびもありなん。なかよの謝氏とやらんの妓女携ふること。かのうつりといひざえといひ。世をも人をも。をさめものして。ちとせののちも名をあらわいさをあれば。よしよか

らぬことのありとも。よきよくらぶれば。ものゝかむならむ。さるよ何のかぐのしきもあらで。只色よふけり。酒よのまれて。かゝをりありき。わがすべき事をもせを。昔の世のみやびなりと思ふたぐひにいふよもたらじ。たゞやんごとなき人の。花をみ月をみるとも。いかで心のまよよまべき。あれひとりおもしろして。夜ふくるまで月をな宴よふけらば。大炊どのゝあたりゝさらなり。をきなんどをこじめとして。睡ることもえせじ。君のおそくいねばおそくも起き出でなん。末つかたのものゝ猶そやく起きいでぬべしとかもひやりて。名残をじとも打ちまてゝ。ねやよ入るをこそ。其ほど得しみやびといふべけれ。ことよ月花の宴とても。それをばよそよなして。たれたる事よのみ。夜をあかすなんどいふよも及ばをなん。いでや武夫ならば。かの樂横たへてからうたよみ。弓よ矢をげて歌よみしなんど。まよとのみやびなるべし。みなわがまべき事をもせを。わがほどをあらで。いやしきものゝ高きまねびし。たかきものゝこかなき住ひなんどのまねびし。からうたつくるものゝ。唐くよの物商ふ賤よてもあれ。うるまくだらの人も。から國よちかしてや。そのかいたるものなど殊よたふとぶたぐひもあり。歌よむものゝ雲のうへ人ならば。いつも名たゝる人のやうよおがえて。つたなき歌をもうつしものして。もて

あそぶもあるべし。又いふるきもの集むとて。今の用あるものよかへても。ようなきものをもとむるもありぬべし。みやびの花のかをりなり。花と實とありてたりなん。されどおのかをりありておそ。梅の桃よまさりぬれ

よく物を心よとめておすれぬものが。むかしいつおの山よのぼりしが。かゝる峯よ松のいくもとありて。そのうちよかく枝たれたるよ。いま一本の高くそびえてたてり。そのかたならよまさの大きやかなるが横さまよ生ひいで。青つゝらのかゝりしさまなどゝかたるよ。いとおまやかよおほえ給ふ物かな。君が庭もその山よよりてつくり給ひしや。松のあるなかよまさのみえたるが。姿いいかよありしかなどたづぬれば。わが庭よまさのありしや。つね見ればわまれたりといひま

蝦夷の人よ飯をあたへしかば。いとよろおびながら。そおらくひおおしてけり。やよ米のたまの齧つなぐものなるを。なごかくおろそかよなをかといへば。われら米くひていのちをまたうまるよあらむ。さけといふ^能をくひていくるをといふ。さらばさけのいをよていのちをむのぶるならば。それをばたふとぶべからん。いまその足よときたるもの。さけのかをならむやといへば。あむしかしらぬたぶけて。君のあしよつけ給ふわら

うづとやらん。かの米のいでくる草よあらむやといひしよぞ。あなどるまじき事よと。人のいひしとぞ。わが國の人よよその事を忘らねば。あぞ人のなりかたち。わが國の人とたがへば。いと愚て。何あらぬものよと思ふたくひぞおほき。それよりからくよてもあれ。えみじの人よてもあれ。たゞすがたのみなれぬをみて。そらかへてことむのわきがたきをまゝて。又あらむ。心せむくよそみぬ故なるべしといひぬ

速州政一あその色紙塗てふものあり。山のふもとよかけひのけしきかいたるよ。西行法師の「とく〜とおつる岩まのこけまみづ。くみほままでもなきままひかな」といふをつけたるが。あるやんごとなきひと。かの茶の道とてまひてかゝることまねぶこそ心得ね。そのほどをこそ思ふべかめれとて。上句のそのまゝ置きて。「くみてよわたる人もこそあれ」と。つくりなほしたりとか

やまと歌。人の心よりあめつち鬼神をも感ぜしむるなどいふ。和歌の道よかざることよあらむ。たゞ一つの誠もてこそ。大ぞらをもうごかしつべし。漢の高祖の太子うごかまべきわたくしの御心をさまぐことわり盡して。人々諫むれども。うけがひ給ひぬ。さるよ周勃といふ人が。口よいひ得ねども。よからぬ事を忘れぬ。そのみことのり。

をばうけじといひしひとことよて。さむかしの御心まどひもこれ給ひしとか。さればよしことむのそなをさかせたりとも。誠のつらぬくよあらざれば。えうなき事なり。まこともつらぬきて。ことむの色もそなとりなば。いとむひとの心をもうごかし。やうらぎつべければ。一やうは賢だよあらば。花はなくてもありなんとはいそじ

羊のくれよ。淡くさ寺のあたりは市といふ事ありて。ことよ人おほくいづるなり。ある人さつまのくよよりあつびの貝おほくかひもとめてけり。その貝のあなをふたぎ。木もてふたをつくりて。その市よてうらんとをかりけるが。折ふしきとる事あれば。人よたのみてひるつかたよの来るべし。それまでようりてたべといふよぞ。もて出でようるよ。かへりみる人もなし。さればよ。かうやうのもの此市よてうりしたためしなきを。えうなき事よ時つひやまものかなとおもひつよ。いかようれども。かふものをなれば。ゆきよの人の袖ひかへて。これめさせ給へなどいふよ。ひまをちてゆくゆり。ひる過ぐるころ。かの人きたりて。いかよとよへば。かくといふ。何といひてうりといへば。べちよなよとかいせん。かいやまの貝めさせ給へとて。うりしことたふ。かれほよみみて。わがうるをみ給へやとて。いと聲だかよ。そやなべよといへば。過ぎ行くものよ立ちかへりて。かひ求め。そ

こら行く人も聲をとめてかひぬ。みるがうちよおほくのかひを皆うりてけり。この市の人おほく出づれば。ことよかまびすしくて。まづかよ心とむるものもなければ。手桶うるものよさわらよといふ。さわらの木もてつくりし手桶よといふいとまもなく。さくひまもなしとかや。物の勢といふものもまたことよりの外なるものなりけり

こしぢの深山の。いと興ふかくして。雨よ水そふとて。山あひの谷河なれば。流とづればやまなどくづれてまざりひなせど。水はいと早くおつるとぞ。その深山よをめるをのが。一とせみのよ國へ行きたりしよ。雨いとふりつゝきてければ。人々堤よ出でよ水防くよ。かのをのこの水ふさぐ事もしらざれば。よねをいさよか袋よいれて。こしよつけるたり。そやその堤もくづれぬと。人々よばよれば。高なみみまざりて。ながれ行く水の勢よ目くるめきて。よげまどふひまもなきほどなり。かのをのこ故郷よて。左も右も山なれば。たぐちよ打ち登りて。かの聊のよねくひつくさるよ。そや水おつる心ならひよ。人よりしつめて打ちみるよ。あるかぎり岡もなく。山もなし。つひよおしながされけるとぞ。邦道あるといひ。なしといふを。堯舜の御代を邦道あるといひ。桀紂の代をなしと心うる。あやまりなり。三代の初によとて。かしこま人のみあるものか。いま名の聞ゆるを

見てもあるべし。そのかしこき人とてもそれく氣質とやらんもあるべし。またをりよふれての心あやまりもあるべし。よそごとの聞きたがへもありなん。またたゞしくまぐなる心より。まがごとをもまがごしまごし心うるをりもあるべければ。わが其ときよあひての。いまの道ありとおもひ。道なしと思ひつべしといふ。そのをりもしり得ぬもの。いつもおこなひをつしむよしかじとぞ

ころざし五つありて。智の七つより已上のもの。かならむいさをしをなす。志五つありて。智の五つむつあるもの。いさをしをなすこともあれど。おほくやぶれをとるとぞ。志五つよして。智の五つより已下なるもの。おほくやぶれをとるとかや。かならむ智おとりて志厚きもの。時をもしらす。ほどをもあままへを。人をもしらす。それむかりゆるして。わが智のたらざるをもしらざるより。かゝるものよといひしとや

いくさの道とて。さま／＼のながれどかち。かどたてゝさそひてらふともがら。をさまれる代よおほく出采ぬるもをかし。かつてむかしのいくさのこともしらす。今たかくかりぬべしと心つくまこともせむ。いつもどがながれくむ人を敵として。いくさをる心なりやと。さかたらざるをまかぬさましておし翁ありけり。ある夜夢よいくさをると

ころをみけり。かのつねの心から人より先よ何くれとまれど。かねていひしごとくあらむ。まづかたきよせ来るときこえしかば。いで物見といふ事つかうまつれといへど。たれも出でこむ。せんかたなくみづからのり出でゝみしが。いづこよかくしおけるつのものあるべきか。いかなる森林より遠矢の射るか。思ふのみよ。かたきのけしきみるひまもなく。こぜりあひなどこじまりたらば。みかたよこれぞと思ふものもなければと思ひつきて。まづむちをうちてかへりぬ。いでみの手よあしがるくばれよといへど。ころみなれし事よあらぬよ。夏草のいと高し。土地も平らかならねば。こひてくばり置まよし人もみえわかむ。そやかたきの近よりぬ。今やかたきのかたより弓とりまじへて。うち出だまべしとおもふよ。鳴神のごとして。まりのやうなるもの。二つみつおちたるよぞ。かねて思ひしとたがひたれば。いかゞせんと思へど。せんすべなく。やりたづきへてすゝむべし。かの一番。二番のいさをしをさらなり。場中やりとさなど。さま／＼のことあるをといさむれど。かたきのかたよ。長柄もみえむ。たゞ馬のりたるもの。弓などもちてかけ出づるよぞ。かくのいくさせぬものなり。道しらぬ人のする事よといへど。かたらふひとまじ。さいといとりて。かの定のごとくふりたれど。つものどものかたき

のかたむかりみるたれば。さいさいのふりざまみるものもなし。つゞみなど數の掬もあれば。そのごとうちたれど。耳よもいらせ。ねがめのかねの音さへ折々のよみたがふこともあなるよ。まして心も身よそのぬ折なれば。よみよる人もあらじかし。せんかたなくてふとみれば。かたならよもろこしの七つのふみを明らめて。つねよのさまよひくさることなどいひあらそふをのこあれば。かゝるをりのさまがたのもしく。それよかたらしみれど。たゞよこととりのみいひて。とみの用よたつべからせ。そやかたきいとしちかよりぬ。いかよ〜といひつゝ。ふまふみさきて。ひたあせよなりて。めさめしとぞ。かのこしのくよのをのこよ。その國の水よあひしよもたとへつべしとかや

月の夜半こそ思ふくまもなく。こゝろのそこもまみたりぬるものなれ。されど。やみの夜の空をれて。星のひかりさやかなるよ。風たかく吹きかふ。またまさりぬるやうよおぼゆるといへば。雨ぞいとまさりぬるをといふ。いかよとへば。いでや早天の雨のさらなり。草木の花咲きみのるも。みなこの恵よこそあんなれ。またその感情のふかさをいそぎ。けふの元日なりけりといふよ。雨をほふりてかすみきたりたる。げよ春哉とぞ思ふめる。師走のみをかのどやかよふりたるも。春まちがほよていとをかし。まべて春の雨こ

そのどかなれ。軒むより霞わたりて。いとこまやかよふれるが。夜うるほせどもふるといみえを。軒の玉水も間遠よ音して。まみ捨てし蜘蛛の糸よ。玉ぬくけしき。庭のかものかれふの底よ。みどりやゝそひ行くも。柳のいとの動きもやらで露そふも。ともいとのどかなれ。ともし火かゝげても何となくひかりまめりたるよ。かねのおとのほのかよひゞきくるも。心まみきたりぬるものぞかし。其外梅がゝのまめり夜ふかくよほひきたるも。花ようしとかこちぬるも。衰にありけり。春も老い行くころ。蛙の時得がほよまたくもをかし。ほととぎすのそつねいかよと思ふころ。村雨のそら〜とふり出でたるも。五月雨のいく日もふりくらしして。ふみの巻々くりかへしつゝ居たれば。何となく世中の事よも遠ざかりぬる。心ちぞまる。また暑さよたへかぬるころ。雲のみなざり出づる勢ありて。風ひとまきり吹きかちたるよ。柳遊葉なんどの葉うらしろくみせたるもまをさし。やがておほきやかなる雨の間遠よかちたるが。のちよのまきりよふりきて。ものおともきこえを。土のよほひきたるもいと心ちよし。軒むの玉のをだれかけたらんやうよ。たまみづのたえまなくかちたるよ。庭のひとつみづうみとなりてある。瀧おとしましたの水をしらせたるよ。人々まむし物いそで。うちまもりあたるもをかし。やゝ雲うまくなれば。池の面よのか

ぞふる計雨みえて。小鳥など庭へをどり出で。餌ひろふさまなり。はじめ雲のたち出て
 しかたの。そや空の一しほみどりよみえて。虹なんどみゆるよ。木々のみどりの庭漑よか
 げみゆるも。いとまをまし。老いたる女などかみ雷のおとよおどろきて。そひ出でたるが。けふ
 のいよかよりしときのごと。よくそれよけり。いま時のいかくとるよとまれなりなど。
 そやくり事いふもあり。かれいかくあてしてしなどいひて。かたみよわらひとよみつ。け
 ふの蚊もまくなかるべし。かみの音もいとかをななり。このごろのあつさもあまれの
 て。そしちかういづれば。夕月のひかりさしわたりて。草木の露も玉なまよ。こえふくれ
 るかのづの。ものまちはほよ空打ちよらみて。ふつよかなる音よなくもをかし。秋くるこ
 ろの雨の。さのふよかたりて。何となうさびし。萩のうのかぜ。外山の鹿のねなんど。月よ
 りもみよしむ心ちぞまる。つねよまなれしかけひの水の音までも。あわれふかくこそ。
 月の前のむら雨もまたをかし。まいてや、夜寒のころ鳴きからしたる虫のねの。雨のを
 やみよかすかなる聲して。まくらちかく鳴きよるも哀なり。この雨よ木々もそめなんと
 おもへば。たけな井どもおひいでなん。くりもそやおつべしなど。わらべのものさびし
 げよ。ともし火よむかひつゝいひ出づるも。げよさまくぐなり。夜ふかきかねの音の打ち

しめるものから。さまがよ秋の聲さえてさこゆるよぞ。まつ夜。よかれのおもひまでも。思
 ひいで。かねつく人の心をもあわれとおもふむかき感情のいとふかよりけり。紅ぢの漑
 めそふもしらぎくのうつりゆきて。ひとさかりみえるも。尾むなの露おもげよりちしほ
 れたるよ。りう龍勝たんのうらみふかくさきたるあたりも。つまぐし。あさがほの。みを枯れ
 たる中よ。さよやかよあかう咲き出でたるが。ひる過ぐるまでもしほみかくれたる。又あ
 りれなり。のよまの風の。おとろくしきものから。雨の夕だちよおとらざれど。さすがよ
 哀をそふる。秋のならひなるべし。しぐれのさとおとして。夕日よしろくふりくるも。ま
 た音かへて枕とふもをかし。月よりもやみの夜よりも。哀ふかき物よの侍らすやといへ
 ば。かうやうよいひならべて。げよもといふべからんが。一とせもふるこちしてよみ
 見れば。この夜のをとつ日よりふりいでしをとおもふ心のかわらじと。心のうちよ思ひ
 て。さよおしもまたをかしかりけり

速からぬころより夏のうち疲としてやめるが。いとおほし。そじめの泄瀉し。又いねち燕甚し
 く。汗流るゝごといで。舌の變ぜざるもあり。たちまちせん語妄語し。大渴となり。あるの
 發狂を。大陽の症なりとて。發表し。或は下劑投われ。二三日よして虚症と變じて死す。

かゝる傳經の早きのなかりけりとして。或は初めは附子用ふれば。彌乾燥甚しくなるなり。みなじをすてけり。さるよとや傷寒論は。蜀病のことを志るして。汗下も温もをべからざるよしかいたるが。其後代々それをしるものなくやありけん。回春に至り。その事を委しく記をを。いまのかの古きかたをせよなきものら。回春などおくれたるものやうよおぼえて。ころみず。ひとりそれをもて治療すれば。たちどころよいゆいゆれば。さしてのやまひよのなかりしといふ計なり。またちかきころより。腹いといたくいたみて。水を吐くやまひおほし。病とし。又は瀉胃などあつれども。おほくの治しがたしといふも。心用ひざるよやあらむかし。亞科の何のやまひみても。胎毒とし。つよき藥投じて。事されば藥力及びざりしといふたぐひぞおほき。いとおほくていと少なきもの。くをしとか

學問の人の道まねぶことなり。からうたつくり文つくるのせんなしと。よく人のいふことなれど。みやびの花のかをりのごとく。ものうるほひのごとし。まいてかの國のもじをおぼえて。ふみよむとも。文字のつかひがまよてふかきあきへのたがひめあるものよて。かのくよの人のごといまり得がたかんめれど。さきがよからうたつくり。ふみつくれば。おのづからことむの外なる心をもうるものとかやさくぬ。さればなきよのあかじかし。なめてこれを禁むべき

夏の麻の衣をきるべし。冬のわたいれし衣かきぬべしといふることとりなり。されど。伏陰あるをり。夏もまた入れし衣さるともあるべし。冬熱陽あるをり。ひとへあつせの衣をもきるべし。さるをこととりのごとくせばまたやまひをもうべし。今の世たゞは理のみいひて。國ををさめ。人を治めんとするもの。かゝることやあらん

神佛を信するものをみて。いと愚なるとなりかしと。わかきをのこ打ちよりていふを。君たちの年まかくても。佛などの道まよひ給ふ事なしとみえたり。いかよしてかくも心の校正しくむし給ひしか。いとたふとき事こそ。翁のもとより愚なればよや。ちかきころやまよのじと思ひぬれど。そをだよ心のまごやう。怠りなびいかをあらんなどと思ふぞかしといへば。いかよさの給ふ地ごく。極樂のなきことはいまの世たれかまらざらむといふ。神佛まよのじと。その地ごく極樂の事よあらむ。佛道心法のからくよの博學の人たちこのむもあるぞかし。またその修やうよわいて。ねぎごとなどするを。いと無下なることといふべけれど。から國よて。名山大川などよいのるといふも。こ

こらよの古より勅願所の祈願所といふも少なからず。さるを。もぬけぬる事。まづ易
 の道をよく心よけれ。いさまよのみちよ疑なきよあらざれば。この迷ひのとけがたしと
 かきけり。たゞよ血氣よていまいふといふきたる事よなりぬべし。くまりのわがいと
 ふものなり。やみてまぬとも藥のまじなどいひ。また酒よまひて。まがおそるもの
 なしなどいふたぐひよて。皆酔ごとなり。それらやまひよかゝれば。ことよあれげよう
 なり出だして。藥あたふれば押しいたゞきてのむめり。この苦きを志退ぐまじなひよと
 いふとも。まめだちてうけぬべし。またかの酒の酔さむれば。もとより拙き心のかそらぞ。
 何とかいひけんわすれよけり。そのをり。人いかりにし給らざりしかと。心よかけても
 のもくいでゐるたぐひ。みな何あらぬものゝ血氣よて。神佛そしるたぐひなり。我慢づ
 よきもの。たとひやむとき藥のまむとも。過ごしぬべけれども。こゝろよたづねたらん
 よ。人だよみづのまゝほしくやあらんかし。沖こき行く船のうちよて。波かぜのまざ
 とひよあへば。もとよりさるもありぬべし。いまこのたゞみのうへよて。いかでさあり
 とも。それのなごてなどいひ給らんが。さもなきものぞかし。そのうへいさしよのさらな
 り。色よまよひ。香ようつる心ありて。いかで迷ひじといひなん。昔人の心をなむなり

けれど。かぶとさるよももとりのうちよ信を佛などいれて。いくさよもいでけり。
 あるの奉納寄附などし。敵よかちほいとけんを願ふ輩もおほかりき。もとよりよき事
 よあらぬ。いふよも及ばず。士卒の心をとるよのまたあるべきことなり。いま女よて
 も大かたよ神佛の心をそしり。なよくれと高きこといふ輩ぞありける。かれらいきまよ
 のみちのさらなり。色かよ迷ふのみか。聊のものよも心とられぬるものが。高きことい
 ふの皆心よとの。とぢぬべし。されば佛の道よまよはずといふ。よき事なれど。素直な
 る心うせたるなれば。むかし人のをかしまでよ。佛よこび僧よへつらふよりの。をとれ
 りともいふべからんかし。かうやうの事よよくまが心よとひて。のちよいふべし。神佛よ
 祈りて。やまひをさらんとし。得がたき位を得。職を得んとし。いさゝかもほりすること
 とげんとする心。迷ひなり。されどもその迷ひよ淺きと深きとありて。又かのづからま
 ことの道をうべきとしともなるべきことよもあるべけれど。しひてまたふかくとがむ
 べきよもあらじ。生をもとめ。死をよくむよりして。もろくのしひてほりすることある
 がうち。このまよひ實じちよとげしといひがたかるべけれど。まづ餘りよ高きことな
 どいふ。心よとがまよでもあらず。まがほどをもしりてつゝしむべしとか。いひじとぞ

なすの與市の弓の上手よてもあるべけれど。馬を海よのりいれて。風ようごきてきたまらぬ扇を射んといふ。いとかたきことなり。射せんじなば。死ぬべしといふも。さもあるべき心なるべし。たゞ扇よのみ心ありてをなしたりとて。かならむあたるべしともいひがたかるべし。さるよ心よたちかへりて。神よ祈念したるよて。心うちよとままりて。外へとせず。つひよ思ふ矢つぼたがらざりし。まが心のまことへかへりて。神明良能の妙のいでしなりといひしが。さあらんこともありぬべし。

あるひとの庭みしが。松の枝をため。をすかし。一草一木みをつくりたてけり。まして石などいさまぐの色々あるをならべけ。大なるも小なるも。たゞすまひをかしくしなしたるを。翁ことよほめよけり。かへりて後よ。翁のつねこのみ給ふ。草の階前よりたちのび。松もひばらもおのがまよなしかき給ふかとおもへば。けふの庭をばことよほめ給ふ。いかよとよふ。何もさせることとりなし。世の人わがこのむところよあふものをば。ほめのよしり。心よあぬものをば。譏りなどすれど。ことわり盡くして思ふよあらむ。茶たつることこのむもの。碁などかこむものをみてをしき月日をむなしくし給ふ。水野狐の名をよまれ給へりやなどいへど。茶たつるも一時の心やりよて。よきあしき

いふべき品もなし。いでこの庭といへば。室町の北の庭の残れるをみてもあるべし。野山のけしきをすもまたかりよつくりなせしなり。じちよさまぐの石などおもしろかれとなしたる。おもしろからぬやうもなし。翁が庭といへば。おのがまよなまよて。古の庭などのことよもたがへば。心高きわけもなし。紅葉のいろよきとて賞しぬれど。夜よして翁などさまほしとい思はざるなり。わが心よたがへば。おもしろ。みなことわりしらぬものよまることよ

ある人のいふ。われは劍難の相ありといふものあり。いかよして劍難をのがれ侍らん。翁のいふものよふの劍なんの相ある。いとたのもしきことなり。たゞ忠孝仁義の道よたがらざるのみ。楠正成も劍難なり。熊坂長範も同じ相なるべし。正成みかどのめしよ應ぜむよげかくれなば。劍難よも遁れなん。されどたれか賢人忠臣の名をもて賞すべき。觀相いつたなきまざり。聖人の中道いつこよかざるべき。いつこの道かまさりなん。兵の今日よありとて。正心より治國のことなど經書をかきぬきして。わが物がほよとくぞをかきし。鈴録のさながら今世よある流のたぐひならむ。火術も自得流のひらけざる。ことおほけれど。その比。人よ先だちてかく思ひそめし。殊勝なり。かゝるさへあるを

ととげまは。又藍より色よき例もあり。とよかく志をこげますべきことなりかし
 あるひとのかしこきをあげて。政を任むるほかよ。國をよさむる道なきと。こともなげ
 よいふをきつて。いかよさしいひ給ふぞ。わが國のみかどおほきの中よも。延喜のみかど
 をこそ。聖の代といまよもいへど。すがらのおほちぎの事なんども。まこゆるぞかし。そ
 たち餘りの代をつみしがうちのからくよのみかどのおほきが中よも。かゝる人をいか
 で用ひたまひざりけん。この人を用ひ給ひし故よ。つひよかゝる事出来よけりなといふ
 こともたえぬぞかし。堯舜三代の初よ。もとより聞えねども。それも後のよの如くく
 しくあるしつたふよみあらば。またのちくのさたもありぬべし。そやそれよも蘇とか
 いふ人を用ひて。その職よかならざりしことも。管蔡の君のわざひせられて。ひぢりの
 志ばしぬれぎぬき給ひしこともありしぞかし。さるよ君のたゞかしこき人を用ひて。任
 ぜよとこともなげよいひ給ふ。聖よもまさりぬると思ひ給ふか。事のあとよりみるご
 とくならば。人をするのかたまなどよいひ置き給ひし
 ことわりなきがこととりのまことなり。ことわりのごとおこなはるゝ物ならば。何のか
 たきこともあらじを。さもあらで。人とあらそひ。政をそしりなどして。たかぶるものこ

とわりのまことをあらぬとやいふらん

大なる松杉の。さゝやかなる岡よのひ出でせ。とらなべ何をあらんなど思ふことよ
 り。をさなきものよいふこと。なまを打ちさつて。おどろき感すれど。みな人なみの事よ
 て。羊たけしものよもとよりするかよまされど。さあるべき事と思へば。感すべき事をも
 感ぜむなん。ざえある人の佛の道など信むる。佛の道の聖の道より高きよもあらせ。明
 らかなるよもあらねど。佛たちのよくのかゝることありけりと思ふより。おどろき感む
 るもあるべし。かの不動智とやらんを。よよなき高きことよいへど。いつか寂然不動天下
 の故よ通むるてふこと。ひぢりのふみよもあるを味のむや。すべてあなどる心よりまざ
 るひをうくると志るべし。古の英明のみかどをまじめ。すぐれたる人ら。女あらべよたぶ
 らかされて。のちよの制むる事も力及ばで。みだるゝそしをまりつゝ。打ちもたし居し人
 もありけり。これもかのいかであらんとあなどるが故よ。いつかかかゝるなるとや

諫め明らかなるところよりいる。議にくらき所よりいる。たゞ代々のみかどのほりする
 ところの心のまゝならぬもの。まかみとまか名の二つなり。その二つをそこねんとき
 けだ。いとおそろしく思ふべらなり。かのそのくらきところよりいれだ。つひよ賢もうた

がこれなどするとかや

天が下の御事などを。さまぐくころよかけ。心くたくさまよかたるものありけり。君の
つまよ子よもち給ふが。をりくつまの君と争ひ。その子もかたみよかきよせめぐよ。君
もあまねき心よのあらむや。子を見給ふよも深き浅きのかりある。よそよりみてだ
よ何くれといふとぞ。さくやかなる家のうちもをさまらむ。けふの煙も立てえぬとなん
さくぬ。みづからを思ひ給ふの浅きよや。打ちまかせていそぎ。いづこをみる心もみな深
かくらすや。よくことよのいだし給ふ。かの憂國の心あるべし。憂國の語あるべからむと
もさけり。ことよいだし心の深きよのあらじとか

まがまことよりつらぬさいつれぬ。みざる事もみえ。まかざる事もまこゆめりといふ。
いと至りしことよて。それをばかのくじの君もむそぢよて。耳順ふともたまへりしぞ
かし。さるよまが輩の色よそみ。香よめづる心のさらなり。いさくおもなりする心あれば。
誠をおふよぞ。そのさかひよ至るとなき。予ある道を得て。かの妙なるおく意得しもの
に。予よのまことのことしをもうべし。予よ得しとて。それをもて馬よのるべしと思ふべけ
んや。みなみちしらぬよりたやすからぬことを。たやすきやうよいふかといひま

ひぢりのたのしむてふこと。あめつちの心を。あめつちの心。つねよ春なれば。いつ
ものどけからぬ事なし。くるしきをたのしむよのあらむ。くるしきにくるしく。うれしき
のうれしきよ外なけれど。たゞ哀樂喜怒哀のよつも。みな樂の哀樂の怒よていん。秋の春
の蕭條。冬の春の閉藏なりといふよおなじこととなん思ふとなり

むかしのよろひと。いまのといいかでかくまでいたがひしよかたとふ人のありけり。こ
のまかちの代々のむかしのふりをよくころ得ぬれば。明らかなるを。さかせていくさ
といへば。文龜。天正のころの近きことのみきく覚え。むかしのことかいたるをば。かゝる
事ありしやなど。夢ものがたりのやうよ心得て。かのかひの國の何とかいふひとの志る
せるものと偽りいひしを。まことよして。いまのよろひのよきなど思ふたくひぞおほか
る。まづ古のいくさのひとりく道を見がき。名をよしみ。ほまれを後よつたへんこと
のみおもへば。みおやのことよりのいひいで。みづからの名をよびりて出づれば。かた
きのかたよりもおとらじと。おなじくなのりて出であふなり。さればかたみよものおと
もせむ。めのごひてこれを見る。そのうちあふなかよも。いでくまんと聲かけて。うちもの
をてよよりくれば。力かひなくして。かならむうちかたからんと思ひても。さいふときよ

くまでの名をけがまよぞ。いのちまつる道は二つになしと思ひさめて。おのれも打ちものまでくみあふなり。くみしかれてくびとらるゝまでも。しづまりかへりてみることなり。かたきよりくまんとしてうちものをてたるところをさらば。たゞをくさり得べけれど。名けがれては武夫のうちよたちがたく。ことよ曲らむつみせらるべし。されば遠矢は大将など射るも。い^世やなきことなれば。それが爲に聲かけてのちよ射ることなり。かゝればこそ代々ゆづり傳へてしよろひをもさ。いさゝかも後よ名を残さんと。心ごとよひきつころひ。これぞさいごのいくさとおもへば。身はおぬひたゝれまでこひ得てしと思ふ心のみなれば。よろひも今のごとくことぞげたることよせざりしなり。そのふりもやゝ衰へてより。馬を射て敵をうちとめんともし。あざむきたぶらかしてもかちてんとするより。おほくの人のとりこめて。うちしこともうしろよりひそかよ来りてうちとめしこともありしなり。ゆゑよむかしのよろひの弓手のかたと。前のかた計心こめてつくりしが。源平のころより。そや前もうしろもひまなけれど。つくりたてかぶとのそちもまへうしろおなじくつくりなせるをもて。その時よをみることもまでもなりよけり。それよりして南北朝の比より。いよゝみだれたるふりよなりてけり。室町の比よいたり

て。花着よりして高上のこととりをもくへ。かの相生相對などいふより。七星五行のかをなどよ引きかけて。事むづかしくいひもしたり。おなかのおしどもみなまづしきよ。つくりなまものもなく。ものゝぐかゝやかまぢからもなくて。京風の花着高上なるをあしざまよひひて。いくさとてもたゞ命まつるのみよて。かたいこともなきものを。さまぐぐのおどしげのよろひなどいとめゝしき事よとて。吹きかへしもひわりかへしとかいふよなし。なかよよろひもさす。しぶ深のそかりてふものなどかたよかけて。いづるをいとたかくいさぎよきことやうよ覺えて。まことのさむらひはかくよといふさまよなりよけり。それよりそのころの大将のよろひのいとしきまを。のちよみて大将とみうけられざるやうよ。雜人よひとしきをさ給ふものなりと。あまりなる事よまでいふことよのなりよけり。すべて世中のならひのくだりもて行ましことをば。これを見てもかれをみても。しるべしとこたへしとぞあるひとのとふ。朱學とやらんいひて。程朱のとける事をのみたふとびて用ひ給へど。程朱の説よかいてもうたがふべきこと少なからむ。たゞ學の聖のみちなり。古今よ通じて。聖の旨をもて折衷するよのまかじなど。牛のしりへよなり給ふや。翁の答へしよ。とひ給

ふむねの聞きたれど。程朱の大才絶倫だ。まだこのところ。いかゞなど疑ひ給ふ事あるよてしり給ふべし。かの國の大なるよ。人もおやく。そのうちよ秀でし人のかの國の人。かの國のもしをもてまねび得たるなれば。己が國の人の及ぶべきよあらざること。いしりぬべし。まいて宋。元。明。清の大儒たちみなその説を尊信したるを。この比書物よみていさゝかこのあたりの人よしられたるのみのきみが。その宋。元。明。清の大儒の上よたちて。それらの説をひらきてたゞちよ聖のむねを得んとい。いかよぞや。その秀でたる大儒のいひ給ひしことをさへ。あとよりみれば。うたがふべきこともあるならひなるを。君がほどなる書生の升よこかり。車よつむ計なるを。たがひよこれぞ聖のむねなるといふも。たれか一定すべき。さあらば甲の説をひそしり。東の論をば西よてやぶりて。かの升よこかり車よつむべきやから。さまゞの説をいひのゝしり。湯の沸くがごとく。蘇の亂れたるごとくよなりたらば。たれかこの學を維持すべき。それが故よみだれたる世のいまだをさまらざるうちよこや

御神のかゝる事をこからせ給ひければ。道春といふ人をあげ給ひて。代々の學のめあてあるしをたてよ置き給ひよければ。藤樹。菴山。伊物の徒出でたれども。おほやけの學の道々のかゝる事をし。もしひとの心のまよゝかのがさまゞ論説を經文よかへなば。代々の

大君の御説々よりして。諸侯大夫をこじめ。おもひよることいひたらば。何をもて後のよを救ひなん。かゝることだよいまださとり給ぬ人が。おのがちからをもてからで。何くれといふいかなる心よかあらんといひさして。ためいさしてあたりしとぞいづかたよ火ありとさゞても。ありあふ調度なんど繩よゆひつけて。井のうちへいれつ。水よいれがたきもの。袋やうのものへうちいれて。かたならさらをおきぬ。火のかく遠きをいかにさし給ふといへば。やけゆかば遠きも近くなりぬべしといふ。風よければこなたへきたらじといへば。風かたりなばさのあらじといふ。人みなしらひぬ。ある日いと遠かたのなりしが。風とみよ吹きいでよ。またゞうちよやけひろごり。かのをのこのあたりもやけうせぬ。火志づまりて近きあたりのものら。ものくそんとしてもうつものなしとなげよ。かのをのこあたりがよよて。かしてまゐらせんとて。かのなを引きたぐれば。とさみよ。くしよなどいふもの引きあげつ。また袋のうちより。うつものなと出だしつ。つねゞ人よしらひれをば。いかにかゝるとさなまれしつべきといひし

を。げよもといひし人もありしとぞ

小松の内府が平氏のおとろへ行くをみんなよりいとして。そやくこの世さりてんとねがひ
しとかいたれど。もとよりさせる事あらじかし。もしありしとみて。うき心とや
いふべからん。猶ながらへて平氏のならんてをも見。力の及ぶたけ。あやまちをまく
ひて。いさめとめつべきを。そやく此世さらんと思ひし。げよ薄き心なるべし。例の浮
屠氏のおとよりいひたることなるべしと。人のいひし

肉腐らるる膏藥をとり。血をとる針をさまよ。藥のつきたるあたりをみれば。血色かこり
て。げよ一寸むかりもくされぬといふがうちよ。肉つきて臓腑よくされいりぬ。また絡
へさし入れたる針をぬけば。いとまぢのやうよ。血のこしり出で。とまらぬ。つひよ爪の
色もうせて。かちも青ぢめよけり。かくても心をいたぬ。たのしむものあらんや。また
れかかうやうのことをせん。人の身よとりても。腐腸伐性などいふともありしとぞ

藥のやまひよ應じて。その人の運よきをり。のみくだまよりこちよくおぼゆるもの
なり。運あしき時。其藥のめばあるたんよさなり。又いけのぼりなどして。病因の外を
るとよさなり出でくるなり。押して用ふれば。功をなすくまり。やまひよ應ぜ。そのひと

運よければ。たちまちそのさとりみゆ。運あしければ。其さとりみえぬ。かならぬをまむしよ
きやうよみゆる。病の沈みてよいかよまぢひをなさを。たゞその枝葉のうれひいゆ
るやうよみゆるなり。まぐひがたきよ至りて。人々かの藥應ぜざるよといふ。是もまたく
まりのみか

齒のかたきものありけり。石などかみくだくをなまれのごとと思ひよたり。ひとりのをの
こに生れてより。齒やいらかよて。かたきものかむことをえせず。さるよかの石くだくを
のこ。齒のひとつうごきてそれいたみければ。この一つの齒の爲よものくふこともこ
ろよからむとて。ものを打ちあて。その齒をぬきよけり。夫よりまたむかしへかへりぬ
とて。石などかみくだきければ。人もみなやめのしりたるが。一とせもたゞさるよかの
打ちあてし隣の齒。ことよそれいたみてぬけたれば。ひだりみぢりの隣の齒。又ぬけて。つ
ひよ半のちちてけり。のころとみるも。うごきゆるぎて。なきよ劣るさましてけり。かの生
れてよりやいらかなる齒のをのこ。今よかえらむ。齒一つもちちとて。また今よて
みづからおふを。そなきをのこ。とぞりしていからんもなきをとて。人もとらひよけり
かたいらよりいふこと。いとよくあたるものなり。かの人のおとろへ給ひしといへど。

かゝみ見てもさの思のぞ。かれの今かくすれど。のちよの悔いおもふべしなどいへど。あ
らざるものぞかし。私の心だはなくばかたそらよてみるとおなじかゝるべし

録歌大概。情の新を先よすといふことを。何くれといへど。このかの日々よあらたなる
といふ心をへよて。ながるゝ水のごとし。さればよきをあしく。あしきをよくなごひまた
がへいふり。めづらしきよて。新しきといひそじ。そなを雲と見。雪を花とみる。いくたび
いふともまごまごことよりいへば。いつも新らし。心してまごといふは新らしきといふも
のならむ

おのれ愚なれど。親よ孝し。君よ忠する事の志れり。さればべちよふみゝる事もあらむ。た
れかこのふたつの道をまござらんといふは。いとあらぬなり。かの曾子とやらんのかし
こき人も。うたるゝ杖よよて。おもさふけうとなりし事をまらざるたぐひもありけり。ま
して君をたすけ。國を治むるは。忠のいとおもきものなり。たゞよまたあしき事いさめ。よ
き事をまゝむるとして。そのいさむるよもさまぐの子ども。道もあるべし。そのよきのあ
しきのといふも。かうやうのあさくしき人。よきといふもかならむよきものかゝ。あし
きといふも

そなのさく比。雨のふり出でたるよ。風さへそひぬれば。かならむそなのとき雨風のうさ
添ふならひよて。人のよのよかれとなるゝことより見する事よこそ。さりとていつらさ
雨かな。うき風かなといふをまゝて。雨ふるとても五月雨のやうよのあらむ。そげしきと
て夕立のやうよのあらむ。かぜそふとしても。秋の末つがたの野分。またこのがらしのやう
よのあらぬものを。そなををしめば。ことさらよ雨もかぜもよよなきやうよ思ひ給ふか
といひき

むかしいくさするとして。たがひよ陣をかまへてゐしが。かたきのかたよて。大なるおとの
みつよつしてけり。されむあらせのあるよと。そなへをたてよまてども。何のけしきなし。
人を出だしてうかゞのせければ。おどなくかたきをつかひのものをとらへて来りぬ。た
づぬれどこたへむ。かぶとをとれば。そちのうちよせうそこあり。ふんおしきりてみれば。
かねて定め置きたるごとく。庭月の相圖せしが。いかゞしたりけん。火うつらでおちぬ。三
光の相圖したるが。一つのほしの火うつらざりしかば。二星とや思ひたがふらん。二星を
らば陣をらひてかへれとの定なれど。三光よてあるなれば。必らむ陣をらひてかへるま
じ。煙柳をもうたせてけるが。をりふしひとむらの雨くもよ入りてけり。されば音のみし

て姿のみえざれど。煙柳と心得て。山の左の谷あひより。うち出づべしとかいたりければ。大将もほゝゑみて。まゝしをきたるつゝものまさがし得て。かちよけり

戸ごとよとみ。家ごとよたるなどいふ。いかなる事よかあらんといふ。風俗質朴として。上下の制あるをいふ。おのゝその分をまもらせ。おどりよながれもてゆかば。みつぎものみな民よあたふとも。とみたることあらじかし

みとせよとせ。門より出づることもなく。夜もねてふみのみ見たりしが。つひよ病出来よけり。ふみみる。やまひのもとをれば。それのせむといへば。君の酒のみ過ぎて病出来し人を見て。酒やめ給ふかといひし

何よかへじと思ふみどり子のそひまゐるをみて。げよこの子の行末さえも秀でぬべし。ちぶさみされば。ひたすらよそひゆくゆり。心よさからふことあれば。ありあふものもて人をうつ。まがこのかしろの疵をみ給へ。この子のまさせるもてうちしあとなり。おやとても心よたがへば。かくするぞ心のまなほよある。年のほどより力もありて。この疵をいでかしまけりと。あとおしなで。ほめぬるを。愚なるものもとらひよけり。とらふ人よりいかにこき人なるが

神のまれなり。外よもとむべからむといひたるひとよ。そのかの綱の卦よ。陰もまたしかり。聖人いひざるなりとこととられし。いまだいたりふかゝらざりし。やといふが如くよこそ。いで神のまれなりとおもひ給ふならば。またよくおもひてみ給へ。まがごとく色よそみたる神ありや。酒このみてほどしらぬ神ありや。みるものよ奪われ。まぐごとく心とられ。人よ欺かれてもしらざる神ありや。たゞ神のひとなり。それの神なりといふ。いとやまかめれど。正しく直き神徳のくもることなく。てらさるることなきを得て。のちよこそ

攝津のくよ川あり。その川の末よ。かの酒つくる所ありて。その川水をくみてつくるが。あめが下よまぐれし酒といふなりけり。川の上よゑたといひて。けもの皮などつくるものがすみて。川のうちへ枕たて。なまがいをさらすことつねのことなり。あるとし。そのことをいひ出で。この酒の神よそなへ。佛よ奉るものなるを。皮ひたを川水よてつくらん。いかよぞや。ゑたなるものを。川の末へうつして給われとうたへしかば。つひよそのごとくなりよけり。そのとしよりいかよ酒つくれども。例のごとあらねば。いまのひをかよまたその皮ひたを水の末くみてやつくらんとすらむ

としぐえみじの國へ吹きながさるゝ船子ども。命またうしてかへりくるものもあることなり。かならを二三十人のりて出づるが。おほく死してかへるにふたりみたりも過ぎぬ。まづ高浪みていさもをけし。食乏きを見て心をいためなんどするやからぬ。おほくしよたゆるときこえぬ。よし人なき島へつぎてもさもしらぬ木のみとりくひ。しらぬ馬とらへて。そのかゝをこぎて。身よまとひ。肉をほして食したくぬふなんど。事よふれてもこゝろの極りなく。常度うしなぬものかならむことくよの人よあひても夜かれむ。つひよ命またうしてかへるとかや。されば一船のうちの英雄。かならむ生きのこりてかくあるなりけり

仙せんびとの傳へし藥とて。いと耳のさしくなるを持ちつたへたるありけり。耳うときものが。いまいひ給ふことなよぞと。二度みたびとひかへせば。ひともとらひていひもせぬさまなり。さこえぬまゝよ打ちもだしおれば。またとらふさま。さすかよみゆめり。餘のとづかしさよ。かの藥をこひうけてのみしかば。よのかよ耳いとさしくなりし。うれしきものから。餘りよよその事までもゝることなくさこえけり。よねかしぐをのがこのめしよ虫のとひ入りたるが。いんぐむづかり給んのおそろしさよ。ひそかよ

とり捨てけりと。いとひそかよいふも。そやきこゆ。しらぬさますれど。潔疾あれば。まけはいといとふ心ありて。としもとらねばまたかのをのこらがさゝやきして。よべ酒の過ぎ給ひつらんとおもひしが。おたしてみいれもし給ぬなり。いざかたみよけふおほくたうべ侍らん。うれしやなどいふもさこえぬ。よくさかざりなきものから。まゝしともしたいひがたし。まいてとなりのものがたりよ。まゝぐるしきこともおほく。こゝやかしこのことばより。鳥の聲。むしのね。遠近もらさむさこゆれば。かしかまじさいふ計なく。耳ほどうるさまものあらじと。うとかりしよをこひしものせしとかや

ある翁よ。かの人のいかなる人よかとへば。いとよき人なりと答ふ。かれといへば。よき人といふかならむかれをばあしきといはんを。撰びてたづねみるよ。よき人とこたふ。いなる事どとたづねしよ。人を見るよ。まづ十よして五つむのんも。よき事ある。いとよき人とみるべし。十よして一つ二つもよき事ある。よき人なり。十よして皆あしきをば。あしきと心得給へといひしとぞ。こゝ人をかくみるなり。それをみるの道ならむ。よきもあしきも。のろとと重きとのまのちもあらん。し

速慮。速謀せざるひと。とみのとぎひよあふこと。人のしれることなり。その速慮速

謀は似たるやうでも。殊更は物おぢし。例のことわりよくしたる心よりいでくれば。なほ人のものさらひとこそなりぬれ。かのものおぢして。何くれと心くだくもの。君がかたいらそふもの。もし心風やまば。いかゞし給らん。男をうなをも志ぞけて。くろがねのひつゝ入りても居給らんが。君もし心風やみ給らん。いかゞし給ふらんといひてけり。またあるものが。打ちがたなかたいらをさらせ。たちぬもの。しくして。いでかたき来たらばといそん計はかまへたる人。君いね給ふとき。よろひきてやふし給ふらんといひき。またそのたぐひの人が。よろひをかねあつくしてつくらせたるをみて。いゝもまたくそなりし御させながなり。をしきことよ。このめんほうの目のおなも。ふたぎ給へ。矢なんどのこゝへきたらんが。あやふくさふらふといひき。

よつの時のうつり行くけしきこそ。またなくおかしきを。さかざるをりの花をさるせんとし。ちるころよちらさじとかもふ。いとくるし。ちれば又こん年のさきぬべし。いゝよ心をくるむとも。霜まろく氷のたきをり。そちをの咲くべきこととりなし。されど咲をまち。ちるををしむ道なり。ちるをもよよして。心とせぬのみちあらぬ心なるべし。

観相の人のいふ。ふるさやまひまたのどぎのひ。いと氣のまづみてみえざるものなり。かの感冒なんどいひて。疾厄官は暗氣のあらはる。いとあさき事なり。あしきとてもいちじるくみゆる。あさきかなり。これをもてみればみえざるをつゝしむが外は道のあらじと

いやしきものなりけるが。つねくふべきよねをもく。ひきぎてこがねよかへて。命もかへじと袋いれてもちわたる。秋の末つらた。よその水出でよければ。かの袋をくびよかけて。高きところへゆるんとする。そや水かさ高くて。行くべきやうなれば。せんかたなく。水よちのぼりてけるか。ことの外ようへよのぞみけり。さるよよねいさゝるつとよしおふて。水およぐものをみて。かのふくろのこがねをみせてこれをみなまぬらせん。そのおふところのよねをいさゝるだけ給れといへば。いとありて。よきさをのこのいひざまかな。かゝるときこがねもちて。何よるせんといひまて。およぎ行きしとなり

大名といふ人たちつどひ。ものがたりし給ひける時。ひとりの君のいひ給ふ。手よくかく人あらば。一二百石の地あたへ給ふか。弓馬のみちまれなる計得てし人あらば。千石計の

地あたへ給ふか。さへも秀で。文の道よりものゝふの道。皆至れるといひ。一萬石の地を
 あたへ給ひんかといへば。むろしひきなんいふこともありけらし。今のいづこよてもさ
 をべしといひおえむとこたへ給ふ。さらばこのまとのうちの君たち。文の道人よりす
 れ給ふもありや。ものゝふの道もありやと思へど。人なみよたし給へど。秀でしこと
 ひき侍らむ。いゝやあらんといへば。いゝよも秀でしなどいふと。一ふしもなしとこ
 たへ給ふ。初のものよりすぐれしものとても。一二百石の地だ。あたへるねたるが。二が輩
 のあるは十萬石。廿萬石の地を給ふ。いゝなることと思ひ給ふか。たゞよみおやのいさ
 をと。大君のゆたけく大なる御惠なり。しかるよ生れしより。かくたふときものとのみ思
 ひて。なほいやまし位つゝさも人よこえんとし。大路ありく行装も。二が格よりも高く。
 二が家の定よりもみやびのよと。市のまらべのめなんことをやりするのみよて。うち
 よのへりみる心のなき。いとうたてしといひ給ひしとかや

雲の上のやんどなき君おのしましけり。その御子の御のたのらよまし。くけるが。そ
 ともより風の吹き。て。もしびの光定まらざりければ。人召して風の吹きくるぞ。とも
 しびもさえなん。さうじたてよといひ給ひければ。父君ことよいり給ひて。さやうなる

御子

ことばづらひして。うたひいのでよむべきとて。むづかり給へば。御子のいとおそれ
 てしぞき給へり。御次は居たるもの。いゝしたる御教ぞと思ひて。御色うのひてとひ
 奉りければ。ものをつくしていふべきものよあらむと。のたまひしとぞ

武氏のをり。秋仁潔などのつゝへさま。いゝあらざれば。唐室保ちがたきをしりてこそ
 ありけれ。されども。し其中興せざらば。おもねりへつらひし人とのみいれなんといふ
 ものよ。呂尚がつりたれて。のの奇造なくば。釣たれし翁とよべれん。たゞその時よあひ
 て。いゝなまなり。いゝらばのちよ何といひて。二がさえをもしられんと。その人たちの
 と思ふべき。これらの凡智もて不凡の人の心を論むるなりといひま

酒過ぐれば。彌のまほしく。行ひゆるめば。彌みだる。二がひのぞめば。みづのらうな
 がすものとのや聞まし

補藥とても。草根。木皮もて天受ののけたる。さらなり。うちのやぶれしをも。いゝで補ふ
 べき。補ふといへば。造作のをりまる様よ思ふぞとろき。先この人の。このあめつちの氣を
 もていくるなり。さればいづるいゝよ。ふる氣をそけむ。毛皮よりもその氣を出だすな
 り。又氣を吸ふとき。そのごとくいるなり。その出でいる氣のいさゝか滞ることなけれ

ふ。たまひてふものゝなごことなり。さるゝその氣滯れむ。ねちをもつ。ねちあればものを
 むのりすなり。其氣のもるゝをふたぎ。ふたがるをひらき。滯るをながし。むのりすをうる
 ほすも。みな打ちまゐせていへば。氣の滯らぬやうなすより外なし。その滯ることお
 ほければ。其害もおほく。滯ること久しければ。その害も深し。其急なるゝまづ其處を打
 ち。末をそゝぎて源に及ぶもあり。車の輪のめぐらざるも。さまざまにてゐれば油さし。
 油過ぐればかゝかして。たゞそのめぐれとのみの心もて輪をすりまゐるなり。おぎなふ
 くすりとて。いかてべちよものをもてきてすりすべけん。たゞ氣血をもとのごとせん
 となりけり

聖賢の道まねびて。もろこしのふみなどこのむものが。ふと禪家の法語などみて。つひに
 それよふけるものありけり。あるひとのいまめづらしく信じたまふ。道體性理のこと
 よつくしたるよの心もとめむ。日のあかきをつねとして。ともしびの力をたふとむたぐ
 ひなり。それもまことかの良智にて。ひぢりのふみ見れば。心よかゝりてこづかしさの
 おきところなければ。かの法語などみて心をおのれとなだむるなりといひしをかし
 相州の日金の峯といふ。いと高き山にて。十州をみるといふ。あるひとのやらんとする

よべ。かみなりをためきて。雨の水をまごどくなりしが。夜明くるころの。さる計をれ
 て。霧もなく。霞もなし。西のみねののりたれば。七つの島々も手よとる計みえて。八丈
 の島のあなたもかゝみもててらしなば。かの人なき島とかいふをも。みつべくおがえし
 を。そのものこの峯よ立ちあて。こゝに家たてたらば。西のえみじの船々いまハ丈よ采
 りけりと。こともなくみゆめり。さるをこゝの岸よ早船ならべて。こゝやかしこよあらせ
 んといひるよぞやといふ。あゝる晴れし日の一とせよまれなるを。その日はかなならむを
 みじの船きたるべしやといひまわしけれど。まれたる事いひてあらそいんと。ねんじ
 ておしとかたりき

道路の足底のひろさだよあらばあゆむべしといふ。例のことよりのみなり。いゝであ
 ゆむべからん。深のうへをあゆまばおちぬべし。こゝの陳氏のいひたる餘地なきなり。
 あまりよことよ甚しく。物よせちなれば。おこなわれぬのみ。うとまれぬべし。この事物
 よたいして。餘地なきなりとさゝぬ
 めしひしものゝ。人のいひがたき事をもいふ。いらもみえむ。けしきよもあらねばいふ
 なりけり。くらき人の目があしきもみえねば。よきと心得て人よちぢる。めしひしひ

とのたぐひなり。されば。古よりおもてよるさするなどいふめり
あるやんどとなき人。旅の道の早くいねて。つかれをだよすめなげ。下がしもまでもう
きとのあらじ。さらばそやくやどりを立ち出で。そやくやどりよつくよしかを。これぞ
下をめぐむの道なれば。よろこびぬべしといひける。まづその君。早くやどりよつきて。あ
うしおろし。ともし出だしてひるの半ごろよりいぬれど。下のものゝまが心のまゝなら
む。人のねる比ならで。いねがたし。殊よひるのうちのさわがしく道行く人もたえぬを。
世のひとよ背きてよるなりけりともいひがたく。いねんとまるところ。その君のそよ起ま
出で。夜半よともそろへてたつめり。下をあらねむ心のあれど。上の心もて下をみるよ
り。かくいたがふなり。めぐむ心ありて。下の事あらねば。かくぞ有りける
ふたりつれだちて相みる人よあひて。君の仰よよて。こたびたびだつ事あり。いかよ侍ら
んみ給へといひしよ。相^者ぎ見終りてふたりともかならず旅よて難あらん。つゝしみ給へ
といひぬ。ひとりいそぎの御事なれど。たびの道よて難あらば。おのづから君の仰も滞
るべし。おそくとも難なきよまかじとて。ともし^消びけつ比やどを出で。日のくるころよ
いやどりをとる。ひとりとのゝ御つかひなり。つゝしむとの君命をつゝしむよまかじ。

この身いたとひ難よあふともいかにせんとして。星をいたまきてやどりをいで。ともし
とりてやどをとる。さればことよそやく思ふかたよつきてければ。君よりも賞を得たり。
ひとりのかたにおそしとして。罪よあひよけり。されば相のともあれ。まがまべきところを
つとむれば。難なきものよといひてけり

満面紅潤の人あり。ひとりの相ぎ見て。君のかならず祿を得。名を得。壽を得たまむ。あ
ゝそのさ^幸ちまことよいふべからむといひてけり。ひとりの相者の君かならず近きうち
よとみのやまひよかゝりて。死よ給はんといひければ。そのひとそらたち。そで拂ひてあ
へりしが。やどもなくやまひ得てとみよ死よてけり。いひあてしものよいゝとしてかく
いひ給ひしとよひければ。かの人満面紅潤かゝることあるべきものならず。いとまき
いとひあれ。かならず散財あるがごとく。左のかたよければ。右りのかたあしき。天地
のつねなり。さるよかくあしきところなきかならずをそのうらよ變むるものなり。一天
雲なれば。三日のうちよ雨ふるといへば。相書よあることよあらねど。かゝる吉のう
らぬ凶よかゝるべしとなんかもひしなりと。かたりしとぞ
つくしよ敵國降伏の願。延喜のみかどの勅願よて。またしく御筆をそめられしといふ。

敵國の外國をさしての事とかや。むくりのおそひ来りしことだよありしためしをだよ
 志らざる輩もありぬべし。たゞは外國のありとだよ。心よとめざる計よみゆるやうよも
 なりゆくべくや。豊臣氏のこなたのたゞかひよなれたるつともものをえらびて。朝せんの
 ひさしくたゞのひの事も志らぬ。おこたりすさびたるくらきよの君と臣とをうちやぶ
 りしより。外國のまべて智もなく。力もなきものよとおもふたぐひぞ。いとうたてき。武の
 平氏の末のうたよみなどし。もたらみやびよながれたる一族なりとて。よあきものよや
 うよ人のいへども。さまがよよくのれがごとくありしとおがゆ。朝せんのたゞのひの
 をり。のの國のたちまちやぶれし。よあきと計のいひがたし。いので智もなく。力もなき
 とはいそん。つひよせめのねてあきたる。智もなく力もなしとかへしてやいふべきと
 いひしも。もとり過ぎたるよやあらん。いづれ外國のありとだよ志らざるむかりよな
 り行きて。よその國のえうなきもてあそびのものよみこのみあつめて。いつのこのまが
 そひのふるからん事を志らざる輩もあるならん。かへすくもおそれ思ふとか。かた
 りしとや

今こよよてのくろきをまむしといひ。かきのさねのごとなるを松むしといへど。もと
 かりんくとなくの。まつよて。ちんちろりとなくの鈴なるを。あやまりよけりともいふ。
 むしうるかたへ行きて松のを得んとおもひ。鈴のかたをといふなり。ひとりくよこ
 のあやまりなり。くろきかたの松むしなりと教ふとも。皆それとたがへ。うるものもせ
 ん方なかるべし。行燈をちやうちんといこまやしくても。いかゞせん。是もあやまりよ
 ならひてこそ。世は行ゆるれ

もの志りがやなるもの。みたりよたり圓るせしが。かつみのこもをいふ。花がつみとこの
 ものをなをいふと。能因法師のさいひ給へればといふを。能因さいひしとて。あかさや
 かなる花を。花の字のうむらすべきよりどころあることをいそね。能因がとてうけが
 ふべきよや。古よりさまぐ説々ある。河やしろよてもあれ。もすのくさぐさ。いそとが
 しい。ゆめの鹿。とふひののよみなど。みな信をべしといそじ。あさのの沼よ。よひら
 の花のあやめあり。それを花がつみといふべし。さればつともものよよろひてふものよ
 かと用ふるところよ。あつてふことよのよとしてつくるを。今のしやうぶかといへ
 ど。中のあたりたけたかくして。花のかたちつけたり。さればうたがふべくもあらぬを
 いふを。またかたをらより。もとすくさをかたばみといひ。よひらある田宇草を花のたむ

みといひしとみゆ。このくがと水とのまのちあれど。古のいまのやうにこまやうに
 とせ。志のぶの軒に生ふるこけよて。そのうちよのの金星草もありぬべし。中比よりい
 ふ志のぶもあるべし。ひとつよして。是を志のぶと打ちまのせていひしごとく。つひよ田
 守草をかたむみと計もいひしなり。されば枕草紙よりへのきぬのかたむみあやの。もん
 よもかたむみとあり。かたむみといひかつみなりけり。雜要抄の畫よ。四ひらある花のかた
 ちせし手箱のうへのたよ。花かたむみとあるせれば。つひよ轉略してをなつみとい
 いひしなりといふ。はじめより何ともいそざりし人が。むかし人のかつよみながら。あら
 ぬなりけりとよみたる事もあれど。いまいづれともまけがたかるべし。いまのことく
 きよての。よひらあるのををかたむみといふ。をかきさやうよ。それのおも入れど。ひ
 とをもそれよせんとする。いとくるしきまをめぐり。よしこの一くさあやまりしとて
 も。させるともあらじを。まひてちのらをいれ給ふ。せんなきとよといひてけり
 とりもちをもて。そへといふ虫をおわくとりたるを。ふとけみさやうとて。目もおよばぬ
 ものをみるめがねのあれど。それもてみしよ。そのもちよつきたるそへが。よげんとして
 羽を動かすが。そへその羽ももちよつきて。動かさむ。かうべうごかして苦しむもあり。

願微就

又久しくつきし。飢よのぞみて。よあり死するけしきもあり。たゞよ羽をならを音のみ
 きししが。よくみれば。いとかなしきさまなりしとかたるを。さあらんよなど人のこたへ
 しを。みしときしといひと違ふものぞかし。みしごとくさ給ふ。さあらんなど計
 といひ給ふ。まいて目の及ばぬあたりのこと。猶心よてみ給へかしといひしものあ
 りけり

あるくすしありけり。やむものあれど。かみ志もえらませ。いとせちよ心をつくしけり。い
 といたりいやしきものやめる有りけり。薬をこいだいて薬調むるよ。その母なりける老
 婆の。つくぐとみてあしが。あざり出でよ。かりなるとながら。ねぎ思ふこそ侍れ
 として。いといひかねたるを。何のよてもあれ。思ふことか打ちあらそしていひねといへ
 ば。つよましげよ聲ふるとして。下よくみ置き給ふよこの御くまりも給これかしといひ
 けるよぞ。おもとむをよ。あみて。さらばあたへんとて。下よありしがうちのさかりなき薬
 ふたつみつとりいでよ。調せしが。かならむその薬の志あるしあるべしとかたりぬ。かくお
 ろかなるものよ。このやまひよ何といふ方調むることなり。それ何々のくまりを
 用ふ。このそこの上のかたよものづからいれ置きたれば。とり出だして調せしなり。下よ

くみたる箱のとして。たときいやくしきのへだてななしと。まめだちていふとも。いかでまよ
まぐべき。さわりなくば其心よまかするよてこそ。をかしかりけれ
ものを引きのばいて。時うしなふものありけり。人のさなへこふるころ。たねなどこして
けり。葉月のころとせの穂の出でたるよ。嵐ふきてければ。花ちりぬとなげくを。あまりよ
ものいそぎし給へばこそあれ。まがいねこの比うまよしかば。あらしのまぎのひよも
あひ侍らすと人よたかぶりけり。人のかりをさむるころ。少し計穂のみえたるが。そや霜
のおきてければ。みなかれぬ。ことしといと早う霜のおきしなりとて。年をのみつみして。
いまださとらざりしとなり

君も門の外へ出でよみ給へ。あまりよこのひざいるよよてたりぬとて。よそもあらで。そ
の日くをたのしび給ふが。またいかむかりおどろき給ふともありぬべし。このごろま
よしよも。君がやよしのびいらんとよや。つるぎもたるをのこや。門ちかくよりきたれ
ど。例のうちよあらで。やまらかよたのしび給ひたり。もとよりその夜のいかまたり
けん。うかまひしのみよてかへりしとや。月なき夜半なんどよのかならむ来るべしと。い
ふものもありといへば。いかでさやうなるとのあらん。君のたゞ速きこといふが。なかよ

も人のおもひよらぬをいひだいて。人おどろかき事をこのみ給ふ。ひとのおどろく
とも。いかでおどろかされんなどいひて。あざとらひぬ。かれのかならむまぎのひよあひ
なん。おもへよるべきとも思ぬぬ人なりといひま

むまめの十あまり六つ七つよなりたるを。月花よもかへじと思ひたるよ。としごろかふ
猫の。むすめがかりやへゆけば。かならむあつよりつきて行く。いかよせいすれどもさか
を。つなぎおくよかりやへ行くときや。かならむあつりてたけうなりて。なこくひきりてこ
せてゆく。いかよとたづぬれば。かこやのうちよつとつきそひて居侍るといふ。いかよも
心のそこまりがたしとて。おやなりけるもの。つるぎもちひてかぬこのかこやへとせ
行くとき。かうべをまじりたれば。そのかうべかこやのうちよいりぬ。彌あやしみおどろき
てみれば。そのかうべかこやのうちなるくちをよよくひつきて。くちなをく死してけり。
さらばそのむすめよくちなその思ひいりたるをまじりて。かくありけりと。なみだおと
さぬのなかりしとなり。冤牛とかいふ事。かの國のふみよもありとなり。猫のうらみい
かよといへば。もとよりものいふ事ならぬみなれば。それよりうらみもなし。かのくちなを
をころして。君の難をまぐひぬれば。たゞよいとげしなり。もとより功名よ心なければ。

おもひおくとも何らじかし。たゞかひおけるあるじの心いかにありけん
狐のよな／＼くるを。かならむ餌與ふる者ありけり。かれはけもの／＼うちよて。さえある
ものなれば。かくしなばかれも恵をまりて。むくゆるともありなんとて。日ごとく息らむ
あたふれば。かれもなれよなれてけり。ある日うま子生れてければ。いととしげさよ。二日
むかり餌あたふるを日すれよければ。さつねうらみいかりてや。そのうま子をくひて
けりとぞ

やんどとなき人ありけり。茶たつる事をこのみて。かの宗易が流をくみて。かれがもたる
うつらなどおほくとりあつめ。宗佐よりいまの代々のつくらせたる什器やうのものま
でも。かくるとなくそなへしなど。みづからおひ給ひてけり。ある時。宗易が像をかべよ
かけて。かくたふとびぬる。それよまさるものやあらんなど。かたはらのものよもあさ
／＼しくいひて。茶ひきて居給ひしが。かの像より煙のごと。さりのたつやうよみえしが。
宗易来りて。それをもとよりいやしきものなるが。物よか／＼らむ。心たかき氣象ありけ
れば。大閤のとり用ひ給ひてけり。茶たつる事。一時の心やりよて。なしてもありなん。
なきでもあるべきものなれど。そのころいともてあそび艸となりて。さま／＼心よまか

せ。つひよの法もなく。禮もなく。みだれもてゆくべしと思へば。さややかなる道ながら。
式をたて法を定めて。人よもをしへものしたるを。いまいいとおもき事のやうよ心得て。
その道あらぬもの。其室よいれば。か不あかめて一言も出だし得ざるやうよ。人の心よそ
みたりしも。いと愚なること悲しび思ふ。さるよ君の人よもかまへられ給ふ身よて。
わがごときものをたふとび。このみちのよかなきをもしらで。いとおもきこと心得給ふ
心のひさくつたなき。われもいといやしき思へど。さまが流れくみ給ふえよしもあれ
ば。かたりぬ。君いま心たかうて。其身のやどよまたがひ。なまべきことをつとめ給ふ。ま
みが手ならしつるうつらものよとて。千とせの後もつたへものまべし。これを日れより
古をなすといふなり。いやしきそれらのもたるうつらものなどよ。おやくの財を盡くし
て買ひもとむるのよかなきよて。このさややかなる道とても。心よいかで得給ふべ
きと。そたとよらむと思へば。ねぶりもさめよけりとぞ。げよかのしき島の道とても。それ
をもて家くよをさむべきもの。やうよいへど。定家卿が答の下ようづもれぬ名をのこ
まとも。そかなの道やまき島の歌よみ給へれば。いくたの和歌寄むもの。うちよも。定
家卿のよくみ給はんもありぬべし。さかの道。くじの道まねぶものもいかにあらんと。人

のいひし

和歌の。只をなすなれとても。餘りも力もなく。味もなく。止水のごとくなれば。思ひをのぶることゝもえむ。まいてあらべのさたよも及んをなん。かの三國の比に餘りも力いれていひ給へば。あらべの少しいやしきを。たゞ歌の古今集よるべしといへども。目も及びがたければ。草庵などの集よよりて。よみ習ふ事となりて。たゞをなす正しかれと思ふより。百首一體のいたり。力もなく味もなく。まがものよもあらぬふりといなるべきなり。歌のまがものとなりてののちよ。あらべのさたよも及ぶべし。まづ今の勢ひよていとゞ玉葉。風雅なんどよよりて。力をまゝむべし。まがものとなりしうへよ。あらべの高く直なるふりをまなば。つひよ千首よ一首のよき歌も出できなんと思ふなりと。かたりし。もとより過ぎたるよやあらん。されども古今集のいとたくみなる歌もおなかれど。一つまことより出でたれば。たくみといみえむなん。そじめよりかうやうよせんとして。まがこえてまねび得ざるものとかや。何よまれ。そなきへ實さへかをりさへ。そじめより得んとしていかに得べき

禪意を得たりといふものあり。いかよして得給ひしとへば。まがこの身の。あめつちの

ものよて。われといふものいなし。まがなければ。かたきもなし。これをかの浩然の氣ともいひ置き給ひしなりと。高く心得て。いひてけり。いかよしてその所を得給ひしかといへば。思ひくつひよ得しなりといふ。まゝたる人いとまらひて。さまぐひぢりもときおかれけれど。かゝるところ得てしひとい。いまの世よあるべしともおもえぬ計まれなるを。いまだ其事々もあり給へ。いかに得給ふべきといへば。そらだちて。あらざらん人のいかよいふとも。われこそ得しものを。などて君のしかいふ。まが得ざる事をまら給へ。いひのべたまへと。聲ふるのしていふよど。それみ給へ。いかりをいまだ捨て得て。この身を捨てしとの給ふか。ことよ色と酒とよふけり給ふとき。ぬ。それだよかち給へ。わが身よかち給へんとや。よしかり得しとても。わまるてふおとい。いとかたきとなめりかし。得しと思ふもの。いかに得ん。君のものよふなれば。弓射る事もていそん。よくひきてよくとなつが外よ。弓のみちいなし。かくすれば。よくあたるをまりても。さといできぬいかにぞや。かちまけあらふとき。人おろくあてぬるをりなんど。たゞそれよかたましく思ふぞかし。またそやくとなつ弓のやまひもあり。そなき得がたき病もあり。いづれも心の外なるものぞかし。またゆづるのゆるみて。まが耳をうてば。いとこ

りよこりて。またや耳うたんとおもふぞかし。耳をまつるおとも得せむ。おそくをちたやくとなつことだよ。心よまかせむ。人よまくるの口をしさをも。いまだきて得むして。いかでこの身をまされ給はん。とよかくいまの身よ行ふとつもらで。口のみたかくなり行きぬ。あるやんごとなき人ありけり。つるぎの道を得てしとて。みづからよならびなしとのみ。つねよいひ給ひてけり。ある日。書屋よ居給ふとき。末の間のまやうじをひらき。跳り出でたるをみれば。大なる男のあかたかよなりて。君をゆかけて。とびかゝるを。いで心得たりとて。刀ぬきてさらんとされば。跳り超え。あるふし。左へさけ。右へとしりなどして。いかよもうち得む。とやかくをるうち。をらくとをしりよりて。その刀をとりてければ。口をしさかざりなく。いかよせんとあせり給へば。かのをのこたよみよひれふしてけり。よくみ給へば。外衛の臣下なり。そのものよいふ。君つるぎの道よく心得給へども。いまだもぬけし位よもわたり給む。さるゆゑよみづからおふて得てしとのみ思ひ給ふ。まことよ得しもの。たれかよよと思ふべき。さる御心よてまします。いかなるあやまちかし給はん。臣つるぎの道さしてならひしよあらねど。死をさゆめてまれば。臣をだよ打ち給ふこともなりがたかりしぞかし。これをよく思ひ給はん。

御身のあやまちもあらじと。なみだこがいていひしかば。君もことよ感じ給ひて。よが無下よつたなかりし事を。さとり給ひしとぞ。よくこれらのとをきよ給ひて。さとりとやらの道の。やめ給へといひしとかや世のひとのせむきころから。まののちひの如く。時たがしぬ事よと思へど。かの餘慶餘殃のそらより下だし給ふとなんど。うきたるとよ思ふぞかし。かの年のみのりの豊けさうちつゞきぬれば。それよくるしみて。何くれといへど。とてかならむたのみ少なくなりゆくもとあなるをまるべきなり。されど時たがむ。めぐりくるものならねば。さにおもぬなり。ゆたかなるとしよ。あしき年の心もたむして。虫けらよも劣りつべし。冬ひそまるもの。そのたくをへをこそなせ。たあさとかよ今年豊なれば。とやあしき年のあらじと思ふこそよかなけれ。世の人みなよきあしきのもとなるようたがひなくば。かならむゆたかなる年とて。米のあふるることのあらじといへば。いかで人々をして。かくのなきべきといふ。さよまだそのころよあらぬ故なりと。田つくる翁のいひしをきよて。わがともがらかまかよその日をおくるを。いかでまたあしき年のそなへをまべからんといへば。さよあらむ。たふとき米とおもへば。ひごとよくるよも鳥けだもの

よあたふるも。またのかしぐよも。そのころのありけり。やせとおもへば。このうら
 となりて。打ちこがれぬるも。そのさもてさもすつべし。この心あめがしたみなおなじ
 ければ。一日のつひやまところいかむかりとおもひ給ふか。さるをこのゆたかなる。あ
 しきみのりのくるさきつさが^{先兆}とおもへば。この一むらよても。其心よて。一年よ米つむや
 どよもなりぬべし。米たかうなれば。ひとくつみおかまやしくおもふよど。米のいやし
 き年よりの。つめる米おやけれども。猶たらせとおもふなり。この心あめがしたみなさる
 やうよなれば。いと米のうごかむ。このむらぎとなんどのさらなり。米なき山ざとまで
 も。何よかへつとも。米つましと思ふぞ。値たかうなることありなり。この心を村里よて
 よく教へみちびきなば。聊その志るしもあるべけれど。まめたちていひけれど。牛のか
 たなよてといへるたぐひよやとさつれど。老いたるひとの^持ともどくべきよあらむと。
 きゝゐたりしとぞ

月なきよりのいとこのろのそこすみまさるものなりけり。海のおもてくらうして。よせ
 くる波の音ゆたかよして。いそべの松よも音せぬ風のそでよそよと吹きかふよ。ひるの
 あつきもとまれぬべし。秋のをほむしのねもさそひ行くよ。ちぐさの花の色もみえて。神

こく船よまがふ雁がねのよたるも。いつこなるらんと衰なるよ。浦のあしべよ聲あひせ
 たるもをかじ。まいてあかつき比よ月のいづれば。よひの入日の残れるたぐひよあら
 る。海のおもてこがねの波のみちくるよど。ことむよものぶべしと思ふぞ。むかしいぞ
 たなくて。在明の月ようとかりしころもありけりとおもへば。口をしきものから。またう
 らやましくもおもへり。それより愚のうつり行きて。實よいよしへあしき波よも舟う
 けて。かつをつりしこともありき。またいいと寒きころ。海よいりてあまびとりし事もあ
 りしが。いまのわかうどの。まださよ老いぬるさまするものぞおほき。そのころのむかし
 ものがたりよきけむ。うらよのたぐかひのおそろしさよ。つま子うちつれて。みやまへい
 りし世もありしときつるよ。月なき空よも心のたのしびをさめぬる。いかよどや。
 かゝるともかの日かうどの老いたるさまするをも。あはせていとまほしけれど。また例
 の老いばれて。くりごといふとやむつかりなん

人をせむる。あらなるをせむべしとかきし。まづ面あらためたらばよしとこそい
 じめ。かれのとらのかとさぬる羊なりといひて。羊よもせよ。虎のかときたらば。とらよ
 してこそやしなめ。さらば千里をばとしらむとも。羊の力のおよぶたけ。としりもま

なん。外をせめて。うちをせめざれと。むかしよりまゝしを

藝能ありしものも。むかしのおほく聞えたれど。今のさいふ計のものもまれなるよやあらん。すべてむかし人たがへりしや。今残れるよろひなどいふものをみても。鏝などみてもありぬべし。天王寺ある鶏婁のいとおもくて。今のよのひとかけがたしとかいふ。そのほかむかしものがたりをいまよしてみても。今のよのよろづおとりたる事の志りぬべし。さるは漢の張氏の治法とても。斟酌をべきとも思はむ。ことよ張氏の汗下の劑なんどい。いとこゝろをこめて。其非までも厚く示し置きしをも。疎そかよし。一つ病の治法をもて。萬づのやまひをいやさんとし。方の古今など口よいへど。わが心よやまひを牽きつけんとするも。ありぬべし

かへでのめの紅なるよ。かしのめの白さをみて。かならむ草木の葉のみどりなるものとのみいとしとにいとし。温泉をみて水のひややかなるのみよあらじといとし。さるよ何くれと。人の五のみちをそなへて生るゝとらさるなり。人よよくあしくも。うまれたるなど。さまざまうたがへるとなど。かこしといふひとさへもいふとかいといぶか

千里の駒をおくりしものあり。うけざりしかども。とそれがたかりしとかいひしを。よまこのやうにいへど。さういふで思ふかとうたがひしややうなるを。いかにかくにいふらん。かのくよのよしといふ人よも。うけがひがたき事もありとや。王導といへるものが。この良友よ背きしといひし。もつら私なり。よきさぶらひをもてつかひ給へば。その道をもてあたむくいしといふも。かの深谷のうぐひま。みやまの梅がよのおとりぬべしとか

雨いさゝかふりつゞくと思へば。とやみかき^{水量}とふところあり。されば常は船をうかべて。水かさそひゆけば。打ちのりてさくるとのみこゝろとす。あるとし絶えて。雨のふらざりければ。かねて水をおそるゝより。たかきところよ田つくりたるが。みなかれなるとも。水くみてそゝがんもちから及ばむ。とやせんかくやときとぐうちよ。かのつなぎおける船のまりくいふるとも打ちおすれぬ。せいのとかかりよけり。こしのくよもいまま雪いとすく。まなのゝ國の寒きもよよかゝらむとかや。この國のかむかり雨すくなきこと。八十の翁も知らずとかや。ふねもえうなきものなりなどいひてけり。つひよあけのとし。田をことごとく川づらちかきかたへうつしてければ。あくたなどのよりまし所をり

ければ。山田よりいと生ひたつさまもとなりとて。よろこびあへりしとぞ。つねよある
かなりとて。わらわのこ計。そるくぐりかたげて山田をつくるを。ゆびざしてと
らひけり。そのとしも川づらの田のよくみのりけり

ある日。あまの子などよびあつめて。むかしわがわかき時と。めかりしほやくともなれら
がやうよのなかりしぞかし。いままたとらのみあふぎつ。よくふる雨かな。かくての
いつかしほのやまなんとのみいふ。もとよりまほくむわぎよの。雨ほどつらき物のなけ
れど。そや晴れぬ。いそぎてくむかとみれば。このそれしも時のまなるべし。よしまほくみ
ても。夜のまよふり出でなば。おしながしてえうなき事よなりなるとて。夕日のかまやく
よも。たゞうらわを徒に打ちめぐりてあるを。いかよとおどろかせば。あのむかひの鳥の
ちかうみゆれば。また夜半よのふり出でななど。いつしかくちがしこき事をばおぼえ
てけり。又あけの日もこれぬれば。そやく出づるかともみれば。朝いしてひるつかた。やう
く出でよまほくむが。それもいさかしてそやかへりぬ。その怠をとがむれば。出でよ
行くけしきをなり。いづこの神の祭などいへば。まほくますてよ出でくめり。つひよの林の
木々も。人よさらせぬれば。いとをいをよりこぬまよ。あみもよそのものとなしぬ。お

いいをのよりくるときも。人のとるをみありくのみなり。いまの髪ゆひ候といふ所
さへ出でさぬ。むかしわらわもてつかね。なへたるまほしひきいれてあしが。今の都ぶり
とやらん。みもせぬふりよし。さうりかさねたるを。音たてよきそひありくなり。日若き
ころの酒のむ事もなかりしが。この村里よもそやさけつくとく多く出で来てけり。
それらが爲よ。とさつひやし。さえつひやしてみつぎ物のさまたげとなるなり。このや
よも久じくすみ得んことのかたかるべしなど。さまざまいふうちよ。さよおしと思ひし
が。ふとみれば。いつかねよけり。翁もあまりの事よあされて。がまのさうもやめてけり
ある翁がまたこのうらむうちめぐりて。おなじむかしの物がたりよ立ちよりたれば。か
の翁もぬがり出でよ。ひたすら昔の事のみいひ出でければ。うしとみしよも過ぎよし
事。なづかしきものぞかし。むかしとてもえうなきものもありき。我が若き時など。庭の
まじへのみかた。その比のそやり行きしかたちをとがめられしとき。おやのいよしへ
りといひ給ふも。そのころのそやりもて行きし事なるを。心のそこよ思ひし事もあり
けり。されどげよいと今のまかうど。ふりあしくおこたりまきむ事となりてけり。むか
しつたまへくかうやうのひとありしが。いまのむかになへていづこの山へ海づらのさと

とてもみなそのふりよなりて。口よのかしこき事などいひて。老いたるものをあざむき。村の長をもてからせ。とてのおほやけの事を。おそれみうすきやうよなりなんと思ふ事のみおほかれど。つひよのおなじ心よなみだこぼしてけり

草木やしなふものゝいひし。西よりふくかぜの。草木をからしむむ。さるの西より北よ及ふべき故なり。北よりふくかぜの。極まれどや陽をふくむが故よ。からしきとめむとかやいひし。げよさもありなんかし

大凡躬行よてもあれ。人事よあづかる事よてもあれ。政よてもあれ。新なりといふもじをわするべからず。日よあらたなりといふ物か。事々よあらたよものよあらたなるべし。さのふの事よなれて。思ひあやまるも。かねてまれる事と思ひて。やぶれとるもおほし。かのかしこき人も。女などよまよひ。愚かなるひとよ救かるも。ひとつよ新をらねどそありけれ。さのふよくしと思ふ事。心よそみ。こぞのうれしと思ふこと。心よつきてとなねば。それより根ざして。まよふとかきけり。げよ日新の教こそ。萬よかよしして身を終ふるまでも。わするなとかたりし老人もありけり

ある吝嗇なるもの。ことしのことよものつひやしぬとて。および折りてかぞへたてぬ。ま

づ春より秋までかのいたづきよよてのめる薬もかむかりなり。それよかゝる事もありしなどかぞへつゝいふを。つくぐとさゝあし人が。いとさりがたさがうへよ。君が身よつきたるもの。ひとつあり。是をいひて費といへんといへば。なよなるかとよふ。薬のみ給ひをばるくけふなげき事もえいひ給ひじ。うくいひ給ふ。薬のめぐみなれば。それよむくい給ふを費と心得給ふるといひき。あひこれにこれを費とせちよ思ひけんのし

ふみつくり。詩つくらんと。視ひきよせて。朝より夕つかたまでも思ひこらしむたるよ。この焼君よりの御せう消息そこなりともてくれれば。ふんおしきりて。これよりいらへつかふま

つらんといへといふ。このむこ君よりのなり。せう尾との君よりのとてせうそこいだせば。みもやらず。俗事紛々たりなどいひて。かたならへなげやりつ。このいらへかくも文なり。けふの事をすこを學ぶ道なれ。かの量料平かなり。畜蕃足らむといひてすや。かゝる目のまへよある事をもよそごとよ思ふぞよかなき。されどまがえをもたれりとし。いさゝかからくよの書籍手まさぐりし詩よて。まが邦のいくさもの語などみて。時の勢ひもまらず。人情をもあさまへむ。例のことわりいひつりて。まらへなど教へひきいれんとする。いと害とこそなりぬれ。みやびよながるもの。道志る人よあらぬもの。み

よてやあらん

鶯のこのまだちするころ。あゝ鳥の巢よりとび出でしよ。第のり。羽もいまだとりのざ
るをまらで。つひよとびたれば。楯より落ちてけり。親どりいかよ思へども。かたちを
親よまさる計よ。羽のふくらかよおひたちたればせんかたなく。巢よ入りてよべども。
とよりとび得ざれば。たちかへるべきやうなし。二三日たちてみるよ。おなじところよう
づくまりあたり。とらへてみれば。うごきもやらむ。いとうゑようゑたるさまなれば。一夜
さまざま餌をあたへてけり。あけの日の。餌をやらんとまれば。おそろしき姿しておどま。
まのふりうゑてければ。その心も出で来ざりきとみえき。人をおどすべくければども。
のまよよしてころさんも志のびきとて。とぐみやりけり。廿日むかりたちてければ。羽
もよくとのひぬ。さらばとてもの木かけよつれ行き。かごよりやをら出だしたれ
ば。おのれからうじてよげ出でしきましてとび行きぬ。親鳥も人のかくしてかくてな
ちしぬまらむ。かしくかごをのがれ出でしと心得しきまして。つれておよけり
老いて齒のぬけしや。脾胃のめぐりもあしく。まかきをりのごとくならぬ。和らか
なるものくへとなり。さるをかたきものなどまひてのみくだせば。つひよ害となる。耳遠

きとやみぞかよものごときかぬ爲なれば。ものごとよ速ざかりて。ものよかくづら
ぬがことわりなり。さるを人中よたちまじり。そしられらるゝとまらぬも有るべ
し。これら聊ながら。おのづからの道よさかふ故となんいひま

友よ交る道。いかなる事か心得べきといふよ。友のその所長を友とすべし。ふるまど好
むよ。そのとよ友とし。武技このむよ。それよ友とし。歌よむものよ。その道よ友と
するぞよき。さるよ歌とてもこのふりのあしかり。かれよまねび給ふひがとなりなど
といふよも及ばじ。たゞ交りてこそ。あるべけれ。古よいふ管鮑の交といへども。このふた
りおなじ徳。おなじ心なりしよもあらじかし。よの中よ同じころの人といふもの。い
とまれなる事なるべし。たゞわが好めるかたよ引きいれんとするもうるさし。このひと
このところの長じぬれど。こゝのいとみじかし。そのみじかきところを引きのべんとす
るのいとくるし。さ思ふわれも。またそのみじかきところあるものを。ことよ思ふことみ
ないさめものせんとするを。かの信と思ふたがへりけり。交るがうちよも知己のひと
なり。いとまれなるものなり。それらよくことばを求めなば。もとよりのいふべし。されどま
ぐすべきよのあらむかし。浅き契りの友なりとても。友といふうちならば。そのひとの

うへの存亡よかゝる計のことならはいふべし。まづてしひてかくせん。かくまぐひてんとまげてもと思ふ。みな中道よの背けりといはん。たゞその所長を友とすれば。まじりしがたき人もなく。われよ益なき友もあらじ。かの友よよてわがかたのみだれんとする。皆その短を友とまざる故なりとこたへしものありきとや

花のちる。うてなのうちの實のおほきやかよなりて。そなびらの居どころなき故よちるなり。この雨よ花のちりぬといふ。雨のうるほひよて。かの實の大きくなればなり。秋冬よ至りて。葉の落つる。わかめのくきのうらよりめぐみて。そのわかめの大きくなれば。ふるま葉の居どころなければ。ちるなりけり

ある女いぼといふものえりのあたりより出て来て。一夜のうちよかまましてけり。いまひとりのひたひよおほく出て来て。さめといふ魚のかわなんのごとく。星あるかぶとよりのまげくみえき。女のとなれば。いとをげきて。めぐろと云ふ所よ。たゞ薬師と名づくる佛のあるを。人の教よまかせて。信じてたこくのじと誓ひて。夜ひとよ心をこらしてねぎごしたり。夜あけて。手あらひかほなどあらふ。隨ひて。二つ三つ々いぼのおちよければ。いとうれしくて。猶心こらしければ。二日三日のうちよみなおちてけり。かのひ

たひよ出て来しものもみならひければ。これ十日計よわかもがさのかせたるやうよ。霜のごとなりて。みなきえぬ。かほどの靈妙なる人が。たゞ心のせちならねばこそ。さまざま心のなやみなどのありとなん。人のいひし

ある人あしの疾ありて。あゆむともえせむ。いといたうなやみてけり。みとせよなりよたれど。いさゝかおこたらざりしを。あるくすしみて。この薬まぬらまべし。みとせもへなば。つねよふくすべしといふを。さらばその薬のみてんといふ。かたらのもの打ちさよて。このうへみとせとして。六とせの間のくるしみなるをといへば。さよのあらじ。その薬よよてみとせたちて。もとよ復するならば。まづひとよせたちなば。いまよりのいさゝかよかるべし。二とせたちなば。猶よかるべし。かくてみとせよてもとよふくしなん。いかでみとせがうち今の如くよして。みとせたちしとして。よこかよ本よふくすべきか。今よりいさゝかよても。年を追うてよからば。みとせのさらなり。尤とせよてもあれ。薬のみなんと

いひま

ある人庭このみて。こよよやまきづきて。この木をうゑ。こよよ池つくりて岸べよ何うゑんなどいひけり。いつくくるるといへば。まづこの木をこなたへうつしぬべし。この木の

こん春うつし。これハ秋うつしなん。うつしをわりて池をほりて。其土もて山築かんといふを。例ものいそぎし給ふよ。これ計のいと心長きとの給ふ。二とせみとせよての。いまだまたき山水のけしきハなきじといへば。此木いまうへれば。かるゝを真し知れべ。今うゑんの心ハつゆもなし。これハ立冬のころかれば。立夏のころうへべし。此草ハ清明のころうへべし。いまみてをかしと思ふ計の大なる本山などようゑたらば。枝もかれなどして。風景をそんぐるなれば。五六尺のまか木うゑて。この山よておのづから長ざれば。心の外のけしきをなすものなり。いかて二とせみとせよまたくそなるべき。十とせもたちてこそ。をかしうもみるべし。いまよそかよべきものならぬを。真しゑりぬれば。初めより物いそぎまるころの露もなし。いちそやく功なさんと思ひ給ふ。木草うゑる時を。真ししり給ひざる故なりといひき。げよゑるハおなじくゑるなれど。真しゑるよあらざれば。ゑるといひひがたし。古のつりたれしひと。真し時をばゑれりしなりと。また人よかたりしとぞ

櫻のこをを鹽よし。壺よたくいへ。^封ふんつけておきけり。まれ人のおひまるころなどと思ひ置きたり。夏のころまれびとおとしけれど。酒もくみ給ひねば。かゝるをり出ださん

玉のさかづきのなよとかいそんこちまればとていさき。またと君き給ひしよ。酒このみ給へど。みやび好み給ひぬものよ。いかでとてふんさらむ。秋の末つかたよなりよければ。このごろかへり咲きとて。こゝかしこの枝よそかをけれども。さくともあれば。これをもそれと思へん。いとうらみあればとて出ださむ。ゑこそこのころ。例の草木うるかたよ。櫻ハさらなり。藤なんどもさかせて。うりひさぐといふをさげば。いかゞせん。それとひとしむらむといと口をし。こん春もそやちかし。さればとてたくいへおきしをなを。むげよなまべくもあらむとおもへど。まれ人もおのせねば。せんかたなく。只酒のむ人の来りぬるとき。ふんきりて花をとり出だしたれば。まらうど打ちみし計よて。やがてくひさしながら。これハ志ほけあるをななり。このごろさるかたよて。酒のみしとき。盆ようゑたる櫻を出だしたまひしかば。盆ようけてのみぬ。花ハ志ほけなきこそよかりけれといひしをきよて。なみだおとしてくいけりとかな

秋の末つかた。雨かぜことよむげしく。たかどのゝたぐひ吹きあらまもお不かりけり。その冬よかありけん。眺望よきところよいたりてみれば。あないのをのこが出て。ことし秋の嵐よこゝのたかどのかしこのうてなも吹きたまればけり。されど此ひとつむかり

ら。あらじよもさうらざりきといふをみれば。いといたうふるまたかどのなり。いかよし
 てかたとへば。人のおろくのほりて。風の吹きくるごとし。聲あげて居たりしが。ひとの勢
 ひいかよもおろしきものよて。かくありけり。川の堤またの橋なども。皆のくし
 てふせげぬ。みなざる浪もよきて行くとのきぬるといふ。げよわれもきしとなり。さ
 れどこの高殿のいとふるくて。人ふせげともたふべしとの思のぬを。ふせげしてだても
 ありけん。猶たづぬれば。ののあるじ。人をえらびてふせがせたりしときぬといふ。聲
 たるきをのこえらびしよとへば。きよのあらせ。人のうやをうちみて。あれのとくの
 ぼりて防ぐべし。あれののほり待るまじといふ。いうよこのとみのとなるよ。人ざらひし
 給ふといへば。あれのいとうすき相なり。ゆるとをさせそといひしとのたりき

晴雨をよくあらむじめいふものありけり。あすの雪ふらんといふ。その日はなれどふら
 す。風とげしおらんといふ。その日はなれどふかき。いよしつるとよといへば。こよふ
 らねども。いづこかふりしなり。こよふふらねども。いづこのふきしなりといふ。さく人
 らふ。のちよきけだ。その日とお根の山の雪ふり。むさしのあたりの風いととげしり
 きとぞ。おのの里の晴雨よたがへば。人のとらひぬまぬられじ。さらばいとぬよのまうじ

るじ

今の世畫をおのむも。おやうた畫をまらせ。されば尊ぶべきことをいそいで。たふとらぬ
 とをあげつらねて。たふとふなり。畫のとなよのるものさけんごとく。おとむと文章の及
 ばざるをたまくるものなり。いでやくろごまろごといひ。いひもしのさもそれど。ゆるを
 くるさといひ。とあるをまろさといひ。何をもちあらぬさん。さるよおの畫ありておそ。おと
 むよもいひがたごを。そのまよもあるなれ。まして古のさまより。代々の服章風俗なん
 ども。文章もて傳ふとも。おの畫なくしてみざるもの。みるやうよのいのであらん。書
 と畫とを左右の離るべのらざるがごといへる。畫のたふとをよくしりたるなり。し
 かるよかれよくあがくものなり。筆をくだせば何となうくもの勢ひをなすつ。ある
 速山のほのくみゆるも。うなばらのうちかきみたるも。心よ造化をこめて。筆よあらぬ
 すよ。妙なることなりといふ。たよ一技よしたるなり。いそごよこまよくまのま。まりよ
 くけるといふよひとし。たよそのたふとごことしらざる故よ。たふとからぬことをあ
 げていふ。かへりて其道をけがすなりといひ

源氏物がたりの心ふるくつくれるがうちよも。おとよといいたう感じぬる事あり

けれ。その中よもまのさまらひ。生涯のいとほきなることなるよ。そのとじめは花の宴の巻よりおありたるを。人の心の靈妙。いゝでそれをのんじしらざらんと思へば。そのおとをのいおけり。人をくなくけるけひひなり。おくのくるゝどもあきてひと音もせき。やうよてよの中のおやまちのするぞのしと思ひて。やをらのほりてのぞき給ふとらいたる。いとをのしといひぬ

醫國のよじよむ事。あるさおとよのあらざりけり。ちのさおろのいとめておたぶととなりしよ。ある人のいひし。醫書の和解などみたるが。およてえうなると思ふおと。つまびらるよしておよぞと思ふ事いとあらじ。おしをへていへば。えうなまおとぞおほめる。いまの世。もたらくすしのふみをよみて。もろくのやまひをいやさんとせるものもありぬべし。人もめづらさよのたぶくならひなれば。たのむものも出ておよけらし。もしひたまらよなりもてゆらば。あやふさおとよおそとひともしふなり。いゝよとなれば。おみじのよじよむとて。その心をよしうるとも。唐國のふみくるおとくよ精微よいたらし。いゝや不學なるもの。字書をのたそらよおきて。ひとつゞみつよむたぐひならまし。よくしてありあふ醫書。師もなく口授もなく。代々の末書註

釋もなく。字書のまよくよみくだすとも。いゝでつまびらるよの得てん。おみじの文のそのたぐひとやいふべのらん。其もじとてもくわしくよがものよのなりがたきが故なり。いまいふごとく。醫書の二部三部。師もなく。末書註釋もなく。たぐひと通りよみ得しもの。よのよ濟生の術をさんとしても。信じがたくやあらん。まして風土もたが入れば。草も木もわが國とのおなじうらむ。うまれ得し人もまたたがひぬべし。さるよおほらげよよみ得て。似よりたる草木とりて。風土たがひして。ひとよあたへんとせるいゝのよかあらん。たゞ珍らしきをおのむ心より信せるやうよもなるべのらん。醫學十年の功つみて。治療をといゝや信じなん。あらやまとのくましのふみのるぎよよみ得て。治療せよして老よいたるくましも少ならずじを。まして醫國のくすしの。まよくよあなたへもたるもおほのらねば。そのおほのらぬ書をうたおとよよよして。いゝでそのふりをなさんといふたぐひならまし。ちのさおろ。醫國の草木のおとらいたるふみを和解したるをば。ありあふくましのたすけよせんといふ。いゝとよべなり。いゝよも民間の妙薬とて。功いちじるさもおほければ。またうの國のおとよとて。よき事をもよくむら屋の上のあらまをよくむたぐひよして。そのよきをしるの教よもたがへりなん。されどのらやまの

傳ふるをよもよとして。えみじぶりのくすしのみちひたまたらあたらしうものせんとまゐるひともしいでくべきかとして。おの事のおほくえうなきおとをまづいふといへりけり。げよおのおとの人よものよりぬるおとなれば。よそごとよのせじとおもひて。あたりけんあし。さらでもえみじぶりのこと。なよとなうそやり行くなる人情の。いといたうこのまじあらぬといふこともさうたれば。あらくくりごとひよけんあし。ひとなみよりの聲たらく。心つよく悪なるものが。あが思ふまゝのことなどいふを。いとことなりなき事としりても。こなたもおなじく聲あげて。あらしんもえうなき事なれば。そのまゝよなきおくなり。さればいよくわれ計ことありあるものやうよおぼして。あらしをよせよ押し舟をくがよといひん計よなり行くめり。うしろよてのわらひおしれど。あらしよおよおよばざれば。しらぬさますれば。いよ／＼高ぶりにてむうどくのふるまひなすものぞあし。ましてあしきも人よまぐれたるが。心つよくことなりなきことを押し立てて。世をおろひ人をあすめて。しづらくあちをとるもの。古のふみよもおろきをみるべし。それよよても思ふべし。うの至大至剛の浩然の氣。あめつちの間よみつるてふこと。げよさもあらんかし。あしきも一筋よ行ひてうたがなざれば。ひとたびのよをお

わひぬるものを

閉藏の氣ひとたび變じてひらけ出づること。かならむ風吹き雨もそげし。またのびたる陽氣のひとたび變じてひそまらんとするなり。かくあるなり。いかでか雨かぜのとなをねだみ紅葉のあだをなさん。おなじくふる雨なれど。ひとへのとなよのそやちりなんとうらみ。八重のかたよの咲き初めんと待ちものし。この雨いつかそれなんと。麥つくものいひ。雨こそうれしと苗うゝるものいふらん。むぎつくかたの雲をこらし。苗うゝる空のふらせんと。いかであらん。かの小民うらみをげくの。たえぬものとやいひんかし

孔子喪あるをり。つねをかへて拱手し給ひしを。門弟子それをまねびしかば。二三子學をたしむの甚しきとの給ひしをもてもしるべし。いよしへかたちの教ありて。かたちよりうちよ及ぼしてこそなるべきを。いまの心もて心をさめんとして。勞しても功うをまよのあらむや。まして勞するほどよ至るもすくなきをや

事よ處するよ利害得失よ心をつくるもうへなれども。まづそのことの筋をよくみて。さで利害得失をもてらしみるべし。よよいふ才あるもの。まづわが利害得失をやくみゆ

れば。利よつぎ。害よ速ぎからんとのみして。その筋をうしなふなり。たゞ害ありとも。かくすべしといふなりといたうおもさすぢの事なり。さればその筋のおもごと。かろごと。利害のおもごと。かろごとをかけ合せても。その筋のかたおもさる。害よあふとも。その筋よしたがふべし。また才なくして。筋よもくらく。たゞ一筋よ心うるもの。すぢのかろごと。おもさる害を得て。辭せじとするもありぬべし。才ありても道まねびて明らかなるよあらざれば。かろごとをおもしとして。つひよ道うしなふものこそ。おほかめれ生れてものおほゆるころより老い行くまで。いさゝかもおこたらををる事あらば。かならぬいかなるよぢよも秀でぬべしといへば。たゞよ心もちふるよあらざれば。いくたびなすともうべしと思はむ。このめしくひ。しるまふものおほへてより。日よみたびぬかくることなけれども。かくせんと思ふころなけれども。めしくふよ上手もなく。かへりてくひこぼし。またぬいをのねたてしよなどいふもあるべし。さればかくせんと思ふころぢの。ひとつなりといひし

くすしの心得べきことをかたり給へといふものよ。まづ師をえらぶべし。よよいふ才あるもの。まねぶところあさく。味ふところうすし。年老いたるいしのしかも文などもよ

く味ひ。治療せよなせども。晝夜殊よ奔走をるほどよもあらぬものよならふべし。わが規矩を守りぬるもの。世中の交を心よせざれば。ひだりもみぢりも。南も北も。とりもちふるやうよあらぬものなり。いまいふとやるとかいふくすしをみてもあるべし。をべてまたものよかたよりて。傷寒論中の藥のみ強ひて用ひんとするも。東垣などの流よよるも。また用よの立ちがたし。古今の方より俗間の方までをもちうみ。それを心してつかふもの。たのむべし。さて師としても。其師の辭をよくみて。己が心よいましむべし。いまそ師の辭を似るをころとし。そての老いたる師なれば。こし打ちかゝめ。老辭まねびいださんぞそらかへぬべき事なる。さてものをもよく習ひおぼえてのち。病家よ始めてゆけば。こゝぞ大事とこゝろ得て。診察のさらなり。じとりてもたやまくのもらむ。この心をちくもわまるべからむ。其うちむづかしきやまひあれば。たゞ心よかゝりて。よのあんじものし。あくるまちて行きてみんと思ふ。この心をもわまるべからむ。藥あたへたるが。つひよ救ひがたきよ至れば。一日二日のものくふこともえせむ。心を傷むるなり。この心猶よするべからむ。さてその心よも。人々おのづから感じて。いと年若けれど。せちよ心用ひぬ。かの風もおこたりぬ。こゝのつかへもつひよいえぬと。をさなきもの

の筆とりて。かくよよまことをなけれど。みるものその効きよしての能書をりとほむれば。みづからなまことの能書と心得て。下達する如く。風のこゝちおこたりしとして。ほむるも及ばざれども。年々かくしてと思ふ心から。人もめづらしきをよろこぶ心よりして。もてこやまをわが心よも慢ぜるさざし出でて。せちと思ふ心もうすくなりぬ。もとよりつたなきよつとむる心もゆるびたれば。病多く愈えを。またまねく人もなし。この時ぞくすし終身の覺悟の定まるときなり。このときよく心得しが。名あるくすしといなるとなり。ひとまねかねば。黄橘のくるしみよせまりて。どが方より規矩をまて。病家はへつらひ。またのどが道をば次よし。酒などたうべさるがうやうのことなどして。それもて人よ用ひられんことをほりまるとたぐひ。其餘さまざま利よししりて。つひよわが業よ怠るものもあるぞかし。さるよ人まねかぬをりもどが規矩亂さを。潜まりゐてふみくよくみて。心よ會得し。みとせよてもあれ。いつまでも心をかへを。日をあらせて。ものくひなどして時をまつ。かくのごときもの。時よあへばかならむつひよ名あるものとなるなりと。まめだちてことさらよいひし。くましのこのみよあらをかしやんごとなきひと。よのかよいたづまよかゝれりけり。たやまからぬさまなりければ。い

まこのくまじひとりよまかせんもいかゞなり。かれもくまじの道よのよのつねならぬは。これと心を合せて。藥調ぜよといへば。はじめのくすしかうべふりて。さらばそのよのつねならぬものよまかせ給へ。かゝるとみのいたづさを。療治せんよひとをかたらひていかでいでくべきといひければ。げよもとして初のよまかせてければ。そのいたづまもまみやかよ怠りぬ

時ありとてや。楯より心かろくちるもみちむの。庭よりちつもれば。こがらしの風の楯よ解たえて。庭のおちびのいまさら時めさがほよ。まひつさるるつ音たつるもいとさざがし。かの世捨人の今さらまた人まじそりなをよたとへつべしといふをまよて。げよかのつかへかへして風月の全身よほこるなどいひんよ。よの事をばちりひちの如くおもひまつべけれど。わが家をばどが子よゆづりてしうへ。わが今の戦の風月なりけりとて。後のことも家のこともよそごとと思ふべくやとへば。いかでさあらん。大君のみおやよたまひそめしこの家のゆづりを得て。また御ゆるし蒙りて。その子よゆづりしなるを。いかなりともよそよみんな。かの獨善の人ならんかし。されど其子の爲。家の爲として。また落葉の立ちまふやうよし侍れば。其子のまべき事をもかまめ。其威徳をもけつべき

なり。さればとて物よそへなどして。少し力たすくるやうなる事。なまじひなること
 して。徳なくして害となりぬべし。もとよりその子のごえよしたがひて。猶かねてよ
 り猶そのたまくるものらよりして。心をなへもあるべきことならんかし。いつこの家よ
 もあるならひよて。よしこともつれたること出で来ぬとも。その子をもしのぎて。よし
 清らに打ちそゞざたりとて。後の爲よしといひて。後の害をもいとこでなす。こ
 とよことなるよあらざれ。いかであらん。されどもこのやまき事なるべし。後のかひの
 おもきと。今のおもきをよく思ひくらべて。やむことを得むべきとも。中國よりまば
 しえびきの力かりしやうなるくいごとをもおもひよかるべし。たゞふたりの君ある姿
 よなしつ。後の爲よあしからぬほどをなさんの道の。時よもよるべけれど。いとかた
 きことよて。猶後の害ありぬべし。たゞつかへかへしぬるみよし身後の心ちとても。
 いけらんうちこそいといたり大事なれ。いかよとなれ。この人のとちめなればなり。こ
 かきがうちよしあやまちし事ありとも。またあらためて後も年をつむものなるよ。人
 のとちめとなりて。改めての後とても。いくほどのあらん。さらばつかへかへし。人の
 つかふるうちよりも。物ごとつしみてこそありぬべし。

わざひ福なくみあふなごとなる事。もとよりしれることなり。もろこのふる
 ふみの世々の亂るゝあとをみ給へ。いといたりめでたしといふ所より。亂るゝをしをな
 すものぞといひし。一ことながら心とむべき事とや
 ある山里ありけり。人もいとほくまみ居て。なよとしき事なく。家々みなとみたりぬ。
 糸とりた織りて衣とし。みづからつくりしいねむぎかり改めて。一とせの食とき。外よ
 もとむることなけれむ。その里としを逐うて繁昌す。海も遠からねど。よもよまをへだ
 つれば。關を置きてこと里より物あまふことを禁む。いを月よいくたびと定めて。ほ
 したるのをかい采りて。むらのうちうりひさぎてくふなり。こと村へいづるものもなけ
 れば。うらやむ心もなし。こと村よりいと密めれむ。こゝへいをなどもちこしたらば。めづ
 らしさの餘り打ちこぞりてかひなと思へども。そのむらの掟たゞしくして。やぶりが
 たし。ある浦の長としごろ心よかけて居けるが。かの山里のうちよも心あふするものあ
 りければ。それと調ひあはせて。いをなどりりくることをゆるされぬ。いでやとてもちこ
 したるが。めづらしきうち。鯛よ。ままよとかひひけり。またことうらのもの。うちま
 て。むかしよりかの山里へうらまほしくおもへど。掟あれば。もだしるしなり。かのうらよ

り魚ひさぐとほろぬ。うらよへだてのあるべしやとて。またもちこしたり。もとやかの里人とめんやうもなし。こゝかしこのうらよりもちこして。名もしらぬいをみるを珍しいひしが。それもつねよなりよければ。かふものもなく。山こえさしいをおほくくされめとてうら／＼よりうらみなどいひぬ。その里能くかきものらることうらの人々よまじられた。むかしよりもてまじふりもたがひつゝ。いをなくてのものくひしやうよおぼえぬ。みづから織りてしまぬさん。面ぶせなりとて。ことものこのみぬるふりとをりてければ。とみ榮えたる里なりしが。衰へ行きて。ことさとの人々あまたいりくれば。あらそひごともたえざりしとかや

年ふる鯉のありけり。いかよして様々のことよもかゝり給んで。かくまじ／＼給ふやとへば。さらばかたりものせん。かぐそしき餌のあれは。とめまてもくまほしきことながら。あれど大事のことゝ心よしめてみれば。あやしきことあるものなり。さおもひつくれは。ひれふりて速くのがれて。いさゝかもかへりみせ。よそのいをもあやしきことよとの思へど。速くさることをせず。さらべなんどのかのつりむりてふ物よかゝりて。いかほどもとらるゝをみながらも。とよかくそのかぐそしきよ心つながれて。あたりをなれ

をありきて。心のうちよの悪かなるいを共々。みなかの餌よとらるれど。いかでわれのかれよものせられんとかもへど。ひめもすこのあたりよたゞよひぬれば。かのあやしき外よ餌のなきよせんかたなく。立ちよりて少しくひてんなどゝ来るうちよ。つひよのぬゝもあるぞかし。またあみといふものあり。ざと音しぬれば。四方みなあみの目なり。このいかよせんと思ふよ。あるのあわてさわぐもあり。又の何計の事かあらんなど。かしこま人もあなどりて。をどりあがりてこえんとし。またのやぶらんとするを。人のもとよりひとなれば。様々よあつかひて。つひよとるぞかし。われのかのざとおとまるをさけば。心しづめて水そこよつきてをなれば。あびまのうへのかたを行きぬ。ゆゑよとらるゝことなし。かゝうそあじかなんといふものもあれど。深くひそまりかくるれば。そのうれひもまぬかれぬ。また俄よ雨ふりいで。思ひよらぬあたり。またのつねいさゝか水の落つる岩がねなどより。瀧のしらいとくりためて。おちそふ勢ひのとげしきよ。こゝろもうきたちてかの龍門の瀧ならぬことゝしりながらも。あまりよ心ちのよさよほだされて。その瀧をのぼるよぞ。あるの岩かどよあたりてまづゝくもあり。からうじてのぼりぬるも。雨やみぬればいと淺き瀬なり。かへらん道もしらねばふかきところ／＼たどりゆくを。ゆ

く人などのみつけてとるぞかし。かうやうのよそかなる勢ひよものらをして。かく百とせをもいくたびかへよけんとかたりき。

ねぎめの里よゆきてみれば。あないのもの出できて。この岩の獅子といふ虎といふなど教ふるもうるさく。いかでこのしよなるべき。これもまたとらのかたちとみえぬをなんど。一つくひひけたして行きぬ。そのかへさの道よ名もなき岩のありしをふとみれば。よくもましろのこしかけしをがたよ似たりといへば。げよと人もいひけり。あとよりきたる人をまねきて。ましろよたる石ありとほこらしげよいひて。これみ給へといへば。よたるところなこといひけり。あけのとし。かのねぎめの里へ行ってみしが。あないのものよいひしことば。そやよをれてければ。これのとらのすがたなり。これのしよの勢ひなりとみなしぬ。えじめのとらよしよよとまよてみれば。よたるやうよのおもひざりしが。

こゝに行幸あり。そや鳳輦のまでよかまよまみゆるほどなるよ。市巷の雜人むらがり居て。何となう人の聲のひまきよたるを。前驅をんどもしりめぐりて制止せるが中よ。ひとり大なるこゑ出だして。そやこゝに行幸あるよ。何とて聲高うのまるぞと制止たれば。む

らがる中よ。たれといなけれど。その制止せるこゑ。それらが聲よりいと高しといふも。人おほければ高くきこゆ。彌いまゆきて聲高よ雜言まじへて制止すれば。猶いと聲高く。制止する聲いとたかしとどつと笑ふ。

仙びとをめぐらしとひとにいへど。よのさかしま風よのり得て。ありくひともあり。えうなきものをかひやしなひて。たのしむ人もあり。つるをめでかめよなれて。齒むさがる人もあり。ひさごの酒よよて。心の駒のつなぎがたまよ至るものもあり。千とせを一時として。このよよながらふるうちよ。そや名ほろぼをもあり。春なまどこのみて。一日を時のまよつひやすもあるべし。たまやまびと。よしえうなくても。その名にいまよ残れど。いまの仙人のまねるもの。このところたがふよやととらふ。

あなより出でたる今参りのをうな。年もいとわかよりければ。人々何くれとあざむきなどしけり。たそがれの比つかひよ出でぬ。かへらん比のまだくれじ。かれをおどろかしてんと。門のうちなる柳のいとしげりたるあたりへしろきよぬ引さまとひ。女の髪亂せるやうよつくりて置きけり。ものよけぢめもさだかならぬころ。かへりよけり。柳の前を通りたらば。聲あげてよげまよふべしと。いさころじてのいまみあしが。何ともいって過

ざよけり。柳のあたりより。おの比へんげのものゝ出づるときゝしが。もしみやとゝへば。げよも柳のあたりより。白き衣まじ女のたちてぬしやうよみしとておどろくけしきもなし。いかよしておそろしくおもひすやとゝへば。都へ出づる頃。たらちねのこのくわんのんの御守と。此のゝと。おだてなきでよとて。袋よいれて給ひぬ。へんげのものあらば。かんぜおんも此のゝ御神もましますん。かれわれをころさんとせば。守り給ふべし。神も佛もなきよならば。へんげのものもあるまじと思ひしなりといひしとぞ。

源氏ものがたりより。薄雲の后よ心をかけそめ給ひし。たらちねよようよかよひ給ふと。さして。何となうをさなき御時よりした。しく思ふをそじめとせしさまよかけるをかし。花の宴のとき。酒のまひよまざれしあやまち。つひよ身をおふるわがそひとなりしも。そじめのほど天が下よと。ろきたる御いきほひ。つひよ神の巻よいたりておとろへよたるころ。御みづからの行ひも。いと亂れもて行きて。さざのひうながしけるさまも。かならぬかゝるものなるをかいのせ。ままのさまらひよ至りても。御みづから答なきやうよひ給ひて。何となくぬれぎぬき給ひしふりよかけれど。そのうらのなみかぜのとがめよて。大ぞらのゆるし給ひざることをあらにし。つかひのものらが都のなが雨のこと

などいひて。まざらしゝのち。大炊どのゝかみのおちけるも。すまのうらよ限りたることを示したるいとたくみなり。また源氏の君ふたゝびかへり給ひて。繪合よ至りて。大臣の心いどみあふけしき。つねよみづからが威をふり給ふさまをみるし。後よいや高くなりまゝり給ひて。何のまざのひかあるべきと思ふ。女三宮のうしろみのこといできて。をりまたくし給ひざりしよと。まれるぞ殊よおぼえぬ。女三宮のものゝけり。柏木のいきすだまなどかくべきを。この人もしらねばさかかて。かのみやまどころの人の心の残るより。たかゝりけりとむかへて。思ふ心をしめしたる。いとをかし。その比。藤氏のさかりよなりて。君をなみしゝいきほひを憚からむかいて。源氏の君を大臣の列よくへ給ひて。藤氏をおしおづめしことも。夕霧を大學寮よいれ給ひしも。皆かゝらんか。しと思ふことをよそごとよしてかけるぞたふとき。げよまたなきものがたりなりけり。さればみるごとよ興意の深きをおやゆ。たゞ佛の道よのみいりて。誠の道よくらければ。冷泉のみかど。光君の御子なりしことをそじめて。まろしめしたるところのかいさま道。まらぬよりして。あやまれりけり。このみぞ女ららべなんどのみても。道ふみたがうべくやと。危ふくぞ覺ゆる。薄雲朧月夜なんどの人の道よ背ける。さらそべもまらぬべ

れば。まよふべしとなおもてすなん。佛のことをばやんどなくたふときかざりかけれど。よるの僧のようなき事さし出ていふさま。みところよまでかいたる。またをかし。此のものがたりを。たゞよあわれをつくしたるものよて。させることよりあらうしたるものよあらむと。もとをりのいひたるをかし。されどもとしく心こめてかいたるよいうたがひなし

藤の花のちのうみればうつくしけれど。餘りよちのづくればのほりのまたよらむ。となやのよさくうとみれば。未までのひらき得む。ことよおのれひとりさかりをみまるとうたく。のならむこと木よよりたけ高さ勢ひみまらるが。そのよりそふ木の枝もともみえぬ計よおほひぬれば。その木もつひよのれぬるよぞ。されひとり心の心へみえて。木高く咲きみちぬとおもへば。嵐などよあふとき。もとよりうれし木なればうちたふれてけり。高うみえしをなもつひよくさむらうづもれて。またみる人もなし。代々の小人の情態よもたとへつべしと。ひとのいひけり

しうねきふるさの山吹とよこなつなり。春も過ぎて桃もさくらもひとつ柳とみゆるよこさませしをるのよしきも忘れぬるころ。山吹のいさくう咲き出でたるもいぬぬうらみどふるげなる。また花さへちりて。あちさおもおもるげ残すころ。そのなげよ咲きたるも

深川の八幡のやしろのまつりある日。おほくの人みよいさけり。二つ三つむかんの子をいだきて。母の行きたるが。大なるとしあり。またらんとをれば。その子のひたなきよなきてやませ。橋をまたらじしへればなきやみつ。いよしつることよとて。さまぐよをれど。はじめよかいらむ。まづさらばこらよいこふべしとて。そのかたをらよあたるが。まむしてとしのうへのひとさあざたちて。聲のさざりよよびつよあわてふためまよげまどふ。いかなることよかむ。よくさげば。そのとしの半よりあちて。またりかよりし人。千人計もかちしとなり。それをさくよりぬの母もおほえをなみだちてけり。いかよしてこの子のしりつらん。神佛のたまけ給ひしなりとて。ふしをがみつ。いとぎかへりよけり。その子のみか。その母もしりたれども。たゞ私の心よおほわれて。てらし得ぬなりけり。もとよりそのまぎのひよあふもの。おもてよもあふれて。そのあしき色をおらゆすべければ。心のかみくやてらしけんを。あらざりしなり。この虫けらも其いくる道をもとめ。死すべきをいとひて。ころをよころなきものよ。なれちかづくたぐひ。

これおのづから生々の徳をなへし。大それたの御心よて。それをうけ得し萬のもの。みなかくあるべきことなり。さればうらよあらぬも。龜やきてみるも。みなあのつちのうちよあるとあるもの。しらざるはなく。感ぜざるはなければ。ひぢりも一つの教とものし給ふとや

人をしるは偏なき處よりあきらかなり。かの群すれば正しきを失ふ。いかでわが心くもりて。ひとの心をてらさん。わが才智きてんよて。てらさんとそれど時よとりくらき時あり。いかで照さん

家國のまがたぬ。まか〜とあらまほし。もし年老いたるすがたよなりもてゆけぬ。ものごとしづみえて。人よみしられじと。物のいろめも花やかならざれと思ふまでよなり行くぞかし。その心よりして人よ秀でんの心もとよりなければ。物の勘能上手もたええてぬるものとなん

大内家の強大なるより驕り出で。管絃亂舞。詩歌風流よ流れて。雲上のまねびし。もとよすべき武の道も衰へければ。終よ忽ほろびよけり。いといたうやんどとなき御訓といふよも。大内今川室町の事をば。鑒戒とすべき。御ひまきもあるなり。今も猶愚かなる例よ

いふなりけり。かの詩歌管絃など惡事よもあらざれば。自らゆるして節度の流るよをもあらむ。終よ武道を忘れて。物あらひとのなりよけり。さまがよあらき事をばたれもつしめど

やごとなきつかさの人よいひし。君はもろ〜のつかさのうちよて。いんまづ手とやいん。あしあればこそ手の尊きをもしるといふなれ。山のたかきもふもとの土よりこをいでくるなれ。あしなくば手もてこひありきなん。手もし足のかりりをなきば。あしかならむ手とやなりなんかしといひぬ

民草の雨風をいとふ餘りよ。さのふの風よとや葉末しをれぬ。この北の雨よたけものび過ぎぬれば。みのりも少なかるべしなどいふ。力ある民くさなり。此の雨よいかあらんといへど。さしてさなりもあらじ。あすさへ暗れなば。かへりておひ立ち早かるべしといふ。心のうち秋のたのみ心よかくれど。いふもさすがよ心ちあしければ。口よよささまよいふ。民草の力のおとろへしなりけり。おもさやまひよつきあたるゆかりのものら。けふもさのふもおなじさまよて。あしき事をなしていふ。やまひおもあるなり。と人のいひし

むかし兩頭のくちなひありしときせばとて。くちなひのおなじほとなるをとらへて。二つの尾をしかとゆひて。そなれざるやうにして。庭へそなしたり。一つの南のかたの草むらさしてゆかんとまれば。一つ北のかたの林へいらんとし。とみやゆかんとのみして。一つところのみ居けり。たひふれよかり立ちておどろかまれば。いよ／＼いどみあひて。一つ所よをどりぬけり。いかゞすらんとをり／＼みたるが。三日計へて。二つのくちなひやひらぎてころろをともしあひせ。尾のかたをなひのごとく／＼して。頭を二つならべて行くまど。つねのよりのころかよまみやかよそひ行きけり。げよ人もころろのひとつなれば。目も耳もころろよしたがひて見まし。手あしも一つ心なればこそかゝりけれ。もし一つ／＼の心ならば。右の手ひ左を渡ぎ。左ひ右をそねみ。手してとらんとまれば。足ひよそへ行き。左ひ左ひゆかんとすれば。右ひ右へゆかんとして。一つもひとの事たることひあらじかし。さるよいよしへより國のつかさたるものら。あるひそねみよくみ。又ひかたみよしのぎなどして。たゞよひが威をふらんとまると。何の心よかあらん。國家のことをよそよして。只よひがみあることをのみ心とまると。かくてひ亂れざる國ひあらじを。あがみよのみかゝづらひて。そのことをおもひぬ。たとひ何のさえあり。何の力ある

ものとても。何よかそせん

政をなすも時と勢と位とをしるを要とすといふを。ある人のいかのほりよたとへし。江都よていひ。春を待ち得しひ時を得しなり。風を得しひ勢を得しなり。よがみひ高きところよ居て。よもの楯を下視して。糸をそなつひ位を得しなり。そのいかのほりよもち。いとなどもつものあるひ。人を得しなり。風のほどをみて尾などいふもの。又いよとなどのほどをそかり。ひきつゆるめつして。風まつひ術なり。術といふもいかのほりよあぐるの外ならむ。べちよたくみよまべきよもあらむかし。昏愚の下民をまくりんとて。人ごとよとき。戸ごとよさとさるべきもの耳あらざれば。かりよ術を設けて。その道よらしむることもあるべしといひしもさこえぬ。とよかくよき事よても。その功なきひ。このみつをまちつくる心のうすきなりとなんいひし

人の上たるもの。心得べき古歌をと望みしものよ。いか計かありなん。いまむねようかびしとて。心ひくかた計よてなべて。よの人よ情のあるひとどなきといふをかいてものしたりとなり。ことむそふるまでもあらむ。いとをかし

騰をねるといふひ。いかよして得てんとたづねしよ天命を志るよあり。此志るひまこと

よあるをいふなり。只ここがねなどの欲のさりやすし。好名の欲ぞいとかなしき。古よも父君の命よ背きて、みを潔くし。朝廷の事をそしりて、直をうる。これを志のぶならば何か志のび得ざらんとまで。古よりいひしを也。只その天命をまことよありて。疑ふことをなけれど。つゆも心の煩なく。ちり計もけがれなし。獨寝ふすまよとぢぞとかいふ。かの法々たる氣ともいふらん

物の大きくみゆる人の。瞳子の中高なるよて。中くぼなるの物をさくやかよみせる故よ。速くのもののみえを。人よとのざれば。よの人みなかくみゆとおもふなり。陽氣おほき人の。水飲水浴して。ますくよきをおぼゆ。それをもて世の人かくれと思ふたぐひよて。かれよろこばんと思ひて云ふことをふづくむあり。うらまんと思ふ事をよろこぶあり。あが私智獨見よて。人をいかでそからん。敵情を察し。軍よかつものもあるを

今いふ費のかくせむともあるべきをなすなり。よよ云ふまといといふ。かくすべき事をせぬなり。いそぐ水をたぐみのうへよこぼしたりとて。いさゝかの水をふところの紙。手よあたるまよくつかみ出だして。おしぬぐひすつるもあり。またおほくこぼれぬる水よ。少しとり出で、ぬぐへど。水のたぐみよながれ行くを。またをこしとり出で、

ぬぐふ。つひよたぐみよ水の半入りてければ。さておさぬるもあるべし。水のほどよまたがひて。紙もておしぬぐふべきを。おほきも少なきも。そのほどを志らざる。みな聖のをしへよたがふといへば。さく人よらひて。かみなんどの聖の道などいかになれ。このいかよしてもありなんといふを。かみとて空よりふりさしものよあらむ。大君の賜よりして。日用の事を辨むるなり。己が家國の用度もいくさ出だすも。あしき年をすくふそなへも。のみくふものも。みなそのたまものうちよりして。わかち出だす事よて。これの己がものならぬ事なり。扱志よくして。わが物と思ふも。費やしてかへりみぬも。みなたまものなるを志らざるよりおこるとぞ。げよ國郡おほくたまひしも。そくなきもあるを。そのほど志らで身ををふる。力あるものよまねびして。重き物あげんとしても。それ力なければあぐることを得ざる。たれも志れるを。己がみのほどを志りたる人の少きこそをかしけれととらひま

さむきをさらふもの。寒さよさゆらむ。あつきいむもの。暑よあたらす。それこそすあやかよして速きと行くとも。つかるよことをなすといふもの。おほくあしよ病を生む。あれ目のあきらかなるよや。こるかなるもの。かまかなるものといへども。のがまことな

しといふもの。かならぬ目よやまひを生む。けふぬしらいたみ。さのふむねのあたりふたがりぬと。日ごとといふもの。大なるやまひうることまれなり。さかきをりよりくまりのみしとなし。やまひのいさゝかもあらすといふもの。とみよ大なるやまひをうるといへば。やむごとなきひときゝたまひて。げよもとてうなづきたまひしとか夫婦の別といふみち。新枕のあけの日。起き出でたらんときのことろを目をれぬをいふとか。人のいひし

鷹の羽よすむ虫ありけり。空たかくとびかけるとさ。そるかよ人の住家などをも見くだしつ。げよそれの事たれる身かな。つばきもうごかきて千里の遠きよ行きかよひ。雲のよとまでもあがるゆり。ことよさまぐの鳥のみなをわけてよげとしる。げよもそれよかつもの。大かたあらじなどおもひつ。かのたかの毛のうちよ居つ。まきりよまじむらをさし。血をすひてあしが。そのやぬらいとおほくなりもてゆきしよ。つひよそのたかもたふれよけり。それよりみづからいでよとびかけらんとおもへども。とび得ぬ。としらんと思へども。まみやかならぬ。血もつぎ肉むらもかれぬれば。いままのちつなぐやうもなし。からうじてまづその毛のうちをくまり出でよとひゆけ。すまめの子の

あたりけり。それをかそれなるとみれば。すまめの子のしらぬさまなり。いかよしてみつけざるかとかたはらへとひよれば。うれしげよみて。くちをしさしいだして。ついでまんとま。例なきことなればおそろしくてよげ隠れぬと。かの友どちよかたりよけりくましの道しり得たりとみづからいふ人有りけり。附子人參の人をして氣の上る病を生ぜしむ。大黃の類のものとよりおそろしきものよて。味もまたいとよがし。苓蓮のうちをひやすの毒あり。ましてそづなんどそさらなり。石膏のたぐひの石薬もと人を害するものなり。麻黄のひとをして汗をもらさしむ。たぐかの君子の名よびたる茯苓白朮ちんびのたぐひのみこそ。薬なりけれといひぬ。やまひありてもかうやうの薬のみ用ひけるが。もとよりかろかりしよ。つひよいえよけり。彌かゝるものよみ用ひて。ひと道よければ。これよあしく。毒あれば毒をもてうつことなんどもしらぬ。いかなる病かの出できたらんとさ。かならぬくい思ふべしと。人もいひけるが。そのもの幸よやまひなく。よひもいと長かりければ。いとまがおもふより外よくましの道なしとて。その子孫らへもいひおきて。家の掟とぞしたりける

雨かぜのときたがへぬといふも。甘露くだるといふも。かならぬしひごとよのみい